明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可　明治四十一年七月十五日增刊（毎月一回一日發行）

女子文壇

第四年第十一號　定期增刊

美人草



女子文壇第四年

七月十五日發行

毎號　皇太子妃殿下御尊覽の榮を賜ふ

▲口繪▼





第十一號目次

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當なり東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎艶麗劑 西洋皮膚 壽美禮あらひ粉 特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及び弊店が多年研究の上製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の十分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰 八錢

別製鑵詰 五拾錢

大袋 二錢

小袋 一錢

登錄商標

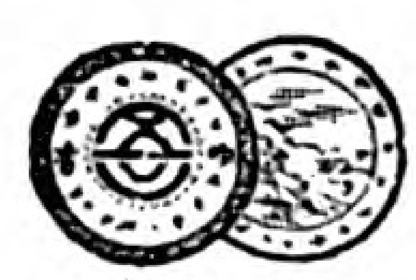
四洋色白くなるあらひ

SUMIRE
WASHLNG IOWDER

壽美禮あらい粉



五二會品評會 功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

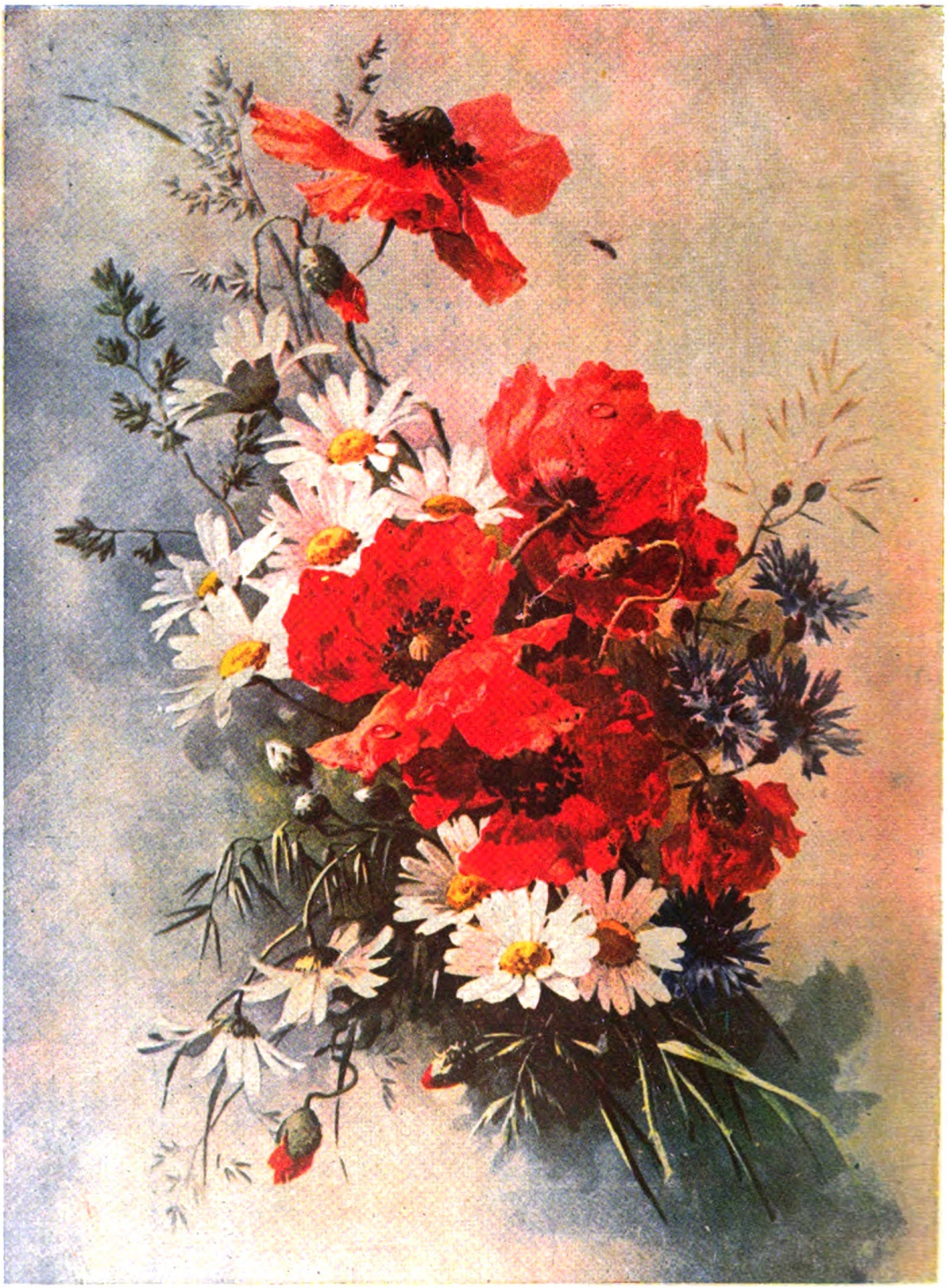
錫栓附乳白硝子壜入

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

製造本舗 東京兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

草の花



大江原色版部製版

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義錄の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

會員募集

講義錄は何時にても一號より送る

本會の講義錄

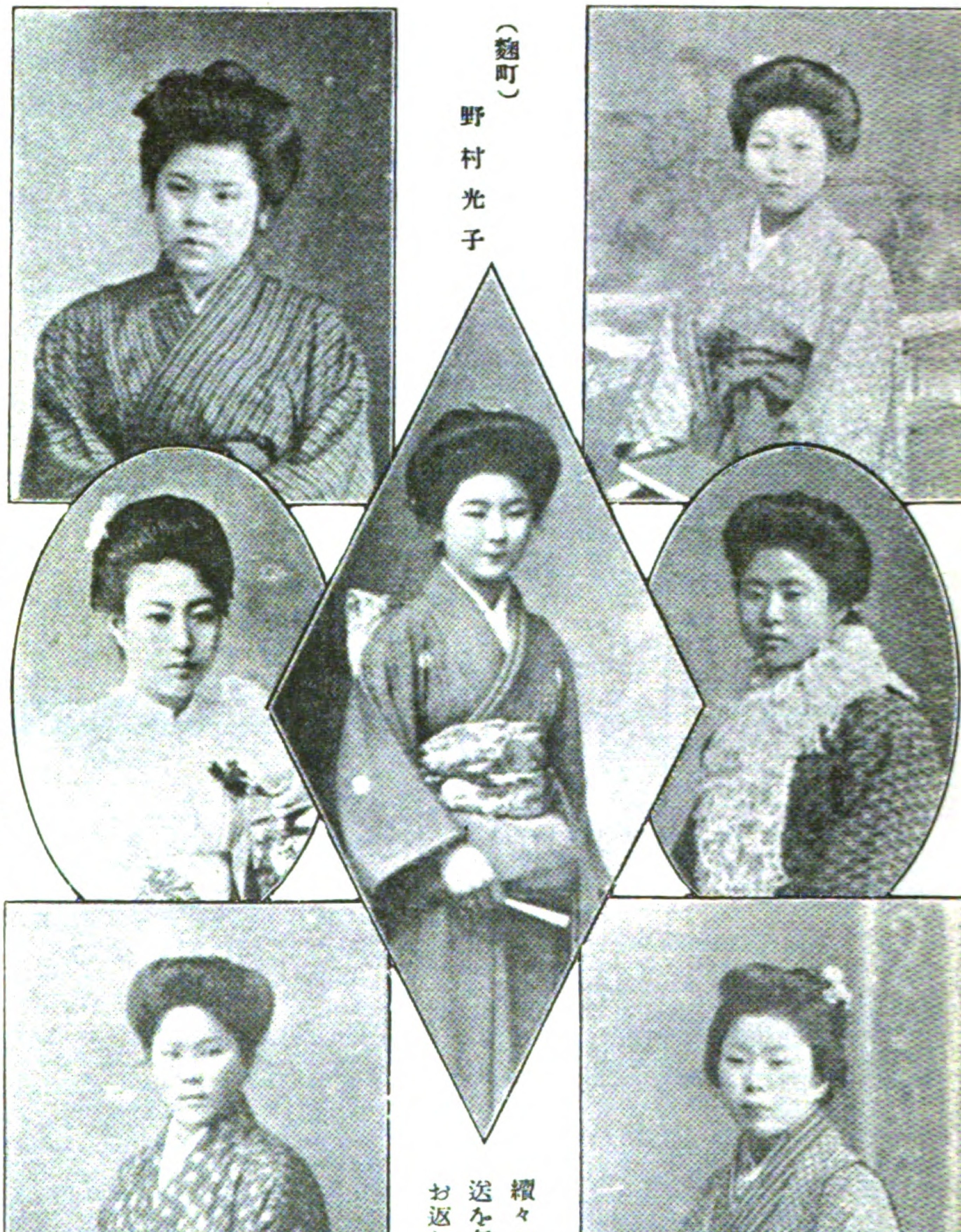
▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子敎育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉詳しい規則書は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

誌友面影（十三）



（兵庫）木村國枝子

（相模）村岡くに子

（福島）新妻繁子

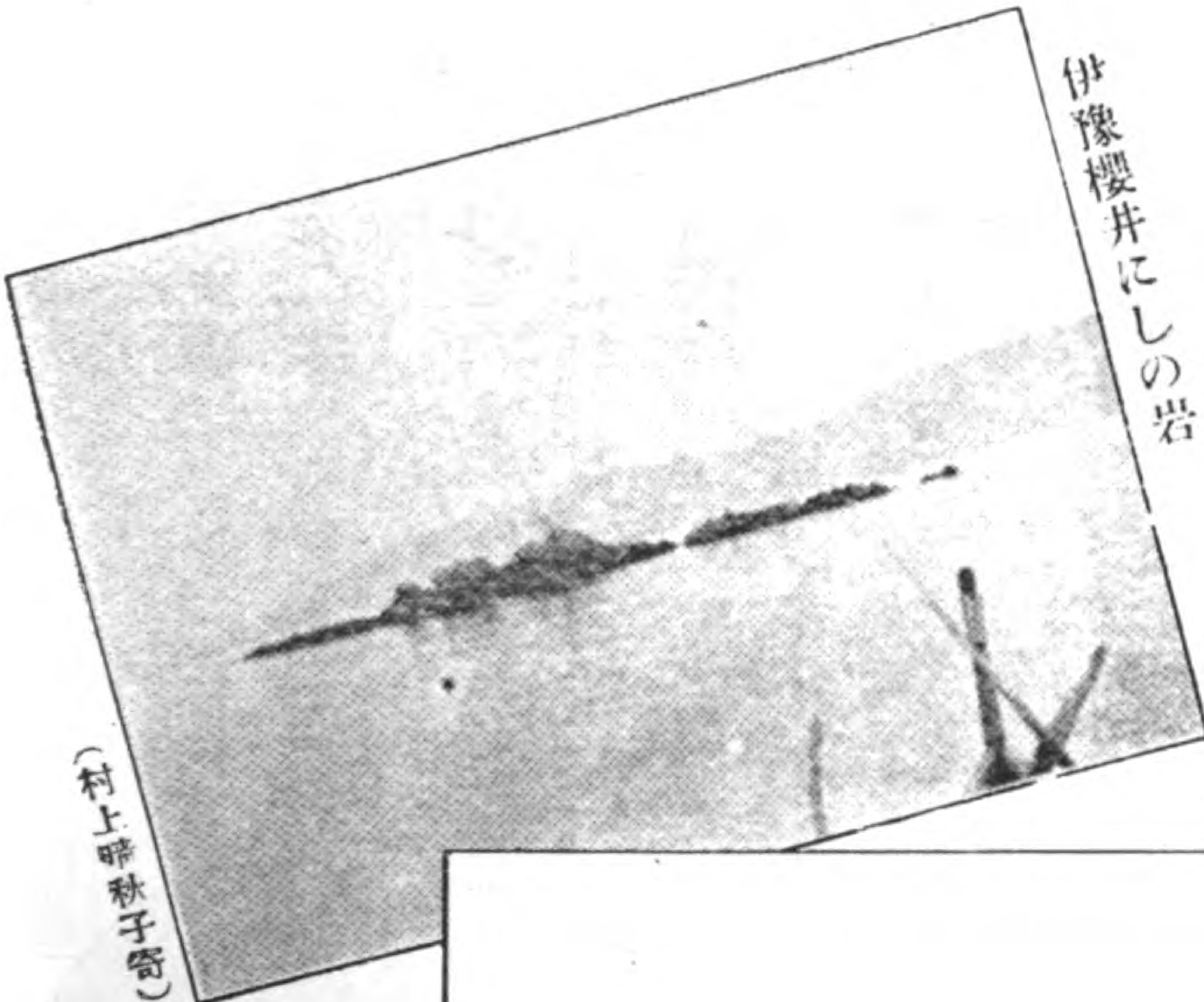
（麹町）野村光子

（大阪）茂見利子

（福岡）竪林八重子

（高崎）川端雪江

續々お寫眞の御寄送を乞ふ掲載の上お返しゝます。



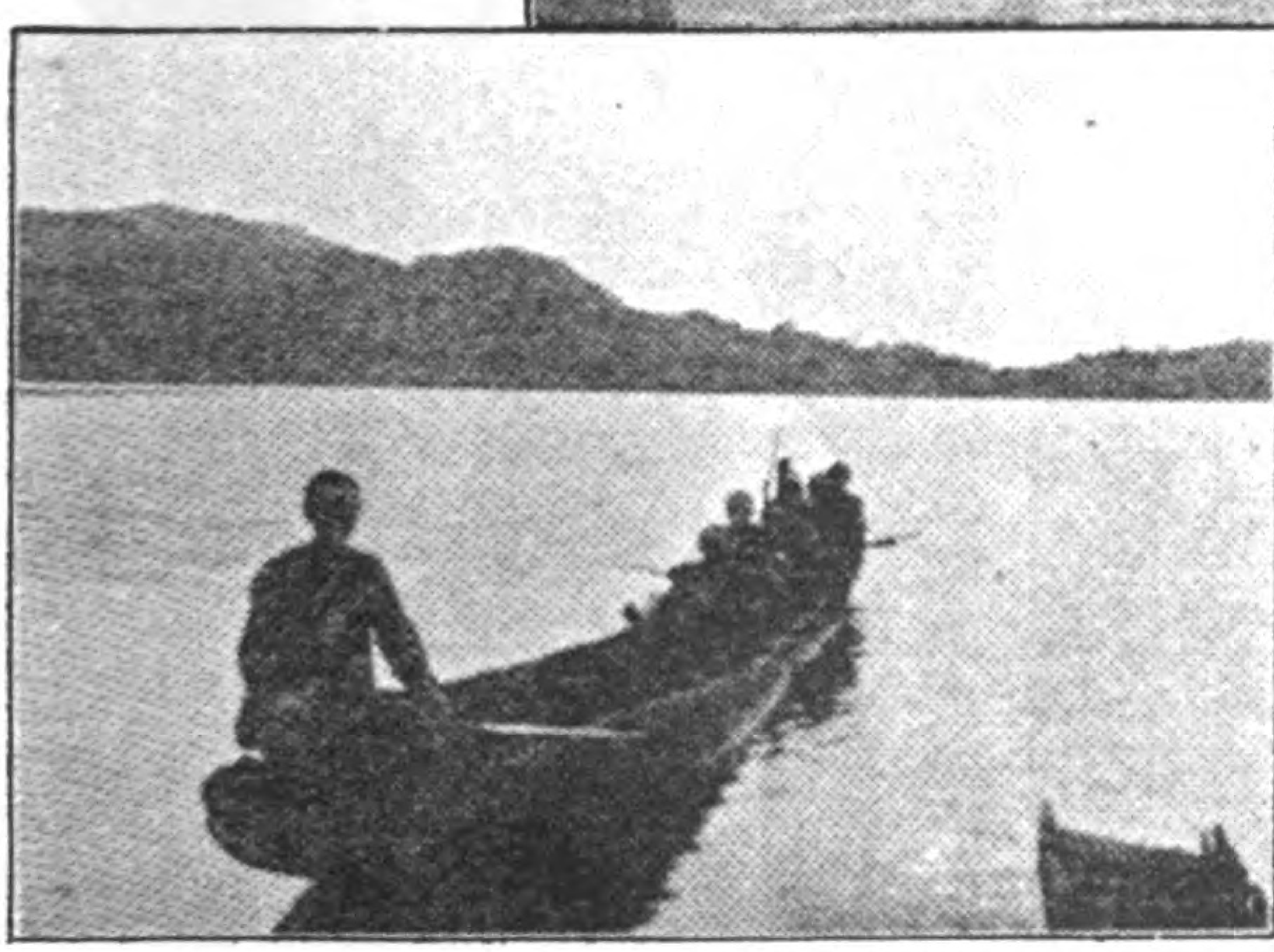
伊豫櫻井にしの岩

（村上晬秋子寄）



興津海邊の夕暮

（川畑はな子寄）



（すみよし寄）

臺灣新社湖水の魚釣

津市岩田河日の出



（越村文枝寄）

福岡奇勝犬吹旋觀音瀧



（山田改枝寄）

津市岩田河の月夜



長野縣岳北女子

文壇誌友（誌友會寄贈）



青木まさ子



丸山かね子



小林もとめ
今井菊枝子



渡邊清子
望月るい子



山崎たかの



堀しま子
遠山ぎん子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文藝は少數作家の專有ではない苟くも文藝を尊重し愛護するの至情があるなら、誰でも文藝家として起つの資格があるべき筈だ。否吾人は却つて自ら文藝家なりと稱して居る輩に、文藝を尊重し、愛護しない不屆者があるのを認める此は獨り日本の現時代ばかりではない、いつの世、いかなる國も、此背文藝的俗作家の存在を認めるのである。吾人は極力此等文藝の賊と闘ひ眞に力あるまことの文藝を發輝せねばならぬ而して其最も有力なる味方を文藝を渇仰する青年諸君に求めねばならぬ。若々しき感情に漲れる諸君に依りて組織せらるべき此文藝軍が、如何に大なる反響を我眠れる文壇に與るであらうか。蓋し秋季文壇の大偉觀とせざるを得まい。

秀才文壇 秋季增刊 十月廿日發行

紅楓

懸賞文大募集

○原稿締切八月二十日限

○封筒及原稿には必ず『紅楓原稿』と朱書せらるべし

○其他總て投書認めの方は每號の規定に隨はるべし

○新案懸賞方法は改正賞與規定に準じ更に增刊に限り第一等ゟ各等共數名づつ當撰せしむる事とせり

募集課題

甲種

短篇小說(百五十行以内 總振假名)……德田秋聲選

乙種

論文(五十行以內)……中島孤島選

美文(五十行以內)……小川未明選

新體詩(四十行以內 總振假名)……河井醉茗選

評釋文(四十行以內)……選者未定

寫生文(五十行以內)……選者未定

人物評論(四十行以內)……矢部白雨選

丙種

日記文(二十行以內)……鈴木野火選

消息短文(十五行以內)……矢部白雨選

小品文(十行以內)……小川未明選

新口語詩(行數隨意)……選者未定

丁種

和歌(一人五首限)……尾上柴舟選

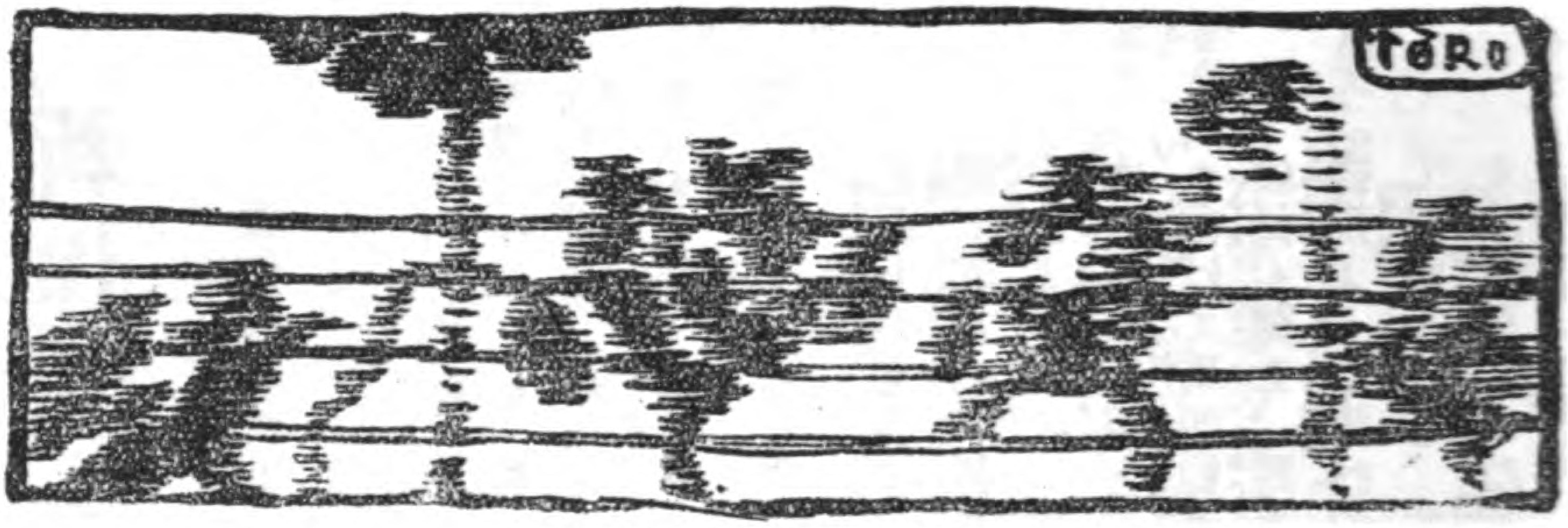
俳句(一人五句限)……高濱虛子選

漢詩(七絕)……小笠原盧舟選

繪畫(半頁大)……服部懸天選

正價金二十錢 郵税一錢五厘

發行所 東京市神田區旅籠町一ノ廿三 文光堂



女子文壇　美人草　定期増刊

紀元二五六八年　明治四十一年七月十五日發行　西暦1908

新語

水色

夏の夕方は涼しさうな天の水色、女の浴衣も水色、凡て夏は水色を佳とする、涼しさを代表する色である。

燃ゆる花

夏の花は燃ゆるやうな色に咲く、撫子、百日草、美人草、百日紅、柘榴、葵、牡丹其他日本の花でも西洋の花でも、火のやうな色をして咲く。

夏姫

春に佐保姫あり、秋に龍田姫あり、夏姫もなかるべからず

炎天

日盛りとも云ふ、炎天の烈々たるは、壯快を感ぜしめる。

眞晝

眞晝は夏に限らないけれど、眞晝の感じは夏に限て強い印象を與へる、眞晝野と云ふ熟語も出來た是ち夏の野としてよし。

登山

海水浴も勿論夏のものであるが、登山も夏の行事にしたい、富士登山なども近年漸く盛んになつて來た、夏期の旅行は登山を目的とせよ。

熱

熱は感情の激した時に高い、時候では矢張夏である、光線の熱、色と温度で言へば夏は熱の時である、情熱と夏とは詩歌の聯想を美しくする。

太陽

月の清涼を嘆美するは秋に限り日の威嚴を讃美するは夏に限る

沙漠

日本には沙漠と云ふものが無いけれど、沙漠ある國では、夏の日が想像される、平沙萬里行人を絕つの境沙恐く燬く。

晝の恐

恐怖は夜のものとしてゐるけれど晝間の恐怖を感じない人は穎敏でない、然も赫赫として白き光射す夏の日に於て。

宵

何處の家でも窓や戸を明け放して、涼を納れる、此時人間に平和と安慰がある夏の宵は愛すべきとき。

宵娘

此んな言語はなかつたと思ふけれど、新しく造つても差支えない、夏の夕暮町娘などが薄化粧して浴衣がけて居る姿は、何となく美しく見えるものである、名づけて宵娘と云ふ。

あへぐ

風は蒸し暑さうに喘ぎ、人間の息も苦しさうに喘ぐ、草の葉も喘ぐ、犬の舌も喘ぐ。

火

夏は暑いからと云つて、涼しい寒いことばかり考へて居ても、自分を欺いて居るだけて、興には乘らない、夏は矢張夏らしく暑いことを考へる時だ、火などは最も夏の詩題文題として痛切に感ずる。



新作脚本　佐野天聲先生選

二等當選　愛の程度（一幕）

下野　節女

登場人名

米國文學士　佐藤高夫　　山科百合子

山科法學博士未亡人　米子　　同　松子

高夫妹　佐藤櫻子　　胡川夫人　メリー子（西洋婦人）

法學士　水野精一　　馬子數名

正面上手寄りに、噴烟濛々たる淺間小淺間の近景、其左右、舞臺上下へかけて峨々たる岩組、中央よき處に、宿り木の赤き實美はしき欅の大木、欅と岩組との間に一徑を通じ、花道際を奥へ曲げて馬頭觀音の石塔あり、谷川の流れ急雨の如く聞え、霜葉二三翩として飛ぶ、總て信州沓掛より草津への街道、初冬の光景、鈴の音にて幕あく、と、此處に馬子兩人、駄馬の口を取り立話をしてゐる。

甲「オー源さん、今日も草津か、草津も、寂しく爲つたらうの。

乙「さうさ、かう寒くなッちや、お客も減るばかりだよ。父さん輕井澤けい。

甲「ウム年を老ちや、遠道は息がきれてなんねい。輕井澤位が丁度よ、何でも働くのは若い中だの。

乙「己も働きたくても、かうなッちや、入りこむお客はまア、湯の澤（惡病患者の集合處）位だから、稀に食物でも運ぶが關の山で氣のきいたお客はねいや。もう冬ごもりだからな。

甲「さうよ、だが一年中ぢや、身體が續かねいから、雪の中丈はマア炬燵ッ入りて骨をのばすのよ、ハヽハ、ハヽ。

この中老人の馬、歩き出す。

甲「こりやもう歸りたくなッたか、何だかうす寒くなッて來た、それぢやお休み、源さん。

乙「ぢやア父つあん、マア〱身體の守てもしなせいよ。

兩人分れて退場。花道より佐藤高夫、脊廣の洋服に脚半、草鞋、といふ打扮、度の強い眼鏡をかけ、鼻下に濃き口髭を蓄へ、神經質らしけれど、立派なる人格。山科百合子、若く美しき令

孃姿、廂髮、帶をお太皷に結び、草履を紅緒の切れにてゆはひ相携へて登場。百合子疲勞の體。

高夫「百合子さん、隨分お疲れでしやう。

百合子男の顔を見ながら淋しく微笑み。

百合子「いゝえ、少とも疲れはしませんわ。

高夫「デモお馴れにならぬ山道ですから。マア少し休みましやう。

高夫木の葉を集めて、ハンケチを敷く、百合子氣の毒氣に其れを見て居る。

高夫「サア、足をおのばしなさい。

百合子「ハア有難う。

兩人腰を下す、高夫ハンケチにて顔を拭く。百合子帶の間より金時計を出し見る。

百合子「もう三時半になりますわ。山迄はなか〱でしやうか、あんなに見えてゝ遠いのですね。

高夫「なれぬ山道ですから、殊にあの山は、迂かり人に尋ぬる譯にもならず。いくらか無駄道もしたでしやう、ですが百合子さん、この雄大なる風景を目前に見て、自然の懷に抱かるゝうち、自身の立場から見おろした人生のパノラマは、走馬燈の如く眼前に髣髴します、歩々迫る死蔭の谷は、此人生のパノラマを抹殺して、寂滅の境に近かしめる。僕は死を恐るる怯者ではないが、此活動の小乘界を捨てゝ、無爲の大乘界に轉生するに就ては、少からぬ未練が生る。あなたの温い玉手は、僕の手に遺憾なく握られるけれど、其樂みを僕は彼の燒火口に飽喫せずして、此活世界に快喫したい、あゝ僕も米國にゐる頃は、秀才と唱はれ、恩師に、東洋の文豪佐藤の名を待つといはれたもの、戀なればこそ、貴女の爲めに、旅路遙に此處まで來ましたが、僕は今、自然と人生の契合を痛切に感ずると同時に、或壓迫――いや心の呼きを聞きました。名譽！意志の努力によつて贏得る名譽!!其名譽にあなたの愛を結付けて、久遠の常樂を現象界裏に味ひたいと思ふ。此二つの力が兩立しない場合にのみ死にたいと思ふ、百合子さん、貴女の考へは如何です。

熱心に言ひ終りて、眼鏡の曇りを拭ふ。百合子此間同情の顔色、苦痛の樣子をなす。されど口元のみには、冷笑の影をほの見せ。

百合子「それぢやア、貴君は神聖の愛を捨てゝ肉慾の愛に耽り　其肉慾の愛と共に卑しい野心の滿足を得たい

と、恁う仰有るんですか。

高夫「左樣ではない、靈肉一如の愛情を飽喫して、天の愛と地の愛とを混一しやうと思ふのです。

百合子「お上手に仰有いますが、あなたは私を、あの淺間山の噴火口へ、蹴落さうといふ堅い強い勇ましい御決心が無いんでせう、いゝえ左樣です、ちやんと私は存じてゐます。

高夫（百合子の言葉を耳にもかけず熱心に言ひつゞける）「チチヤンの描いた「天と地の愛は何方にも理窟がある、小乘界の産物たる人間は到底地を離れることの出來ないと同時に、又天の心を心とし愛を愛とすることの出來る自由を有て居る」僕に言はせれば、此兩界の愛情を混一するのが、即ち天地同化の愛——神聖な愛情だと思ふてすが何うでせう。

百合子「其れは左樣かも知れませんが、私には地の愛を捧げねばならぬ水野といふ許嫁が御座いますもの。

高夫「だから其れを打破して久遠の常樂を此活世界に快喫させて下さいといふのです　僕には櫻子といふ妹がある、僕が今此處で情の爲に殉じたなら何樣に悲しみ歎くてせう、彼れは憐むべき孤兒です、伯父といふ後楯はあつても最も親しい骨肉の愛を亡失つた彼れの半生はみじめなものに相違ない、僕は其れを想ふと腸が煮え返ります、あなたも少しは阿母さんの事を念頭にお置きなさい、地の愛によつて呼吸してゐる此靈肉は、地の愛によつて存在して居るプラツドの愛を犧牲にしてまでも、天の愛に憧憬れる事を許しません、僕は徒らに死を恐れて言葉巧みに貴女の自我的情操を破壊しやうと試みるものではない、此偉大な自然の光景——不息不滅に活動する活火山の活光景に接して、忽ち迷ひの雲霧を吹拂つた刹那の感じを口にしたゞけに止まるです、何うか僕の胸中を察して、天地混一の愛情を投與へて下さい、百合子さん、お願ひです。

（百合子きゝ居る中に甚く感動せる表情ありて、遂にハンケチを目にあて、）

百合子「心にも無い我儘を申しました、恕して下さい、父を知らぬ私は母の手一つて成人しました、若し私が自我の爲めに身を亡す樣なことがございましたら、乾度母は悲嘆と自尊心との爲めに死ぬだらうと存じます、水野さんには濟みませんが、天の愛と共に地の愛をもあなたに捧げて、謙遜つた優しい心の婦人に生れかはる考へて御ざいます。

百合子男に近き、熱心にいふ、高夫は感極まりし様にて、百合子を注視め、遂に手を執り、

高夫「感謝します。その優しい言葉を永遠に忘れないで下さい。

百合子身も心もまかせながら恥しげに、

百合子「何卒貴君も、其熱情を、いつ迄も。

兩人情に堪へず、相擁せんとする途端に人聲跫音近く聞える。高夫前方に目をつけ、

高夫「誰か此方へ來る樣です、見つかつてはまづい、木の蔭へ隱れて遣



過しませう。

　兩人欅の蔭に身をかくす。前方より、山科法學博士未亡人米子、切髪地味なる服裝、同松子、卅歳位束髮、高夫妹櫻子、十七八歳マガレット、女學生風、絹川夫人メリー子洋服、水野精一、長外套を纏ひステッキを携へ一人の馬士を伴ひて登場。

精一「デハお前、御苦勞でも、この先きの立場迄行て見てきてくれんか、なるべく内々でな。

馬士「ハア承知しやした、デハこの邊に、お待ちなすつて下せい。

　馬士木の前を走り行く、皆々、正面好き處にたつ。

未亡人「誠にどうも、水野さんには、申譯も御座いませんに、何から何迄、御面倒にあづかり、有難うぞんじます。

精一「いやどう致しまして、今の馬士の話では、其邊で逢うたとの事ですから、御無事のことゝ存じます、御安心なさい。

松子「水野さん、とんだ御世話に相成ります。かういふことになりましたも、私が日頃、ダンヌンチオの「死の勝利」を好んで讀み、女の誇であると、よくいふて居りましたのが、多少原因と爲た事かと、面目御座いません。

絹川夫人「妾日常言ひました、日本男女の交際きびしい、自由ない、正しき交り惡くないと、又西洋小説いろいろ貸して上げました、申譯ありません。

櫻子「いゝえ、百合子さんがお惡いのでは御ざいません、兄が百合子さんに、這樣御決心をおさせ申したのが、惡いのです、私は皆樣に、お詫の致樣も御座いません、唯々御無事でゐらつしやればと其れのみ心に祈つて居ります。

精一「いや何誰がわるい譯でも御ざいません、世の中が斯う云ふ風になッて來たのです、即ち藝術が進歩したのでありましやう。斯る現象は決して。正義視すべきではありませんが、しかし、かういふ場合になりました上は止むを得ません、どうぞお兩人の意志を重んじて上げて下さい御願ひです。

未亡人「有難う御ざいます、男らしいお言葉を伺へば伺ふ程、私はあなたに對して申譯が御ざいません、母親の手一つで育てました娘故、世間から嗤はれまいと人一倍心をつけ、女學校卒業後も。文學が好との事

て、絹川先生の、お世話になり、水野さんとの、目出度時を、樂しみに、待て居りましたに、親思ひの娘が、この樣なことを致すとは、私は穴へても入りたい樣に思ひます。

未亡人米子、松子、櫻子、泣く。百合子も欅の幹より半面を現はし涙にくれる。

絹川夫人「貴女心配ありません、皆神樣の、思召あります、神樣の試すみましたならば、無事歸ります。御安心なさい。

未亡人「誠に左樣でした、遂愚痴を申て、お恥しう御座います。

精一「ヤア百合子さん。

精一後に氣付き、百合子を見出し、

ト驅け出す、一同驚喜の樣にて、同じく驅寄る。

兩人面目なき體。

兩人「誠に皆樣に御心配をかけ、面目なう存じます。」

高夫、精一に向ひ。

高夫「水野君、實に不道德極まる憎い奴。死ぬことも出來ぬ憶病者と、おさげすみてしやう。どうぞ存分になすつて下さい。

精一「いや、そんなに言はれては困る。たゞ今後は、理性を以て情に勝ち樂しく百合さんと偕老の契を結ばるゝ樣祈ります、百合さん、僕は、決して、御兩人に對し、惡感情は抱きません、高き敎育を受けたる貴君方が、愛の程度を知らん爲め、死を恐れざる迄の御覺悟に、同情致します、どうぞ佐藤さんにお從ひ下さい。

百合子「ハイ、有難う御座います、何事も御存知の貴方には、辯解がましい事は申しません、只々お意を感謝致します。

未亡人（百合子に向ひ）「水野さんには、種々御世話樣になりましたよ、お前が夜迄歸らぬ故、先生や、水野さん、佐藤さん、其他、お友達のお家も尋ね、お前の机から、遺書を見出してからの、心配といふものはお話には盡くせません、さうかうするうち櫻子さんも兄さんのお手紙を御覽になつたといつて來て下さる、直ぐに追手をと思つても、臭い物には蓋するならひの、左樣もならず、といつて義兄さんが、此處まで來なすつては、事が大きくなつていけないし、旁々、私と姉さんと櫻子さんと三人で出掛ける事に極めた處へ、折能く先生がいらしつて、幸ひ輕井澤に別莊があるから一緒に行かうと仰有る、又水野さ

んは御多忙中を、男が居ないではと、わざ〳〵宰領になつて下さる、大變私も氣丈夫になつて、昨日の朝上野の一番で駈付けて來たんだがね、皆さんのお蔭て世間へも知れず、恁うやつて無事の顔を見られるといふのも、皆神樣のお惠みと思ひます。

高夫「奥さん方には、誠に赤面の至りです、櫻ちやん和女にも心配をかけてすまなかッたゆるして下さい。

櫻子頷きて涙をふく。

精一「就ては佐藤君、斯る場合、あまり突然だが、僕に櫻子さんを下さらんか。

高夫「エッ櫻子を。

精一「米國風の百合さんを失つた僕は、日本風の櫻子さんを得て、日本風の家庭を作り、日本風の趣味ある生涯を送りたいと思ひます、因果律によつて罰せられた僕等兩人は、因果律によつて手を分ち、因果律によつて亡羊嘆を斷滅せねばなるまいと思ふ、即ち百合さんの米國風の紳士たる君を擇んで良人と定めた樣に、日本風のバンカラたる僕も亦、櫻子さんを擇んで妻としたい希望ですが如何でせう。

松子「ほんによい御縁。ネー阿母さん、佐藤さんへ御承知ならば、妾等夫婦が御媒酌致さうてはありませんか。

未亡人「さうなりますれば、妾も、水野さんへ顔も立ち、どんなに安心で御座んしやう。

細川夫人「私佐藤さん方の媒酌致します。

高夫「有難う存じます。水野君、僕等の罪を、赦して下さるさへあるに、憐なる妹を御望み下さる寛大なる御胸中、感謝に言葉もありません。僕も歸京の上は、創作を起稿して、其上にて皆樣がお許し下さるならば、百合子さんと渡米致す考ですが。櫻子の身がきまりますならば、更に心殘りなく、安心して行かれます。櫻子異存はないと思ふが。

櫻子恥しき思入れ。

櫻子「不束な私故、とてもお氣には召しますまいが、左樣なりますれば何樣にか私は——。

うつむきて聞えぬ程にいふ、前の馬士登場、兩人に氣づかず。

馬士「ア、此處にゐなすッたかね、さきの立場迄行ても、其樣な人、見ねいいふだが、これから賢てきた馬士達呼んで、日い暮れねい内に橫道でも搜索しやすべいか。

精一「いやもう用は足りた、ほら此通りお兩人とも御無

事だ。

馬士（兩人を見て）「アヽ左樣てしたかい、マアくようがした、デハまだ戻りの馬が二匹位は居べいに、先の所で、待たして置やすべい。

精一「ヂヤ、賴むとしやう。お前は、老人て堅さうだから、「御苦勞を願ふのだが、他の者へは内々にな。

精一ポッケットより財布を取出し、心付をする。

馬士「恐入ますだア、決して、口外はしましねい。

馬子退場、高夫百合子、精一に向ひ。

兩人「何うも種々と御厄介を懸けまして、濟みません。

頭をさげる、木の葉しきりに散る。

細川夫人「皆々無事、目出度い話ありますこと、皆神樣のお恐みあります、皆さん、感謝のお祈捧げて、別莊引揚げましやう。

皆々「實にそれがよろしう御座います。

一同額に手をあてる、細川夫人枯葉の上に跪く。

（幕）

某文學士の自然主義實行（？）を骨子として、多少の脚色を加へたるもの、讀んで快感を興へる作ては無いが、背景に淺間山を使ひ、新思想の若い男女と醇樸な馬士とを反襯せしめて其處に靈肉一如の戀愛觀を説明しやうと試みた伎倆は決して侮るべきては無いと思ふ唯惜しい事には、雜詞が會話體を讀む樣なのと脚色があまり單純て白湯を吞む樣なのが疵てある、水野精一が樣子を要にしたいと望む處や、其懇望を直ちに承諾する樣子の唐突や、幾分新思想の山科未亡人が娘の不得を許嫁の夫の前て責めぬ事や、細川夫人メリー子が基督教信者てありながら基督教的道德觀を口にしない事や、其ほかあちこちに工夫を要する箇所の見えるのもあたらしい、脚本は小說と違ひ纒りがつかぬといけぬ樣に思ふ人もあらうが必ずしも左樣ては無い、或思想をさへまとめれば隨分事件は尻切れ蜻蛉てもよい、此脚本の樣に強ひて精一に配遇者をめつけてやらずとも他に方法は幾らもあらう、僕の「大晦」の終りの被娶候補者出現などは、まづい纒め樣の好適例だ、餘韻嫋々の妙味は何樣文學にも必要てある、結末が拙作に似てゐる樣だから氣になつて一言添えた、僕の作を讀まれなければ讀んで見て吳れたまへ、まづいのが分る。其れから、もう一つ言つておきたいのは一幕の長さてある、此作は原稿紙て十二枚てある、十二枚だと舞臺に上せて約十五分位の試演時間しか無い、十五分ては隨分呆氣ない樣に思ふ、少くとも廿五分乃至卅分位は欲しい、即ち其れだけの時間を必要とするだけの脚色を希望する、應募作の中にたツた三枚のがあつた、之ては何うする事も出來ぬ、脚本は一幕物といつても小說に於ける短篇物とは違ふ、一幕て百枚にも百五十枚にもなるのがある、無論諸君に多くを望むわけてはないが、注意する事は必要と思ふ、今度の脚本募集は新しい試みてあるから應募者も割合に少ないし、余ろきり劇といふものゝ智識が缺いてる人の作が多いので、骨折つて講讀したにも拘らず、此際唯一つしか採るべき作の無かつたのは遺憾てある、次回には何うか山崎紫紅君の「七ツ桔梗」や眞山靑果君の「第一人者」などを讀んで一幕物の脚本と短篇小說との異同を辨へ此作以上の傑作を寄せられんとを切望す、之は此作者にのみいふのてはない一般應募者に言ふのてある（天祭記）

脚本募集

引續きて第二回新作脚本を募集す。精しくは最終頁の募集規則を見よ。



美文

編輯局選

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採錄す、二十四字三十行以內、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。

三等

○初夏の一夜

下野　せつ子

靜な〳〵月の夜である、折々蛙の音が聞ゆる、こんな晩には、お琴のさびしい曲でも、しらべて見やうかと、思つたが、よして本を讀む、小川の流れが、さら〳〵とする。

月の光に煙る樣な、靜な空氣を傳つて、何處ともなくピーンと弦の音…續て…濁て…絶ては又…三味の音と思ふ。この頃小川をへだてた麥田の中に、新に建てられた仕立やよりと、頷れる、夢見る如く、耳傾けて居ると、パタ〳〵と、姉樣ゐらしつて『今仕立やから素人義太夫があるから、是非といふて來たが、母樣は二人にて行けと仰有る、私も子供が寢た故、行て來やう！』といふ。髮つくろひて、單の肌寒う、羽織の紐結び、母樣にお斷りして、姉樣の後より行く。

はや顔知れる誰彼も見ゆる、女主に招かれし體のべて、落つく。幕張りて、臺の上に見臺も美しく、燈あかるう氣も浮立つ。やがて師匠の紋に印判やの若いをぢさん、肩衣つけて上る、幕の內より蝶花形と廣告する、秋はことさらと始まる、皆謹聽する、今迄私の隣の內儀さんが抱て居た三ッ位の男の兒が急に靜になつたので、キョロ〳〵見まはして、アー〳〵と聲をたてる、仕方がないから、私もあやして見る、遂には、チョロ〳〵と步き出して、三味線の前にポカンと見てる。皆笑ふ。お師匠さん恐い顔して居るが、さすがに怒る事もならず見て居る。をぢさんソロ〳〵汗を拭ふ、今度は其前に立て、見臺の房をいぢる、私は氣が揉めて唄は少しも身に入らぬ。若い母親も、見かねて立て抱て來る、小供は束縛されるのをいとふて大きな聲をたてる、折角語つて居る人に、氣の毒に思ふ、母親は表に連て行てしまふ。

やう〳〵安心してまともを見る、今丁度二人の孫が勝負をしやうとする處で、間もなく、謠曲の山の井の曲と唄ふ。こまかな相の手が、どこやら琴の玉川の相の手に似てると思ふ。祖父が切腹して、孫の死を悼むあたり、姉樣は顔を上げ得ぬ、方々に涕をすゝるけはひがする。をぢさん盛に汗を拭ふ、終つて皆うまい〳〵と賞める。次に兄弟子の料理やの親方が前の紋で鈴が森を氣取て語る、小供はねたと見えて母親が室の隅に

寢せる。前よりはさすがに上手らしく、盲目の父親と、賴少ない母親の繰言に、皆泣かされる、お駒の心中も表情されて、哀れにきかれた。スーと物の香がすると、カチャ〳〵と音して、をばさんがお酢もじを皿に分て配る、茶が出る、この機をよい事にして、おいとまをする、師匠の引語があるとて、留められたが、夏の夜の、はや十一時過た事故、強ひて表に出る、面白かつたわねと、二人でいッて、オ、寒むと、姉樣袖をかき合す、月が二人を照して、蛙が遠近ちて、コト〳〵となく。くゞり戶があけてある、みんな寐て、ヒッソリして居る、御挨拶しない方がよいと、姉樣おッしやるので、室へくると、月で明るい、硝子窓から庭を見ると、池の中に月がやどッて、シーンと水がすんてる、白い花菖蒲が、夢の樣に、淸くうつッて見ゆる。床に入ると、叉弦の音が聞えてくる、唄は聞えない、私は戰國時代の女のしッかりした心や、お駒の戀が、今の星より菫より、深く哀な者であると、考へ〳〵、弦の音につられて夢に入つた。』

夏盛り（入賞三等）　麹町　前田多美子



（評）文章もはき〳〵してゐる、美太夫を聽く感も面白い、僅な處にも女性らしい用意があつて好い、

四等

○默想

信濃東筑摩郡廣丘村吉田　太田きし子

じつと斯う心が靜まつて居ると、些つとした事にも感じが深く動いて、一つ一つに立派な文章が出來上つて居るかの思がするが、其の實一向取り止がなく何を纏めて作らうと

胸の裡を探して見ると、唯ぼんやりとして仕舞つて、手の付けやうも無い程にひろがつて居る。

けたゝましく胸を劈るやうなる行々子の啼聲が裏の方から聞えて來るし、垣越への田圃からは矢鱈に心のいらだつ鍬の音が哀れッぽい咳嗽の聲と共に何とも云へぬ調子を作つて泌々と胸にしみ渡るのである。

日はかん／＼と照りつけて、お煎餅のやうに乾反り上つた土面の上に、梨の葉が、くつきりと影を落し、そよ風のたびに動揺いでは障子に薄黄色の幻影を描す、妾はさも／＼物に倦みつかれた時の心地で針は手にしては居るが縫ふ事が大氣でならぬ、斯う云ふ時は眼を空にして、上唇をかむのが癖となつて居るので今も、何處を的なしに、若々しい希望に充ちた外の方に目をやつて、自分の躰軀は器物のやう、はつきりと、又ぼんやりと、二ッの影がたえず出入して居ると云ふ事を覺つた。覺つてしばし吾れに返ると、無意識にアブストラックと呼んで見た、アブストラックー　アブストラックー、何う云ふ意味の事であらう。それともこんな言語は無い事かな？、何かで讀んだ事があつたかな？と、いくら考へても分明らない……………。

さら／＼と向ふの森に優しい葉ずれの音がすると、ハックショーと、誰れかゞ嚔をした、松蟬は遠い林の方から糸より車を回すやうな響をかすかにまた近くいらいらと迫つてくるやうである。

さまざまの物の聲響が皆混り亂れて來て好奇きな魂をまた誘ひ出して仕舞つた。うつり變りのはげしい外界の事物に對して止まると云ふ事を忘れた吾が魂も、さすがに心ひかれてか彼方此方と憧がれて居た其の間とても、この小さな叫びはたえず續けてそして考へて見たがどうしても思ひ浮ばないあゝアブストラックーこんな言語は決してない事であつたらう。

内省的の文字で、眼の着けどころに一癖ある、怠らなければ此人も有望なる一人であらう（評）

五等

○我級

福島縣　野の花

私の級は皆で二十人、仲よくて面白いしかし面白いのも今年ぎりで、來年の三月には第二回の卒業生としてゐばつて此校を出てちり／＼になるのである。それでいつても皆集ると三月には誰も名刺判に寫眞をとつて御互にやりとりすることゝいつてる。中には二十枚とらねばならないのね大變だわ、とる時は袴をつけて本持つて半身にするのよ等と云つてる人もある、私は今皆の批評をしてみやうと思ひます。第一に草野さん此人は一年から四年まで、首席をはづしたことはない何でもよく出來て親切でよい人、卒業後は上の學校へゆかないさうだが、もつと勉强したら

指折りのえらい人になるだらうに惜しい人だ。花子さん環さんは二人とも仲がよくておとなしく、學問は中通り未來はやさしい奥樣とおなりだらう。君子さん光子さんたかさん等はいづれもテニスのチャンピオン聲がよく唱歌がうまい、三人共音樂學校ださうな、菊さん綾さんは御綺縹がよく成績もよい、二人とも軍人の奥さんを希望してます。林さん高橋さんは大のハイカラで英語が上手、其爲いつも何か會があると、餘興に洋裝しての英語對話等をする。

田中さんは作文が得意、辯者て大勝てある、未來は女辯護士にもなりかねまじき勢、鈴木さんはおちついた親切なきちんとした人て至つて成績がよい、やがて敎育者になるさうだが此やうな先生に敎はる生徒は幸福だ。後藤さん山木さん木川さん福尾さん等は何れも中通り、普通の人となるだらう。幸子さんはクリスチャンてよく宗敎をといて、神よアーメン等となへて居る、秋山さんは神經の纖緻な人て、今から哲學はどうの、人生は不可解だ等といつてる、華嚴瀧へても行かねばよいが。三澤さんは氣作て無邪氣てよく滑稽をいつては皆を笑はしてる、子供が大好きていつでも私幼稚園の先生になるのよといつてる。之て皆のとはすんだがさて自分のことは云はふか云ふまいかまあ止めやう。

我がクラスも亦他日の小社會、人それ〴〵の特色が出て居ておもしろい(評)

秀逸

○菖蒲の節句の前日

羽曳　杉葉女

菖蒲と蓬刈りに行かれた兄さんは、今一ト抱へ程揃ひて來て『いつもよりは兩方とも丈けがない』と云ひながら、厩の前にどッさりと置かれて、むだ草をすごつて居らつしやる、妾はお母さんと姉樣と共に、臺所てまけずと筵巻きを拵へました、妾が一つ拵ふうちに阿母さんは二つ、姉さんは一つと筵を三角に巻く程宛、違ふ樣てすから、妾はこんな事敗けて居られるものかと一生懸命に結びましたのに、あんまり周章てたものてすから指が筵を辷つて、たまりません膝の上に、眞ッ白なお米が一面に、バッと散れましたので、妾が猶更氣が揉めて來ました、阿母樣は笑ひながら『緣やそんなに氣を揉まずに、靜に奇麗なのを拵つて、明日叔父さんや伯母さんたちにあげたらよいてせう』と言はれる、姉さんは赤顏を俯向けて、クス〳〵と笑つて居らつしやる、其うちに兄さんは家の軒から倉の屋根まで菖蒲と蓬を、みんな差し終つてその餘りを束ねて、きれいな水を汲みあげて置いた風呂に入れ、そろ〳〵

炭をつぐ樣子、弟は學校から歸つて來て脊丈けより大きな、鯉の幟を持つて外へ走つて出た。妾が九十五、阿母樣と姉さんので三百六十三ばかり。

いつの間にか家の前には武者繪の旗が立てられた、こ朝過ぎの四時頃までかゝつてやつと、れて先づ可成りお節句の準備は出來たやう、今度は座敷でも奇麗に掃除して、叔父伯母さんの來るのを待つて居るばかり。

古い風俗繪を見るやう（評）

○若者　　牛込　倭文子

赤坂見附で半の人は入りかはつた、自分の前のにやけた三十男は下りて其後へ質朴な田舍者らしい然しどこか無邪氣な二十前後の若者が掛けた、着物は粗末であるけれども、顏は黑いけれどもさりとて世の塵に濡れたむさくるしさてはない、脊には麻布入營と大書した瀨兵笠を負つて、腰には新らしい白手拭を八ッ折りか十六折りかにしてつけて居る左には二合入り正宗の半ばを殘した瓶、右には一通の封書、府下下澁谷村五二九某樣と筆跡覺束なく認めて有る。熱心に見つめて居た若物はやがて思ひきつたと言ふ風に右隣りの鼻眼鏡行々しい有髯の紳士に恐る〳〵何か言い出そうとしたがジロリと見下す紳士の一瞥にビックリ顏赤らめてやめてしまつた、しばらくはまた封書の表計り見つめて居たけれどもまた今度は左側のおかみさんらしい人に手紙を示して其行くべき方向を尋ねつゝ話すのを聞けば、今朝八時に兩國から片道計りの切符を三度も買つて今十二時近く漸々此處迄來たとの事、おかみさんは非常に同情して懇ろに勞はり親切に敎へてやがて車が青山四丁目で止つた時には懷中物の用心迄も呉々とした下りて行つた、殘り惜しげに後見送つて居た彼はおかみさんの影が見えなくなると、ガッカリうなだれてア、東京つて廣ろいなあと獨言しながら節立つた拳に眼を掩つた。終點と呼ぶ車掌の聲に驚ろいて上げた彼の目は露かあらぬかあやしくきらめいて居た、嗚呼彼にも故鄕には世馴れぬ我子が都大路を如何にさ迷ひつゝあるかと三度の食さへも進まぬ勝ちの老いたる母や若かき姉が有るのでは有るまいかと、我身のさまに思ひくらべて、とぼ〳〵とたどり行く若者の後姿が言い知らずなつかしい。

能く同情してやりました（評）

○春雨の夜　　麹町　小百合女

實に濕やかなる春の宵かな糠雨しと〳〵と降り出て、今朝投挿にせし花瓶の櫻香るともなきほのかなる香に四疊半の室をこめぬ。

かゝる時かゝる折生みの母上の面影知らぬ身は一管戀しうなつかしきは古里の乳母なり十年に餘る年月を馴

れなじみし乳母が里なり、小春日和のうら暖き背戸の小椽に我衣張る乳母の傍摘みし菫草に小猫ぢやらしつ白髪生ひ初めし乳母の鬢にしづ心なく散る花片を拂ひやりし罪なき年頃。

十四の年迄我家とのみ思ひ定めて都育ちの華やかなるに比すべくもあらねど平和なる山里の一つ家に乳母夫婦の子としては我のみなれば其いつくしみもたゞならず甘やかにいたはられつゝ、生ひ立ちし身の迎に來しとて都なる父上より御使者ありし時の驚き悲しさに胸も塞りぬ裏嵐に軒の櫻恨めしげに散り行く夕まぐれ渡舟にゆられつゝも雲香る山の麓をいく度か返り見しよ招くが如き川柳のかげにたゞずみて物狂はしう我名よびたる乳母の影よ、たる聲も見る／＼細雨に包まれて人も聲も花も家も一樣に烟り行くに唯一本の門の大銀杏を目あてにあの下よ／＼と幾度か涙ぐみつゝ返り見し思へば今は已に三年をすぎぬ眼病みてありとかきく古里の乳母よ今背戸の小椽に糸の小車繰り返しつゝありや小猫は傍に我幼き昔を語れるか手織縞のいと見にくき此袷をかしと人は笑ふとも乳母が情と縫ひも直さでいたはり着る我心……。



熊野（入賞四等）　名古屋　守澤綠水

孤燈淡としてまたゝけば風なきに花ハラ／＼と散り滴々たる軒の雨滴刻々たる時計の刻み身にしみ亘りて春夜の感慨深し。

此文章を花の姿に例へると、髪を品好き島田に結び、縮緬樣に帯は立矢の字と云ふ令嬢風であらう（評）

○夜半

きしら萩

ずつと並んだ家々の瓦斯燈ははや大方消えて、電氣の光のみ稀に往來を照して居る、自分の足音の外には何も耳に入るものはない、己れが足をはやめたとたんくらやみから犬が吠えた、しつと叱つて、とある横町まで來ると、隅の方で何か黒いものがゴソ／＼とうごく夫からはしばらく夢中でかけた、みまはりの警官であらう、コツ／＼と靴の音が聞えた、靴の音――毎日幾百度となく耳に入つて居る靴の音、これが此の時

には非常にうれしかつたのである、そのたのみに思ふ音もだん〳〵遠ざかつて遂には聞えなくなつてしまつた、あとはまた自分の下駄の音のみ、ひた走りに走つて漸く二つ目の角をまがり遠藤醫院のかけ札を電氣の光にすかし見た時は何とも云へぬうれしさを感じた、そして氣がゆるんだせいであらう、行きつかぬさきに足がすくんでしまつた、これは父上の御病氣が急にわるくなつた六月五日の夜半、小さな胸に心配と怖ろしさとの二つをたたむで、醫師のもとまで行つた時のみちすがらの模樣である

今一いきで好い文になつたものを（評）

◎鐵路

京都市　段谷のぶ子

青葉は山を肥やして水彌々清いこの京都を出發してなつかしい故郷へ向ふので今汽車に乘り込んだ、騒々しい下駄の音、「新聞――雜誌――ッ」「名物祇園團子――」の呼聲、それもやがては靜まつて、助役が手を上げてピユル〳〵と笛を吹くばかり、そこゝては離別のお挨拶、――自分の子を月の桂を手折らさんと東都に遊學さす親もあらう、また出稼の爲め遠くへ志ざして妻子と分袂の愁に沈んでゐるものもあらふ、あゝこの一瞬に一生の離別となるのも、綿衣故郷に臨むのもあるであらふ、千差萬別の乘客は各自また異樣の感想に沈んで暫しの間にこのなつかしい古い都の停車場のあらゆる萬象をことごとく暗記する程に見まはしてゐる、心の中てはこの古都に別袂の意を洩らしてるのだらう。

ガラン〳〵とベルが鳴る、田舍者らしい二三人が狼狽して驅けて來る。

製服の人が後部から順次にガタンコトンと扉を閉めてくる、「煙草マッチ――」不意に私の耳元で聲がしたので吃驚して振り向く、と、ピリ〳〵と笛が鳴る、汽笛一聲――バタ〳〵走る足音がして私の前の扉が開いて飛込むだ二人の男、ハッと見ると四人――一人は草鞋掛の巡査で甲斐々々しい服裝、劍をガチヤリと音さして向ふの方へ腰を降ろした、一人は……深い笠を着てゐるから色の黑い頰こけた髮面が少し見えると普通の和服に風呂敷包を持つてキヨト〳〵しながら巡査の傍へ小さく腰を下ろす、と見ると腰繩が帶に絡つてゐる什麼罪を犯かしたのかひどく痩せて頰骨が露はれてゐる、巡査はポッケットから古いハンケチと一緒に敷島の皺苦茶になつた袋を取出して車内を見廻してゐたが「一寸火を貸して下さい」と商人風の男に「サア〳〵どうぞ」と煙管を突出す、汽車は何時の間にか西に走つてゐた。

能く見る光景だけれど、文になつて居ると又其時をおもひだす（評）

○岩國まで

松山市　草村瑩子

霧がこめて、まだ四時半、夜の白々明けでした。五月二日と云へばもう夏だのに、寒い朝で、待合室には盛んに暖爐が燃してあつた。妾はしばしそれに暖まつて、そして停車場を出た。

まだ眠つてゐる町を出離れると、麥の穗の朝風に波打つ野、廣い道はやがて左に折れる。東の空は段々と明るく紅くなつて、霧は晴れる。

右には、やゝ遠くに新緑の美くしい山が靡き渡つて、多くは白壁の家が五軒十軒とその山裾に、たへず打ちつゞいて、鶏の聲は頻りに聞えてくる。妾はどんなに心地よく、懐しく感じたでせう。妾はこれから、ひとり山間の美くしい郷土を訪れる。そしてそこには錦帶と云ふ有名な橋もある――町はどんなだらう、橋は人は……。九州の遠くまで旅をしてきた疲をも、早く歸國をせねばならぬのもかまはず、そして停車場から一里十幾町もあると聞いたけれど、妾はとう／＼岩國驛に下車した。東天の紅は漸く輝やいてくる。山は段々近く、漸く顔前を遮ぎつて、道はその新緑滴る山と山との間に入る、その間、松の木にからんだ紫の藤や褪せ色の山躑躅の花やが、いかにも妾の旅の心に美くしく映じた。初夏の朝の空氣と風は胸に清々しい。こゝから道はやゝ下りとなつて、そして山は又右に左に開け遠ざかつて行つて、又廣い平野があらはれる。麥浪の末、遙かに岩國の町を望んで、道は一直線である。日は上つた。桑、豆、麻、菜種などの畑に、農家の點々を見て道は右折した。そして、新らしくついた電話の柱などこそ立つてをれ、昔ながらに平安な、淳朴な郷土、舊藩のまゝに殖産を励む、炊煙立ちのぼる古風な屋並の、朝の岩國町へ入つたのであつた。

叙景の筆はなれたものです（評）



研ぎ屋（入賞五等）

豊多摩郡　渡邊良子

○春の思ひ

羽後　菊池りう子

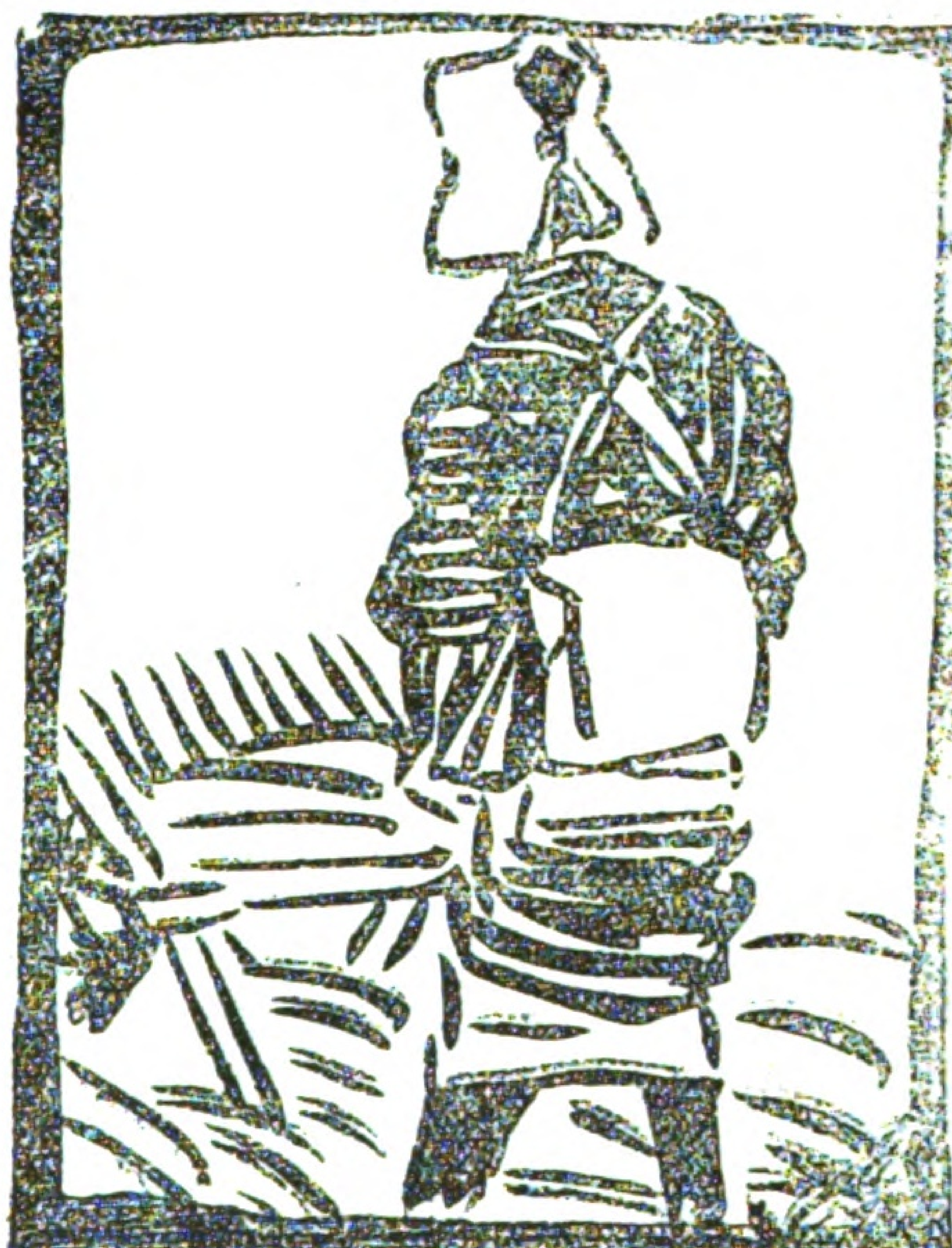
向ふの森が白くボンヤリ霞んで火影がちら〳〵と夢の樣に浮く、妙に心のときめく宵である、春とはいへ未だうすら寒い風がゆるくおくれ毛をなぶる、自分は兩手を袖の中に入れて胸の邊にかき合せながら松の大木に背をもたらして美しい金と銀とを狩ち交へた樣な松の枝にかゝつて居る弦月をジッとあふぐ、無數の星は樂し想に愛にまたゝいて居る、空は水色にすつきりどこ迄も透明である、と町の方でワッーと幼兒の泣く聲が遠く聞える、きつと若い母が「坊や泣かんでお月樣を御覽」とてもすかしてるのであらう、すぐ又今度は「お月樣えらいな」と活潑な聲がだん〳〵近づいて來る、私はふと幼い昔の事を思つた、自分のたしか四歲位の春だつたと思ふ、里子にやられてたのが乳を離れたと云ふので引きとられてから里親を慕つて毎晩「乳母や〳〵」と泣くのでお母樣は困りはてゝ衣服の中に私をとつぷりせおつて丁度こんな美しい月光がまぶしい春の夜、そこは不明門通のお藥師樣のお燈明がボンヤリ見える所を「かあ〳〵烏」と歌ひながら私をすかして毎晩〳〵眠らして下すつた事も現の樣に記憶して居る。あゝあの頃の民ちやんとか今はさぞ美しい京娘となつたでせう、噫誰より〳〵姉樣！もうぢきにお母樣となられるだらうに——。私に似てやはり詩がお好きであらしつたがもう奥樣となつては月に泣き花にあこがれる事もお出來なさらないだらう、お母樣となればなほ〳〵、噫何故だらう、女はなぜ人の奥樣となるのでせう美しい〳〵少女の夢の樣なあこがれも現實といふにがい斧にさんざ碎かれて……。いつ迄も〳〵淸い處女で居て何故花に泣き月に泣き詩になかんのでせう皆樣はどうでも自分一人はいつ迄も〳〵今の樣な美しい心で淸い身で此夢見る樣なあこがれから永久に覺めたくはない！否一生一人で魂も吸ひこまれる樣なあの月の光に醉ひながら此の松にこうやつて身をもたらせて詩に泣きませう、噫！ほんとにあのお月樣のきれいな、……。え、私はどうしても詩の中に活きてるのです！

○寫眞

美作　吉野運命子

聘んで置いた寫眞師が來た、早く髮を結ばなければならない髮結を呼びにやる、髮を解いてくせのしをする、髮結が來た、父樣が「髮など早く結つて置けばよいのに」と云はれる「ですけどいつ來るかわからないのに早くから結つて置いてはかんじんの折前髮に癖がついてしまひますもの髮結さん後の方はどうでもいゝんだから前がみのくせをよくもんでお呉れよ…………油を澤山つけてはいけないよ頭が白くうつるから」……わざ〳〵呼んで寫させる寫眞、見合のとは知れて居る

さうと知つて寫しては澄まない様な氣がする……「早く〳〵未だ出來ないのか」と父様再三の御催促「髮結さん前だけ出來たらいゝわ早くして頂戴」……「出來ましたの何をかけませう」「何でもいゝわ、うつりはしないんだから其丈長でも」眉を濃く薄化粧して着物を着変へ鏡の前に立つお母さんの御注意で衿を落して着たら前がむいて氣持がわるい前を揃へて横姿を寫す、澤山重ねた衿が首にくつゝいて居て見つともないから又うしろへ落す一寸前髮をといて庭へ出て青桐の根元へ立つ。此間中から考へて置いた姿勢――少し横身でそして手が大きくなるといけないから袖のかげへ入れて見えない様に――。平氣で居様と思つてもどうしても他所行き顔になる、塀の窓からたれやら覗いて居る様、極りがわるい事。



參　秋（入賞五等）　名古屋　きよし

○春の日　愛媛縣　志女

ほかく〳〵と暖い午後爲すべき事も了つた、文壇でも見

やうかしらと小机を座敷に持出す。今日は陰暦三月三日桃の節句なので高い段の上にはお雛様が綺麗に祭つてある。姉様がお嫁に往く時持て入らしつたので淋しくはなつたけれ共内裏雛、矢大臣、官女、五人囃など整然と並べられて、花瓶には桃と椿とが挿され、くさぐさの供物がずらりと堆う、隅の方に私の小い人形が立て居る、美いちやんや竹さんと一緒に抱いて遊んだ十年前を思ひ出す。今一度あんなになつて無邪氣に遊んでみたい等と昔の事を胸に描いてうつとりとなる、と何處からとも無く床しい聲が聞ゆるあら懐かしい鶯の聲なので、梅の咲いた時鳴けば宜いにと祈つた甲斐もなう花は散りはてゝも姿さへ見せなかつた鶯は、櫻の花の綻び初めた此頃漸く慕ひに慕ふた懐しい音を洩す様になつた、あゝいゝ聲だこと…聞きほれて椽側に出る、見ると庭の彼岸櫻は吹く風につれて、ぺた一面青毛氈を敷きつめた様な軟い苔の上にはらり〳〵と散りかゝる丁度雪でも降るかの様、庭がだん〳〵白くなつて行く又なく美くしい。



文を作る用意

文章は誰でも作れる

文章を作るのは一つの技術で、誰でも作れるものではないと云ふ思想は、一般に在つたやうだが、是からは文章は談話と同じく、誰にでも出來るものだと云ふ思想をひろくしたい。全體記事文とか、論說文とか、日用文とか、文章を細かく分類するのは不可いことで文章は人間の思想を傳へるものとして、言語文章と並べて存在させたい、苟くも口、語ることの出來るものは、文章も書ける筈で、口語と文語の接近は、實に其れを證明する唯一の事實である。口語でも文章は書ける世の中になつたのだから、極端に云へば五十音の假名さへ知つてゐれば、文章は書ける筈である、其れは極端な例として、少し文字の知識があれば、文章は書けると言つて差支えない、文章と云ふものを大變むづかしいやうなものに心得て、作法とか、案内とかゞ無ければ作れないやうに思ふ誤解を、早く去つて了はねばならぬ。文章は誰にでも作れる、作るのがむつかしいのでなく、頭腦を養ふのがむづかしいので、文章が出來ないと云ふ人は、談話が出來ないと云ふのと同じ事で、世の中に通用しない。

注意を深くせよ

詩歌文章を作る人の平生の心得の中に注意を深くせよと云ふ事を第一要件にしたい、人間と云ふものは生活上、境遇上、自分に接近した事柄は思ひの外深い注意をしてゐるもので、性は其道に依つて賢しと云ふ喩の通り、其道々の事は皆深く注意してゐる、作家となると社會全體に渉つて注意しなければならぬけれど、只形に表はれた出來事に就いて細かい調査的、報告的の注意は寧ろ無用だが、それに伴ふ內部精神の動搖、發作情態、所謂情緒の波うつ狀に深く注意せねばならぬ、此の人間の心の働きに、深く注意してゐる人と、淺く注意して居る人との差が、頓て大作家たり、凡作家たる區別の生ずる所以である。

氣の乘る時乘らぬ時

文なり詩なりを作るのに、甚く氣乘がして、別に苦しいとも思はずに名作が出來る事もあり、其代りに幾許苦んで、頭腦を絞つても、一向好い作が出來ない、即ち氣乘がしない時とがある。氣乘がしないと言つて何時までも作らずに居るのは、得策ではない、氣乘がしなくても引立てゝ作つてゐると、其中に興が湧いて來るもので、何にせよ根氣が必要である、出來ないと言つて自暴自棄して了うのは、初めから作らないのと同じ事である。

善い作を手本にせよ

諸嬢に向つて一切模範書なしに詩文を作れと言つた處で、其は無理であらう、何か準據があり、手本がなければ、作れないのは當然である、此手本となるべきものは、成るべく最上の作を選まねばならぬ、餘り力が相違してゐると、手本にならないと云ふ事も事實であるが、始終自分と同じ程度位の人の作ばかり手本にしてゐても上達は覺束ない、手本も初めは自分と同じ位の人の作を用ゐ、段々善い作に上つてゆかねばならぬ、富士山へ上るに一合目まで達して、二合目まで上るのは苦しいからと、いつまでも其處に止つて居たなら何時か頂上に達し得る事があらう、苦しくても二合目を目的に是非彼處まで行かねばならぬと努力するのが、頂上に達する方法である、二合目に行けば又三合目を目的とする、斯う云ふ風に順序を踏んで善い作を手本として上つて行たなら、知らず識らずの間に頂上に達する事が出來る、初め麓に立つて頂上ばかりを見上げると到底上ることが出來ないと自ら勇氣を挫くやうにもなるから、富士へ上らんとする者は、先づ最初に一合目を目的とせよ。

野心家は成功せず

藝術的良心なくして作物をする人を野心的作家と云ふ、藝術的良心とは何處までも文學に忠實で、作物に專ら精神を籠める事を云ふ、野心的作家とは、作物にはそれほど力を籠めないで、早く名前を世に出したいとか、世評に上りたいとか、際物を書いてあててまうとか、作の可否は第二にして、只管世間を氣にして作物を爲る人て、是等は先づ大した成功はない。

短篇小說

小栗風葉先生選



▲規定　純潔清新なる短篇小說を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等

○田舎行

本所區外手町六十一番地　田中久子

お波が卒業するのを待つて母親のお富は田舎へ行つて來ると云ひ出した。頰髯の疎に生へた父親は、窓際の机の上で新聞を讀んで居たが驚いて振り返り、火鉢の前に立膝して煙草をのむで居るお富を見詰め乍ら言葉も出ない。『其麽に呆れなくたつてよ御座んすよ、お波だつてもう十九だものね』と濟まして煙を輪に吹き乍ら天井を見てゐる。父親は新聞を片手で疊み乍ら『何しにさ』『何しにつて、まあいゝから旅費だけどうにかして下さりやよご座んすよ、ちいつと十日許り留守にする位だから』。父親は又元の方を向いて了つた、そして三面を擴げて讀んでゐる風をして居る。

『さう〳〵いつ迄家へ置いたつて仕樣がないもの、考へて御覧なさいな立川さんのだつて定つたんだつて話がある位だものね』獨言の如にぶつくさ云つて煙管を自暴に放り出すと襷を掛け乍ら臺所の方へ出て行つたと直戻つて來て障子から顏を出して、『ねえ貴君、よござんすね、今なら着物だつてあるから』と云つたと思ふと、父親が振り返つた時には既水口で水道の音をさせて居た。

其日から五日許りたつとお富とお波は小石川の其家に見えなく成つた。殘つたのは父親と下女、夫にお波の弟が一人に兄が一人。

お波は紋お召に繻珍の帶、背が高くて色の白いのが何より姿を引立たす。お富は地味に着なした自分と比べて猶更美しいと思つた。

桐生の町の中を歩くと、昔榮へた桔梗屋の御新造だ、娘さんだ、と云ふので人が目を峙てる。お富は知てる限りの親戚知己をまはつて歩いた。

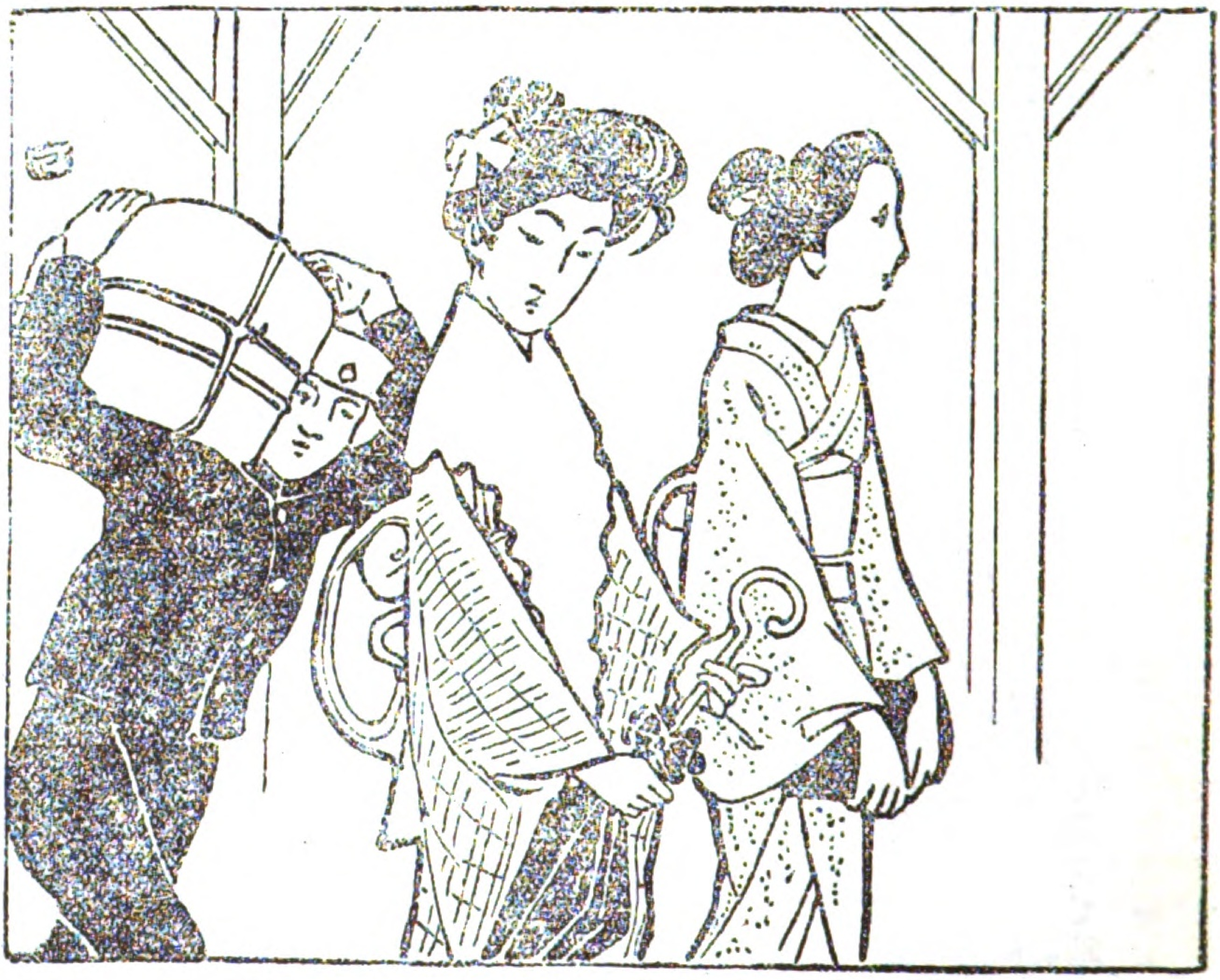
『どうも美い娘さんに成なすつた』と何處でも云ふのが一番嬉しい。お波はがらりとした調子の女だけに、餘り恥しいと思ふ如な事もない代り『何だお世辭を云

つてる』位に、却つて腹立て笑ひ顏も一つしない。

三日目の日、少し在方に成つてゐるが、お館、お館、と人のいふ豪農の家、去年死んだ主人がお波の父親とは從兄に當つてゐるといふ、其處へ行つた。田甫の中で低く堤をして其上へ黑板塀がずつと並んで、中には椎の木が青く繁つて居る。周りが何町もあると云つて、町から在方まで一番有名な家に成つて居る。

當主と云ふのは進と云つて去年農科を卒業た許り、からお坊ちやまだといふ噂をお富は甚麼賴みにして來たのかも知れなかつた。

『進さんを覺えておゐでかい』とお富は途々此麼事を訊く、『夫や覺えてゐてよ』と



お波は笑つた。『さう、薩張りしていゝ方だねえ、阿母樣もいゝ方だ』

芝生が青く綺麗に敷かれて池があり、花壇があり、見るから晴々する如な庭を控へた十疊の座敷に、進の母親が未だ自分とはさ程違はぬ年で居乍ら、切髮に被布姿でお茶を注ぎ乍ら『お波ちやんがまあ、此麼大きくお成なさらうとは思ひませんでしたねえ』と訛りはあるけれど東京言葉を巧に使ふ。お富も何となく嬉しかつた。『學校へ行とりますとどうも延びが早いやうで御在ますよ』『どちら! 學校は』とお波の方へ向いて云ふ。『へエ』とお富はわらつた。『〇〇女學校』と

お波は割合素氣なく云つて花壇の花を見守つてゐる。

「どうしても今は、女だとて小學校だけでは濟みませんですからねえ、いつ御卒業？」「此四月」「おやまあ夫ぢやあもう阿母樣も御安神だねえ」

お茶、お菓子、下女が代る〲持つて出た。

「今日はゆつくりしとつとくんなさいましよ、今に直風呂もわきませうに、そして夕方には進も歸つて參りましよ」。お富は何でも嬉しく聞いて居た、そつとお波に口づけしては「進さんが戻つて來なすつたら丁寧に挨拶してね」お波は默つてこつくりする、「いゝ阿母樣だらう」之にも默つてこつくりしてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

五日目の朝、突然歸ると云ひ出した。も一度は是非上ると云つて歸つた進の家へも行かずに其ひる頃、二人は又上りの汽車に乘つた。窓から外を眺めてゐたお波が「阿母さん、此間進さん所の歸りに、門の所に一所に立てゐたのはお仲ちやんぢやなかつたかしら」と云つた、「さうだらうよ、人は皆薄情さ、お仲ちやん所の店が今は彼樣に繁盛してるものだからね、いい顏でも無い癖にみんな慾の世の中さあね、此方でも厭な事だ、其麼慾深な所なんざあ、厭なこつた」。お波は譯も知らずに窓の外許りを見てゐる。「薄情もの」お富はひとり苛々腹を立てゝゐた。

「進さんはわるかあない、お袋さんがみんな指圖だつて云ふ話だ、厭なお袋さんだあね、妙に東京を眞似てあの被布姿つたら……」

お波は遂々何も知らずに東京へ歸つて了つたのである。歸つてからもお富はひとりで息り立つてゐたが、二三日たつとけろりと忘れて了つて居た。

我性の強い氣紛れな女氣質を描いたもので、所謂ライトタッチの面白い作である。が、始め夫にも其用向を話さないのは、餘りに性格に拘り過ぎて却て不自然な感がある。是は大ッ平に打出して、然かも一人で大呑込みで出掛けると云ふ方が一層其人らしい。（評）

秀逸

○絶絃

京都　小笠原秋湖女

臨終の苦敷い息を引留めて、途切れ勝にする遺言の樣に、絶えつ續きつ細く微かに聞えて居た詠歌が忽然と止んで暫く經つと、床飾の置時計が奥山寺で初夜を撞く樣に、陰に籠つて厭に滅入つて數へるのが悶慨しい樣に緩く靜かに九時を打つた。

戸外には昨夜來の暴風が咆吼と吹き荒んで居る、障子

硝子から覗いて見ると、空には夜叉、羅刹、變化の樣な形の姿々とした雲が幾許とも知れず駸々として驅つて居るので、澄み切つた片割月が怪焔に燃えて飛ぶ鬼火の樣に思はれた、何所からとも知れずに濡れて來る風は死人の手で撫てる樣に、冷りと頰の邊を甜てから机の洋燈に吹付けるので、灯が微溜と瞬いて居るのを、話の途切に凝と見詰めて噫と息をつくと其所爲て、燈火が惘然と暗く成つて頓て復パーと明く成る氣味の惡るさに、自分の後が心もと無い樣な氣がして振向くと壁に映つて居る二人の影坊師が卒然と浮出して來相に思はれたので突と軀を寄せて、机の横わきに凭掛つた儚悄然として居る妹を凝と見ると、お沒去遊ばした母樣の面差が又もや妾の胸を衝いて來た。

額の寛容とした眉毛の恁う一文字に曳いた洞然とした凉敷い目付き口元頰の肉付き迄母樣に酷似て有る妹！視れば視る程母樣に生寫だと思ふとお母樣の魂魄が墓場から脫け出して來て、先刻からの二人の話をお聞き遊ばして被居るのでは有るまいかと、怖しい中にも嬉しう思はれて胸の血が涌き返る樣である。

「姉さんの仰在る事は妾よく分つて居るけど、若繼母樣が出來ると姉樣は最う家にお居てぢや無いんだもの妾どうしても繼母樣なんか來てほしく無いわ」

「妾が居なく成ると云ふ樣な事は未だ確定てるんぢやなし、由んば妾が居ないにしても、お前が其方に仕へるのがお父上に孝行なんだよ、子と云ふ者の道だわ」

と口にこそ強く云ふものゝ……恐敷い、辛い、甚はれる程に倘更愛憐い妹、母樣にお死別申して五年の間指圖萬端からリボンの結び樣にまで世話をした妹に別れ度くは無い、由や自分の婚期が遲れて、無くなつて、獨身の生涯を送つても、妹の緣付く迄は面倒が見度い、夫が成らんなら、人心地が付いて呉れる迄は一所に居度い、未だ十五や十六の小供心、若しや情無い方の手に掛つて、此無邪氣な妹が陰で竊々忍び泣きても仕る樣な事が有つて呉れては＝花やお前はモー一人前だし、正雄は男の事だから什麽にも成ふが氣掛りなは頑是ない光が事、奈何か呉れぐも氣を付けて＝と今も忘れぬ母樣のお遺言に濟まん、繼母樣が出來ると奈何やら自分は緣付かねばならぬ樣な摸樣！何時迄も獨身で置くはお前に濟まぬとの父上のお言葉、是がお父樣のお情か知ら、アヽ身に餘つて辛いお情け、生爪剝がれる樣のお慈悲！とは云ふものゝ這麽事を妹に聞かすのは燃木に油を注ぐ樣なもの、恁うとは云へぬ心の苦敷さ、

此胸が掻挮り度い樣な氣がする、噂によると餘りに儚い事！藝者風情を繼母樣と?! お〻厭だ〳〵、若もお母樣の魂魄が妾達を守つてお居で被下るなら、何故妾を生涯獨身の尊い犧牲に捧げても、お父樣のお心をお止め下さらないのか知らと思ふに付けて、氣も滅入つて來て思案にふけると、刻々ときざむ時計の音が八寸長さの呪ひ釘を死ねよと計り胸に打込まれるかの樣に身に響く、庭の梢に鳴る風の叫は、極惡の外道が平和を惡くんで射る攪亂の征矢が長鳴る樣に思はれて、皆怖い想像の種となるばかりである。

『何だか氣味惡く成つて來たわ、光ちやん、妾色々考へておくから、モー詰らないお話は中止して、琴でも合奏うぢや無いか』

『夫がいゝわ、妾も悲敷い樣なの……厭な淋敷い晩ね、姉さん、ほんとに琴を彈く方が宜敷わ、又那須野を合奏ませうか』

妹は床間の琴をおろして調子を奏べて居る、自分は三味線を膝の上に取り上げた、絹を裂く樣な妹の聲が、高音掛つた糸によく添つて謠ひ始めた、『亂菊の花にかくるゝ野狐の伏床』……掻き鳴らす十三絃は深とした靜かな調べに身が引〆まる樣な心地がする、ピッタリと間拍子の揃つて行く合手の節々、撥々と打ちこむ撥音の冴えは自分乍らに面白い、……『荻吹き送る夜嵐にいと物凄き景色かな』……妾は口早に、『さ、狐火だよ』と合手に成つた時に聲を掛けると、妹は默つた儘點頭いた、矢張り自分と同じ樣に箏子の小說を思ひ出したので有らう、調子が付くので妹がきほひ込んで彈いた爪當りに巾の糸がパチ！と切れて琴柱がバタリと倒れた、宛然、平滑に帆走つて居る船が矢庭に暗礁へ乘揚げた樣な心地て、チーンと鳴る琴胴の響に思はず撥の手を止めた。

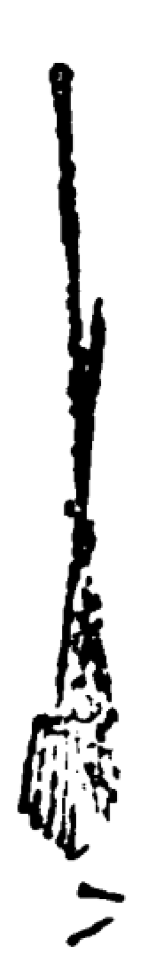
『光ちやん到當切れたね、弱つて居た糸だから……』

『姉樣、今度繼母樣が出來ると姉さんと妾とは、丁度這麼に絕れて仕舞うんでしやう?!』

『莫迦な事をお云ひ、什麼事が有つたつて、姉妹の間が切れるものか!!』

二人は無意識に確かりと手を握り詰めて、顏を見合つた、戸外には只風が暴れて居る。

字もうまい。文章も好いが、惜しい事には材料が陳腐だ。頭でこしらへた小說を書かないで、實際見た事、經驗した事を書くやうに心掛ける事を、此の作者に勸める（評）



○お絹川

下総 若杉とり子

夕陽は沈まうとして弱い光を一帶の小川に投げた此の小川の水は涸れやうともせず細く細く野の中を流れて來て今日も一日の春の光をあびてだるさうに金色の小波を漂はして居るお絹川の水面を若い主從は無言で見詰めたお政は其眞黑な面に疑り深いやうな目を光らしてお孃樣の横顏を見て何故此樣な所に來なさりました又何か騒動が起ッたてねえてすかえ」「いゝえそう思はれても無理はないけれど」お孃樣はほゝ笑んで「お前が私の家に居る時分、お絹川おきぬ川てお云ひだから今日は氣晴に道を聞きながら歩いて來たの大きな川のやうに想像して居たのに餘り少さいので物足りないやうな氣がするわ」事もなげに笑て見せた「さうですか之よく知れたもんだなア」と、感服した「お孃樣そんなに大川と思つててしたか是でも深い川と見えますよ此の村のお絹と云ふ

海濱 常臨 酒葉良子



女が思ふ人に死なれたもんて氣が狂て身を投げて死んだげな」得意氣にお絹川の説明をしながら手織木綿の裾を無ざうさにからげた「可愛想にね」とお孃樣は同情した、お孃樣とはお政の舊主人て年は二十一女子大學の出身にしては珍らしい程沈着た美人てある色の白い細面月形の眉鮮やかな鼻筋の通た二重瞼の美しい花の蕾のやうな唇をゆつたりと結て房々とした髮を飾り氣のないエス卷にして紡の袷に亂菊摸樣の紫色の帶を胸高く締めて今日もテニソン詩集の愛讀書を抱いて居る「まさお前が暇を取てから辛い日が多かつたよ波雄さんはもう此の世の人ぢやないのだから千年經ても再會の日はないのだと思ふと私は……私は何を樂しみに生きて居るのだらうお繼母さんも伯父樣も嫁に行けつて毎日々々仰るの」恨めし氣に下唇を噛んだ政は困り果たやうな顏付をして惚然たゞずんて「まだ波男樣の事を思ふて居なさるか

止したがよいてがすぞ死んだ人つまんねえ」慰める心算か不平さうに云つた「私は忘れようとするのだけれども思ひ切れないね何十年經ても思ひ切る事は出來まいと思ふの私は私は思ひ死して終ふかも知れないわ」自暴氣味に云つて又白い前齒を見せて脣を嚙んだ「お孃樣はそれ迄に心を定めて居なさつても波男樣と婚禮した譯ぢやなしたゞ許嫁なんでがすから嫁に行けつて繼母樣から責め立てられますべエ」一々お政の言葉は飾氣のない裏のない熱情の籠つた心の響である「お前は呑氣でいゝね羨しいよ」お孃樣は政の肩に手を掛けた政は物に驚かされたと云ふ風に向き直つて「いんや如何して奉公して居ます時分は呑氣でもありやしたがな嫁に來てから苦勞の絕間なしてがサー」「あらお前もかえ」僞許りと云はぬ程に政を見た「良人は親切にしても呉れますが姑どんが私を出すべエ出すべエとして」後は得云はず政は淚ぐんだ「嫁になつちまうね」主從云ひ合はしたやうに云つた……、斯な夕を思ひ出て夢ても見て居るかのやうにお絹川邊にお政は突立て塵にまみれた亂髮を淸風に吹かせて女と云ふ身をつくづく考へたお孃樣もお絹も女なれや私も女だ皆思ひ思ひの苦勞をして居る女は丁度蔓草の如なものぢやあるまいか？良人と云ふ桓にからみついて居る間は女も苦痛は少いけれど緣と云ふ蔓を切り放されると私の樣に冷い地に這て悶えるのだ又お絹のやうに枯れて終ふのだお孃樣は蔓をのばして第二の桓にからみ付いたのだ彼の時矢張此の川の淵に立て責め殺されるまで波男樣に操を立ると云ふたが何時の間にか消えたと見えるあゝ人の心は變り安いものだ否々男許りぢやない女許りぢやない野の色と云ふて雲の色と云ふて世の萬物は變るものだとお孃樣の婚禮の夕一日の勞働に疲れた手を胸に押しあてゝ森川越しに夕榮の雲を眺めた。

女らしい素直な心を持つたお政の性格が能く出てるので、讀過の感が深かつた。趣向は平凡てある（評）

○許嫁の妹

大阪　田宮かをる

一

今日は日曜、秀子は一人、靜雄の宅へ訪ひにと來た。

「先日の日曜はえらい失禮を致しまして」

と丁寧にひさしに結つた頭＝それに桃色のりぼんを一つ置いて＝を下げた。

「いえ如何しまして、何の愛想もなく」

靜雄はこう云ふて、秀子の顏をじつと見詰めた。秀子はさつと顏に紅葉を散らしたが、右手て高島屋の印の

付いた、更紗の風呂敷を手速く解いて、小說虞美人草を出した。
「どうも長々有難う御座いました。」
と差出す。靜雄はそれを受取つて、
「いや早く讀めましたねえ。全り御讀みになりまして」
「はい、全り讀まして頂いたので御座います。眞實に漱石の文章は、何だか斯う理屈ぽくつてねえ。妾ほんとに好きなんですよ。」
「そうですか。私も漱石の文章は好きなんですが、あのう、未だ吾輩は猫であると云ふのが、三冊あるんてすが、どうです、御貸し申しませうか。」
「いゝえ、又今度、今日は急ぎますので……」
「そうですか。まあ御ゆつくり」
靜雄が斯う云つた時、秀子は小說本を包んて來た風呂敷をたゝんで居た。
「御じやま致しまして……又今度伺ひます。」
「もう御歸りになるのですか。それては又、……」
「さよなら」
「さよなら、又來て下さいねえ。」
秀子は歸つてしまふ。後て靜雄は、秀子から返して貰つた虞美人草の頁を、無意識にぱら〳〵とやつて見た。つと頁の、指さきに止る所がある。開いて見ると、そこに小さな名刺＝下の方に內藤秀子と記してある＝がはさんてある。次の頁を見た。そこにも又、紫糸て編んだ栞がはさんてある。靜雄はそれを取つて自分の胸に當てた。其手はたしかに震へて居た。栞を當てた靜雄の胸は、動機の高まるのが解る。
秀子は心なしに、唯置き忘れて、斯んな事をしたのか、いや〳〵、きつと私に何とか思ふてるのだ。どうぞそうあつて欲しいと靜雄は想ふた。

二

夜てある。足を延ばして見た。すぼめて見た。體を上向けたり、下向けたりする。が依然眠られない。閉ぢた眼は、自然と開いて來る。上向きになつて、足を延ばして、兩手を腹の上に置いて、天井を一心に見詰めて居る。机の上の眼醒し時計が、やかましく、かちかちとなつて居る。猶更眠られない。色々のことを想ひ出す。
靜雄は色々の事を考へた末、今日の晝、秀子から手紙の來た事を想ひだした。靜雄は起きて、らんぷの火を大きくして、机の前へ座つた。そして今日の手紙を、もう一度讀んで見た。早く明日になれ明日になると、

明日の午後になると、秀子の眞實の言葉が聞かれるのだ。――と想ひながら、又寢床へ入つた。靜雄は斯うして、何時の間にやら、眠つてしまつたのである。

三

今日、靜雄は、何時になく早く起きた。どうぞ、秀子が來て呉れゝば良いにと、一心にそれを想ひつめて居た。

晝飯を食べてから、母と下女とは、買物に行くとて、家を出た。靜雄は下へ降りて、奥の間で毎日新聞を一心に見て居た。そこへ秀子が來た。今日は何時になく盛裝して居る。此間の桃色のリボンが、純白のと換へてある。挨拶もすんで、秀子が斯う問ふた。

「あのう、昨日の手紙、御讀みになりまして」

「はあ、讀みました。」

「そう、て先日の栞のはさんであつた事知つてて」

又斯う問ふて、靜雄の顏を、繁々と見詰めた。

「あゝ、あれもたしかに、受取ました。」

語尾はたしかに震へて居た。

「で、妾の心、御解りになつて」

秀子は紅葉の樣な顏をして、靜雄の顏を、下から氣付はしそうに、のぞきこんだ。靜雄は無論、秀子の心は良く知つて居る。が此際どうも、解つて居るとは云ひにくい。

「あなたの心つて何」

斯う問ふた。秀子は、今迄氣付はしそうに見詰めて居た眼を、しばたゝいて、

「あなた、あなた、餘りだわ。之程妾が、思ふてるのに、少とも察して下さらないで」

秀子は、靜雄の膝に顏を押し付けた。たしかに、泣いて居るらしい。秀子の頭から、得も云はれぬ、香油の香が、靜雄の鼻を打つ。靜雄は、今までの心もどこへやら、やにはに、秀子を抱く樣に起して、

「冗談です。今のは冗談です。あなたの眞實の心は、良く承つて居ります。」

秀子は、涙をたゝへた眼を見張つて、

「靜雄さん、ほんとう、妾嬉しいわ。」

涙をたゝえた眼に、微笑をもらした秀子の艶な姿、ああ其艶な姿は、靜雄をして、彼の熱したる唇を、秀子の熱したる唇に接すまでに、はずませた。

靜雄の右手が、秀子の左の肩に、掛かゝつた時、秀子は、それを除けるかはりに、自分の左手を、靜雄の右の肩に掛けた。此瞬間、靜雄は自分の地位も名譽をも

忘れ、はた秀子が、自分の許嫁の妹であると云ふてとも考へず、ただ彼と、抱きあふのてあつた。

四

五年後の今日、靜雄は、幼い時からの許嫁、内藤光子を、妻として居る。光子の妹、秀子は、船場の名高い和紙商に、嫁いで居る。無論五年前、靜雄と秀子とのした秘密は、二人以外に知る人とてはない。

漱石の筆法を強いて摸したらしい嫌はあるが、節勁て讀み心地は好い。末節の感想を最も深く味つたら面白い物が出來たらうに（評）



下女　　天人菊

○暮鐘

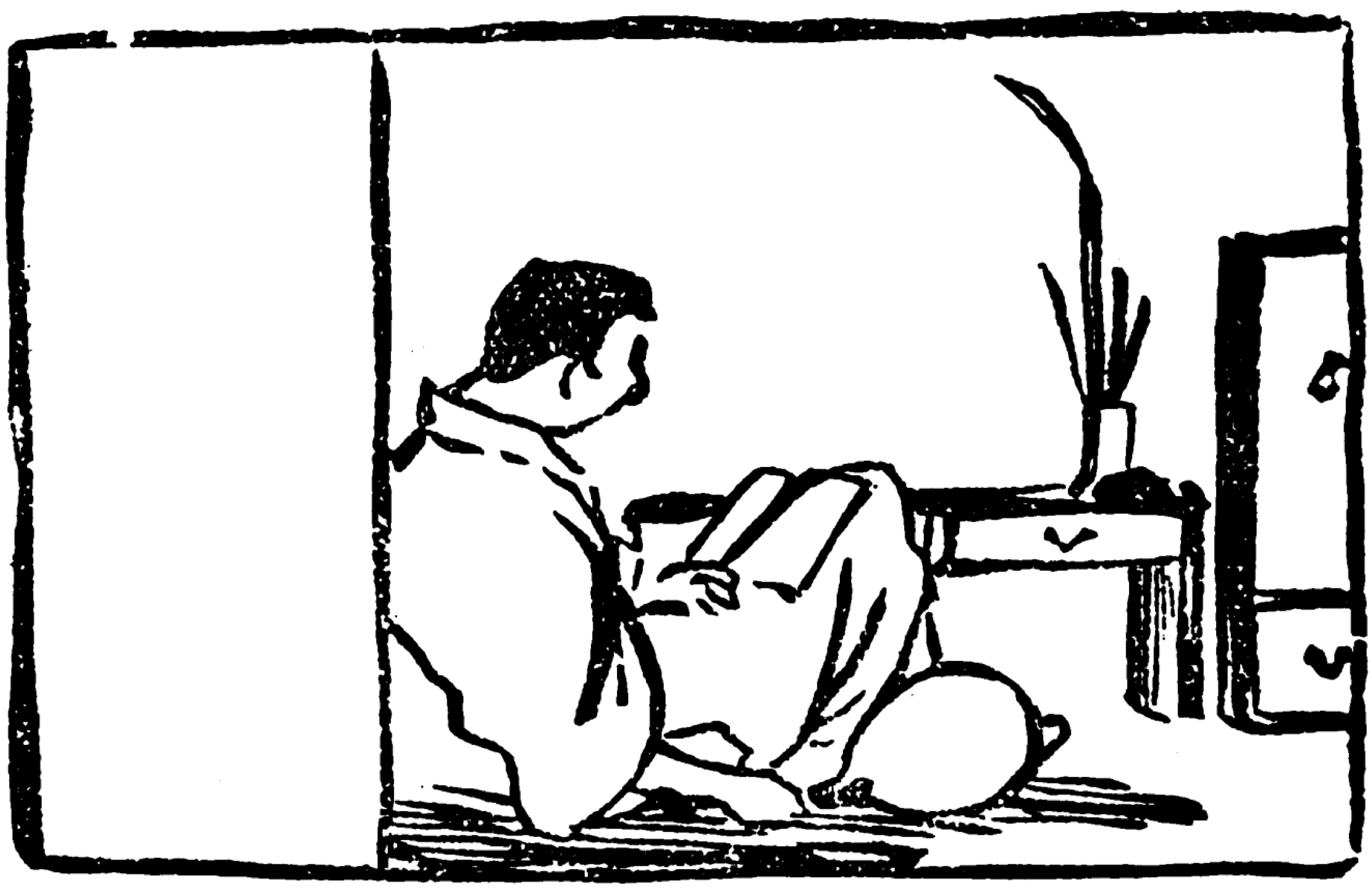
富山市　溪花女

紅こまかき楓の庭の、錦水湛ふ池の邊りに、悄然として若き女の、頸を垂れてたゞずみゐるに。柳の眉間は憂の雲よせ、涼しき眼には時雨やしつらん。病の故にや朱唇は色褪せ、うるしの髪は油氣失せて、亂れし後れ毛そよ風なぶる。暫時池水に姿を映して、ありし往昔を偲ぶが如く、身動きだにせず化石の如し。『あゝ夢なりき夢なりき、』斯く呟きて吐息を洩し『あゝわれ悔ゐぬあやまちぬ、母人許しましませよ。母の仰言を聞かざりし、罪いまこゝにむくひ來て、かゝる姿となりけらし。自業自得の罪なれば誰に訴ふべくもなし。』『うらめしきかな我良人、などかく情なくし給ふか、病氣の故といひながら、かゝる避地にたゞ一人、殘してかへり給ひしが、旣に三月をすぎぬれど、何の音信もあらばこそ、見舞の使ひもあらばこそ。風の便に打ききけば、内を外なる亂業の、花柳の巷に出入して、はしたなき女に情かはし、不德の行ひしたまふとかや、げにも諸人忌みきらふ、不治の肺病なればと

て、そは違はずやそのはじめ、誓ひし言葉、眞言葉に、残酷ならずや夫の君『(幾千年の後までも幾萬年の後までも、そなたとわれのまじはりは、そなたの心のかはらざる、否かはりてもわれはしもいかで心のかはらんや、一てう病魔に侵されて、無情の風の誘いなば、われ只一人殘るとて、何のあじきのあらばこそ、後追ひゆきて共々に、冥途の旅路たどらん)と石より堅くちぎりしを。われ今こゝに恐ろしき、病魔に侵されぬるものを、薄情ならずや、無情ならずや。』一時にもゆる戀愛の、わかき心にきざしては、前後もわかずもゆる血の、如何で消ゆべき事ありや、思へば實にあやまてり、一時の熱情とけ難く、かゝる無情の夫とは、しらず添ふたるわが心、あゝ母人よ許しませ、』涙は雨か霰の如く、堪へずやありけん、よゝとばかりに、口惜しきことの胸にせまりて、泣く聲げにも哀れに悲し暫時ありて涙をぬぐひ、絹のはんけち破れんばかりに、口に咬へてまた悄々と、噫ふびんならずや、此姿!『おもひ出せば去年の春、花も三分は咲きつらむ、母人われを呼びまして、姿勢正しくいはるゝやう、(汝もはや普通の學を了へ、齡も二九となりぬれば、嫁がん時期も來りけり、されば内々心してあたしに右より左より、そなたを望むもの多し、されど一長一短の、よき配遇とおもふもの、なかりし中に昨日なり、そなたも精しくしりつらん、潔の君とてそなた上は、幼き時は相共に、同じ學びの林にて、無心に遊びし人にこそ、齡もたしかそなたとは、二つ上とぞ覺えにき、親の慾目にあらね共、そなたも知れる如くにて、容貌美にはあらざるも氣立は無上に優しくて、其上屈指の財産家、無理にはそなたに勸めねど、此の家も元はあの人の、先祖のために之れまでに、なりしと思へばしかすがに、すげなく斷ることかたし、いかにやそなた義理なれば、まげても首肯してたべや』かくいはれたる其時の妾が胸やいかならむ、實にも母の仰言なれば、直に首肯すべけれど噫いかにせんいかにせん、如何にかすべき其時は、すでに戀てふおそろしき、惡魔のために魅られて、こたへに悶へくるしみぬ、否といひなばはゝうへは、いかにせられんさればとて、首肯しなば彼の人に、何といひわけたつべきぞ、むねは動悸たかぶりて、はれつせんかとうたがふまで、もだへ苦しみわづらひて、つひに夢中に答へしは、『あゝ母人よ實にもその、仰言の言葉無情なり、いかでか否とは申すべきさは去り乍ら母上よ、結婚は生涯の關とかや、いかにも潔の君な

れば、血統家柄性質など、非點はなけれど之のみは、當人同志のこゝろ意氣、相投じざれば如何にして、樂しき家庭の作れんや、潔の君は高等の、教育受けられし御身なり、妾の如き文盲の、よしその始めは樂しくも、教育たらぬ我なれば、後に必ず波風の、起るは必定其時は、狂へる海に捨小舟。さる時いかほど悔ゆるとも、かへらぬことなりそれよりは、轉ばぬ先の用心に、今斷然と、斷りてたまへよかし』とひれふして、夢中に言ひし言の葉を、母上とくと聞き給ひ、『げにもことはり然り乍ら、きよしの君に限りては、さやうの事はよもあらじ、母の願ひまけてたも、うけがひくれよ』と母上の、頭を下げての懇願に、心も大半動きしが、又思ひかへし〳〵、『仰せ背くは此上なき、不孝にあれども許しませ、さきにもいひし如くにて、迚も妾が如きもの、潔の君の側に、かしづく事の出來得るや、』きつと答へて妾しも、悄然頭を垂れたりき、母も妾は頭垂れて、言葉もあらて吐息のみ、しておはせしがやがて亦、言葉優しくいはるゝ樣、『それ程そなたの嫌なるを、强ひて配遇せしめなば、樂しき家庭はよも出來じ、よしさらば斷らん』思ひ出せば此時に、承知を答へてあらんには、かゝる憂目はみざりしを、あ許しませ母上よ、實に人の心ほど、世にわからざるものはなし、秋の空にも似たるかな、妾も最早此の世には、活き長らへて望みなし、苦しき憂目みんよりは……、苦しかりけんよろ〳〵と、椽端近く蹌踉きよりて、倒れし如く身をなげだし、顏を押さへて忍び泣く聲、神も哀れときき給ひしか、み使ならん秋の胡蝶の、悶ゆる女の耳のほとりに、しばしやすらひ慰めぬ。

納涼　栃木縣　槇本こう子



美しい七五調の文章に、思想も古い。此人には最と新しい諸家の作物な讀む事を勸める。（評）

和歌

佐々木信綱先生選



▲規定　殊更に露派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

秀逸

◎思ひ出てゝ花白百合を捧げけり父在す空母在す空　京都　田中文月

◎草花の日の神慕ふ夏の晝しほれながらも君を戀しぬ　奈良縣　我澤素枝

◎櫻花蕾のうちに口よせていき吹かけて早くひらけよ　栃木　津根美きち子

◎絹を織る百戸の村の春日和をさの響に桃のはなちる　松代町　一すみれ

◎知るや君君戀ひ初し其日より只何となく梭の手亂る　越後　五十嵐須賀

◎三千の白き羊の群に似し雲はしりゆく七月の空　大坂市　龍子

◎草かごのひもみじかきに緋だすきをつぎてのばしぬ花つみそへむ　熊本縣　金子片枝子

◎天の園虹さながらに乙鳥の渡ると夢む夜は春にして　西多摩　森田きよ子

◎野茨のかげゆく細き一ながれ眞夏の水のあを〳〵として　若狹　瀧本奈美子

◎南洋の沖の小島の少女等が眞珠とる夜か空に月よき　陸中　黑澤武子

◎雨かすむ小松が原につゞきけり一むら白き山梨のはな　上尾　飯島喜代子

○山綠霞の幕につゝまれて遙かに見ゆる白壁の倉　福井縣　霞田鐵子

○夢に見し宮殿ぞ添へてむふさはなむゆかしかぐはし紫の雲　遠江　岸つぎ子

○古寺にひとり淋しう經續めるみ僧の袖に桃の花散る　靜岡縣　藤波馨子

○去年の春若菜つみにしその友は今は御空に一人さびしく　京橋　草間けさ

○夜の空に咲き匂ふなる星の花戀ふてや出てし蝶に似し雲　群馬縣　須藤みどり子

○鐘の音は風の行方に沈みつゝ亡き姉偲ぶ夕恐しも　西多摩　原島稔子

○佐保姫の春を惜みて泣ますか散る花陰に雨交り降る　埼玉縣　中村勝子

兵庫縣　打女

○草ふかき賤が伏屋は人も來ず青葉若葉に雨しづかなり　陸前　沼倉孝子

○折るもうし捨つるもつらし櫻花折らで散るまでこゝにながめむ　京橋　野田胡蝶

○さゝ川に浮かべる花の一ひらは春のなごりよしばしとゞめん　函館　藤本鳥羽子

○舟うたの聲ものどかに春の海夕月匂ふいそのまつばら　德島縣　吉田紫花

○君が言なれば胸にはしるされどさて君なれば思ひ採らるゝ　鳥河畔　岩田江舟

○いひしらぬ悶を抱いて恨儀の彼の君の面影追ふても消えぬ　遠江　平野すみれ

○朧夜や靜けき里の田の面に灯影浮びぬ鳥かへる時　本鄉　朝井千とせ

○羊呼ぶ笛の音くしく身にしみて立ちうかりけり乳母病める宿　横須賀　藤野百々子

○夕日さす佛師が庭の山茶花の白きに香る鑿の音かな　讃岐　白ばら

○磐城野や野末につゞく賤が家紅梅散りぬ牛の悠顔に　紀伊　室井美那子

○星ありて夕雨するや荒磯の燐光動いて蘆の花白き　京都　吉山芳子

○梅の雨わづかに晴れて夕映の軒に露ほす賤が男の家　茨城　遠江女

○乳母の手になれて遊びし昔さへ偲ばるゝ花のしたかげ　西海濱子

○亡き母の墓に手向けし花散りて哀れに響く入相の鐘　岐阜縣　日野歌子

○山羊小家に月浮び來かほの白ふ小家のへだてに淋しき木立　伊勢　佐々木らく子

○この思ひ誰かは知らんこのまゝひ誰かしるべき君ならずして　館中　山口はぎ子

○思は今花の盛りとなりぬれどなほ雲ふかしもろこしの原　京都　栗山ゆり子

○咲の露雫の褄をおりたちて加茂の河原に布ひたしつゝ　千葉縣　中山孝女

○わがこゝろ露子の絹のましろきに今日染む君がくれなゐの花　兵庫縣　富士田章子

○手折なばすがた亂れて夏菊にむすべる露や玉とおちなん　紀伊　福本保子

○時ならぬ風に誘はれ逝く君のたのみ少なき世に秋ぞ悲しき　熊本　ふさ子

○さびしらに音づれ來しか夕風の柑子花さく山里の庵　信濃　鈴蘭

○散る花の行衛たづねんすべなくて我世の春ぞくれてゆくなる　北會津　白井絹江

○留守の間に泣きし瞼をなほさんと姿鏡に笑めど心和まず　福島縣　野の花

○ほとゝぎす栖かなる夕ぐれを二聲なきてゆきすぎにけり　大阪市　河路よしの

○君が影夕のもやにかくるまで柳の下に我立ちて見ぬ　山城　文子

○花すゝき霜に色なき我文よ草のたもとにまつ春の身は　千葉縣　岡部澄子

○冬の日は夏と云ひしも夏來ればまた冬の日のいとも戀しき　東京　秋草

○逝きませし胡蝶なしすふ菜の花の春しくも今日は刈り採られけり　佐渡　なみ子

○おばしまに白旭草ぶ寝院のあした靜かに芙蓉くづるゝ　信濃　花園守

○木の芽ふくまかに病める地にめぐる春の命の色にそまりて

和歌

岡山縣　菅森紫水

○川岸やなたれまじりの夢妃屋根ごしに見ゆ魚屋街かな
岐阜縣　日野歌子

○長き日の垣れ一重のへだゝりにわれは想の火を胸にたく
府下　しま子

○春日和花の木陰に佇みて歌思ひ居れば小鳥さゞめく
近江　太田靜江

○去年の今日かゝるおぼろ夜松かげにそゞろ泣きにし少女よいづこ
伊豆　露子女

○瞳はもゆびさしたまふ岸の邊に炎の夕さをさす子供等
北　秋女

○古郷の姉の緋桃に夢問へば一ひら高く風なきに散る
茨城縣　大崎賦子

○星消えて鶏啼きてあけぼのゝ花咲くあたり朝露ぞ立つ
大分縣　後藤はま子

○春風にさむき靜寂のゆめさめて藻の花戀にいまかなるらし
福井縣　片山千里

○啞の子が淋しき笑をもらすかのやうに咲きけり梔子の花
信濃　鹽原久枝子

○きら星の光消えゆき河添ひの柳に白むあけぼのゝ村
仙臺　早瀬このめ

○詩をおもひ詩にもだえて詩ならで詩にやせたるこのごろのわれ
和歌山　加藤薫子

○雨の朝かきつばた切る若人に傘さしかくる人うつくしき
伊豫　睦子

○戀といふ冠や誰の捧げけん野べに咲なる紫のはな
常陸　松澤よし子

○ほがらかに鶯啼きぬ靈寺雨後の夕日はしばしまばゆき
越後　河島和歌波女

○春の月塔をはなれていざよひぬ花はおぼろの清水の寺
松代町　すみれ

○白き鳩すみれくはへて紅の雲に入りたる夢を見し哉
秋田縣　島の海女

○花に住み花にうかれて花にゑひ花にたほるゝ春の蝶哉
信濃　權現原露見子

○照り榮ゆる入日まばゆし背き立てば細き吾影運命をかたる
上總　碧花子

○月匂ふさくらが下のうしろ影たゞなにとなくなつかしきかな
伊賀　山村龍子

○たづねくる蝶さへあらず卯月野の一もとすみれ我に似たるよ
下野　栗原くに子

○忘れ得ぬ君が言の葉くりかへし戀に幸なき我が身を泣きぬ
美濃　傍島みゆき

○纖手にて念珠くります奥つきやつめたきかぜはなみだふきゆく
廣島縣　笠岡すゝき

○君を送る夕波止場の月影に散りてこぼるゝ夕顔の花
攝津　寺部君子

○久方の月のかつらに咲く花のそれかあらぬか星の光は
神奈川　濟呂木たつ子

○繪日傘をかざし行く子の年若し花と見ゆるか蝶の舞ひ行く
青梅町　雨宮琴子

○雨晴れて汽車すぎにけり武藏野のみどりの原を僧一人行く
牡鹿郡　谷乃家百合子

○ねざめにも樂しき春のあさぼらに聞　も嬉しきうぐひすの聲
大分縣　安倍たま

○春雨にかれし小川の水まして清き流れに浮ぶ藤花
北海道　矢萩湛榎子

○あゝひと日君を見ぬ日は悲しみの胸に生ふ木を風どよもしぬ
若狹　てつえふ

○たづね來し山の麓の五軒家は早や灯ともりて秋の日暮れぬ
若狹　田中貞子

○總販ゆ小島の村の夕暮れは蓮帆かけて漁士歸りくる

○　中島黃薇
霞みつゝ花ほの白うたそがれておさらに落つる夕雲雀哉

○　茨城縣　西野香蓀
明けがたを一人散歩に出てゆきぬ草家ばかりの道多きむら

○　茨城縣　美笑子
我お宿の垣の卯の花咲きにけり一聲來て鳴け山時鳥

五月雨　大阪　田中あさ子

○　山城　村田政子
なつかしき友と別れを月の一夜川にをしめば雲舟におつ

○　美濃　日比野小雪
春の風秋をゆらぐ夕ぐれにほのかにも見ゆるたにあひのうめ

○　大阪市　山内溪子
朝明や百合咲く園につとよれば月は笑みます花の白露

○　攝津　和久薫子
うつし世のものみなねたう恨めしう君となきたる葉櫻月夜

○　靜岡縣　源岡さだ子
吾が造りし丸木の舟に君乘せて月見る今宵興多きかな

○　越中　山口はぎ子
風つよく吹けども消えぬ燈火は草に宿かる螢なりけり

○　東京　狄淳
病む人の枕邊に侍す眞夜中はおぼろ月さへ哀れなりけり

○　信濃　青木政子
もろつばさ南風孕み春の鳥君ます國の方へと飛びぬ

○　土浦　前原琴江
うつゝとも夢ともわかぬ有明の月をかすめて不如歸なく



○　大阪市　松田しづ江
里近く早やも來てなくほとゝぎす木曾の旅路みはつ夏と知る

○　尾張　鈴木詠子
庭の面の櫻の枯若葉して雨面白き夕景色かな

○　旅順　森田辰子
夢醒めて花の蔭の上に立てばはるの日かげはうすれうすれぬ

○　千葉縣　菅湖女
月の影細うも漏るゝあばら家に今宵病む身を時鳥啼く

○　丹後　國井峰子
しくしくと泣て母待つ少女子の袖に花散り里はくれゆく

○　相模　飯島登代子
人消えて行燈消えて朧夜の花に漂ふ有明の雲

○　北海道　秋月文子
夕暮の霞みや雨になりにけん夜しとしとと降り出したる

○　下關　長門すみれ女
此度は己が進みし旅出ながら夜な夜な思ふ古里の空

○　三重縣　山崎初子
朝まだきそゞろ歩きの森の道藤の香こむる初夏の風

○　千葉縣　小川響子
われ病めば籠の鶯も淋しげにうなじ垂るゝよ春雨のまど

○　上野　大沼素女
梅の花こぼれて白き芝の上に小犬眠りて風暖く吹く

○　伊豫　福井幸子
忍び來ぬその夜はせめて幻となりても見せよ君のみ姿

○誰が忘れ行きけん野邊の花籠の臺に狂ふ哀れ胡蝶よ　羽前　杉　栞　女

○紅や紫競ふ花衣爛漫を夢む春の人かな　伊勢　今村はつ子

○春うらゝ春を誦じのうたうらゝ蝶も數めく樂童のむれ　茨城　惠　月　女

○澄としてまた濁り〳〵ゝ淺瀬川きよかれとこそさす棹にしも　麻布　細谷杏子

○み空より星の落ちくる夢覺めて板屋に強き雨の音きく　秋田縣　島の海女

○日を待ちてまだ見もやらぬ櫻花心がかりぬ春雨の夜は　徳島縣　野　菫　子

○船にしてふたゝびめぐる湖のはなれ小島にばらの香たかし　宇都宮　落合菊子

○鐘の音は遠くうすれて花の里夕靜かに春雨の降る　下總　は　る　子

○蚊ばしらの四五尺さきを雨過ぎて月影すずし蘆ぶきの軒　下毛　千　代　子

○共に見し秋は變らで月ひとり絶えず涙のそでを訪ひつゝ　山形縣　長南白濱子

○春おぼろ遠山寺につく鐘も雲にひゞきて花ちりそめぬ　結城　齋藤元子

○絶間なく降り來る宵の五月雨に親しき友と歌がたりする　京都　赤尾恭子

○あたゝかき春の日影を背にあびて蛙がゆく道桃の花ちる　紀伊　田中早苗

○亡き母のおもかげ見ゆれ眼の前に香煙とならぶ水仙の花　下總　三橋千代子

○花園に日毎來て呼ぶ誰れならむ人氣もあらぬ青葉の奥に　常陸　佐賀芳子

神戸市　高橋歌女子

○霞ひく八重の潮路を君のせて龍の宮居の春を思ひぬ　土浦　佐野常代子

○かねの音のゆるふつゞける春の夕ちる花にさへおもみ見えけり　下總　す　み　子

○夕鐘は七つの峯の花毎に隠れ渡りてぞ鳴り渡る哉　宮城縣　金野たか子

○緑こき松の梢に涼しくもしばしはやどる夏の夜の月　三河　近藤壽美

○曙を丸に二の字の帆の見えて海原遠く潮のみち來る　大津市　夏山ゆり子

○春の風笛を吹けば山ざくらしのゝめ色に花をひらきぬ　豐後　加納豐子

○幼くて妹とふたり遊べりし故郷おもふやまぶきの花　陸奥　金澤やす子

○紅の紐ほほにゝにじむ少女笠彼の日彼の里たゞなつかしき　四谷　入　重　子

○影うつる紅よ緑よ花吹雪波紋つくりて鷗とぶ見ゆ　大阪　鈴木房子

○材木上ぐる音頭の節の面白う風靜なり春の日にして　新潟縣　小林久子

○いざさらば詩の小舟に棹さして遠くたづねん興深き春　長崎市　平田すみれ

○紫のすみれの花をつみにつみこかごにみだす春のわらんべ　山口縣　深　山　鶯

○窓の戸を明けて深雪を眺むれば何時としもなく肌冷えけり　常陸　小泉はま子

○若葉せる瑞木のかげに紫の筑波根望み君思ふかな　秋　野　す　ゑ

○泉湧う木間をくぐらき山寺や衣すゝぐ尼のおもて淋しき　神田　谷　歌　子

○櫻散る木の下蔭にたゞずめば袖寒からぬ雪ぞ降りける

○遠江　平野すみれ
朝霞袖ふり拂ふ春風や消え行く友に花の散りける

○長岡市　土田りた
鶯は深山を出て我父母の冷たき庭に今も鳴くらん

○峯　菊女
雨やみて光のどけき昨日今日君來まさずや我旅宿に

○大坂市　眞田芳子
鎮守の森の蟬聲しめじめと雨静なり青柳の村

○呉市　百合野里子
櫻花霞とまがふ吉野山大和心は滿ち滿つるかな

○大伴初子
朧夜の花ちりかゝるおばしまにふるさと思ふ若きやみ人

○大阪　新家月陽子
うす紅の絹糸たてに亂るゝと櫻咲く日の雨を見る哉

○印旛郡　加藤豊子
あだにのみ見るや憂世の花よりもみさほを守る庭の呉竹

○日向　乙女
ちる花をうかべてゆくやいさゝ川戀しききみのすめるみさとへ

○福岡　靜子
夕暮を馬引く人の唄細しなの花おぼろ川添ひの道

○伊勢　佐々木らく子
諸共に夢と思はんおぼせとのその宵の菜ぞまこと夢なる

○備後　井上年子
春雨に花散る音の聞ゆのみ御堂は晝も静なるかな

○大阪　百田富美子
紅の椿の花は野を流るいさゝ川にぞそと落ちにける

○芝　柳子
山鳩の鳴く音涼しく雨はれて木々はみどりのほかなかりけり

○大阪　木村春江
なやましと御眉ひそめやは胸をいだき給へりはるさめのまど

○芝　矢代則女
ふる郷の春に會ひたる心地して友と明かしぬ櫻月夜を

○豊多摩　田邊好子
春雨に針もつ手をばしばしとめ亡き母君の偲ぶ

○丹後　神田春子
蚊帳越しに見ゆる笠み指さしてまだ寝もやらず小さき妹は

○千葉縣　飯塚みどり子
巣籠り鳥巣作れる春の日の庭あたゝかに桃の花さく

○宮城縣　金野たか子
朝夕に空もやうのみ思ふらん苗代小田に心くだく身は

○埼玉縣　船津千代子
戀に醉ひし去年の我身ぞ恥しききみふみに殘る口紅のあと

○大分　陶山きよ
鶯のなく音さびしみ宿訪へばすみかさだめぬ花の枝々

○京都　澤田鶴子
ほとゝぎす清水乞ふなる柴人のうはるもおのが初音なりけり

○福島縣　増田銀鈴
いく度かかぞへてもみぬ母逝きて妹嫁きし十歳昔な

○鹿兒島　苔の雫
庭せき庭にも春はめぐり來て今朝ほころびぬ梅の初花

○相模　鍋田美代子
五年の昔なつかし貝拾ふ少女戀しぬ夏の夜の磯

○岩手縣　小野寺まき子
我がうらに打ち出て見れば末え初つの岩手の里につもる白雪

○静岡　石山ゆり
待わびて思ひたへたる曉にうれしくもなく時鳥かな

○東京府　原島稔子
打ちかすみ御嶽の山は見えれども多摩の川瀬は物すごくして

○金澤市　茄子野しげ
菅笠をかたぶけ見れば菜の花のをちにかすめる金澤の城

○京都　大草あさ子
五月雨にみかさ増れば川岸に繋ぎし舟も舟よりぞゆく

讃岐　夕ぐれ

○美しき少女ほゝゑむ水かゞみつばきくづれてさゞ浪ぞたつ
陸前　沼倉孝子

○うき事のむれに涌きくる曇る日も嬉しくきこゆうぐひすのこゑ
山口縣　松岡きさ

○ゆく春を滌むらさきの水晶に君よと彫りてなつかしむかな
熊本縣　杉森美乃子

○晴れぬやと悦ぶ空もしばしにて又降り出でぬさみだれの空
佐渡　浜子

○黒髪は尋にあまりて二十四の春は崩るゝ緋牡丹と逝く
鹿兒島　菅の雫

○燈火のほかげも淡く夜は更けて柴の戸たたく冬の夜半かな
静岡縣　吉川とし子

○去年ゆきし友のおくつきおとなへばしらつゆしげきゆりのひともと
岩、代　金子敏子

○黒髪の美しかりし夢さめて夕べ小百合の色あせし庭
下野　下河邊なみ子

○吳竹の笹の穂露に光ありて春雨の後に鶯のなく
日本橋　吉田さと

○去年の春君とかざせし其花を今は甲斐なき墓地にさゝげぬ
福井縣　片山千里

○佐保姫がうかれ給ひて唄ひます御聲と聞きぬ黄鳥啼くな
和歌山　神保すま子

○ほとゝぎす一聲もらせ此月に幾夜あかして人やまつらむ
静岡市　根岸眞江子

○いたづきの胸え抱きて佇めば緋桃散るなり春の夕ゝ
熊本縣　浦上國子

○君行かばさむき滿洲シベリアに大和櫻の花さかせませ
下谷　鹽飽文子

○桃割れの少女眞白の手を擧げて誰をか招く背をか友みか
張津つゆ子

○小羊にしづくら置きて百合の野のみち吹きゆかむしろがれの笛
東京　鈴木たか子

○永き日や麥まだ青き春の野に我子はぐくむ親雲雀かな
筑後　深山女

○世の人は訪ひ來まされど幽谷の庵庭には蝶や百鳥遊ぶ
小諸　鈴蘭

○うなひ等が手毬つくなる袖の上に白桃ちりて春日かたぶく
赤坂　成田垣子

○九重に匂ひし奈良の八重櫻いま學び舍の庭の一はな
信濃　はなかげ

○そよ風や兄ませし日の古郷の青き野見せて胸にふく哉
芝　小林華村子

○たそがれて採集袍背に負ひ歸る二つのリボンましろき
京都　岩瀬國子

○月おぼろ花の木かげにちる花を扇にうけて歌よまんかな
山形縣　齋藤菖蒲

○おく霜にひとしほ色のまさりけり庭の梢に殘るもみぢ葉
京都市　大井順子

○佳き人の美き歌となり詩となりて花はとぼそになりにける哉
静岡縣　冬野清子

○佐保姫の御袖のかげの櫻花雨に散るこそいたましきかな
長野　瀧澤はつ子

○奥深き文の林はたゆまずに勤めよ進め學の道を
米澤　相田清子

○月の夜に出でゝ仰げば天の川いともたふとし卯の世の國
京都　綿引眞砂

○青柳のなびく河邊に彳みて渡守よぶ春の夕ぐれ
茨城縣　木村倫子

○青柳匂ふ浮藻の花白く入江にくれし声の苫舟
高輪　秋草

○さゝ波にゆらぐ若葉のさか柳枝葉がくれに月や宿らん

○　小石川　小笹千代子
とま舩をもるる燈火影くらく五月雨ふりて夜はふくるなり

○　横須賀　佐藤壽枝子
亡き友のみ墓冷たく苔むしてたむけし花の風なきにちる

○　信濃　駒澤ひろ子
森林の上に隔しぬかの國と堺す山の春の夜の月

○　山口　酒向とし子
ゆるしませ心のこまのくるひきてのべつくされぬむれの思ひを

○　大分縣　御手洗操子
土筆持つ少女の笑みにひかれけり小蝶もつるゝ夢の畑道

○　大坂　中島きみ子
尺入は吉野の花の中にして淸くすみけり三日月の時

○　岩城　遠宮いち子
忙しき親の心を知らずして兒は乳を呼ぶ小田の畔道

○　下野　磯　みい
青波のいつもたえせぬ稲田さへしほれがちなる今日の暑さよ

○　大阪市　生田笑子
道とへば知らに窓の戸をあけてうらゝかき日をうかゞふ人や

○　千葉縣　並木きく子
母戀ひて木立淋しくさまよへばみ墓見えて悲歌思ひ出し

○　下野　くに子
行春を送らむ歌もならずして今日又暮れぬ山寺の鐘

○　布哇　上土井定子
われを待つ人しなければむせかずも異郷の空に春を迎へて

○　福島　川上ゆう子



女學生　鎌名子

なつかしき君のうつし繪手にとりて喃およん君よいく千代までも

○　豐後　皎月女
松風に答ふる浪の音淸く漕ぎ行く舟も淋しかりけり

○　鳥取市　上山千重子
みるにあかて刹な夕なにあこがるゝこゝろを花は知らずや有らん

○　長門　藤井誠子
いくとせもともにながめし校園の花散る下に君と別れぬ

○　佐賀市　野田えん
五月雨の軒もる水の音にだにおどろかさるゝ旅まくら哉

○　青森縣　松尾とし子
なげく時もれくる調子の曲きけば知らず識らずに手拍子をうつ

○　伊豫　子
咲匂ふ櫻の精やぬけて來し艶に氣高き少女の姿

○　上總　ちゑ子
なき母の御墓の前にたゞずむや風なき空に櫻花散る

○　長野縣　雨角りき子
宮嶋もものうげになく雨の夕緋桃白桃音もなうちる

○　岐阜市　篠田とみ子
さなきだに火ともし頃は淋しきをこよひないかに過させたまふ

○　名古屋　加藤薫子
打ちわたす霧のひまに見へ初むるあれやあふみの青柳のむら

○　宮城縣　入老賀子
菖蒲咲く沼の南の春の家詩よむ人のなつかしき哉

○　下野　青木たか子
逢ふ毎に新ににほふ君が笑みに胸をどらしぬ少女子なれば

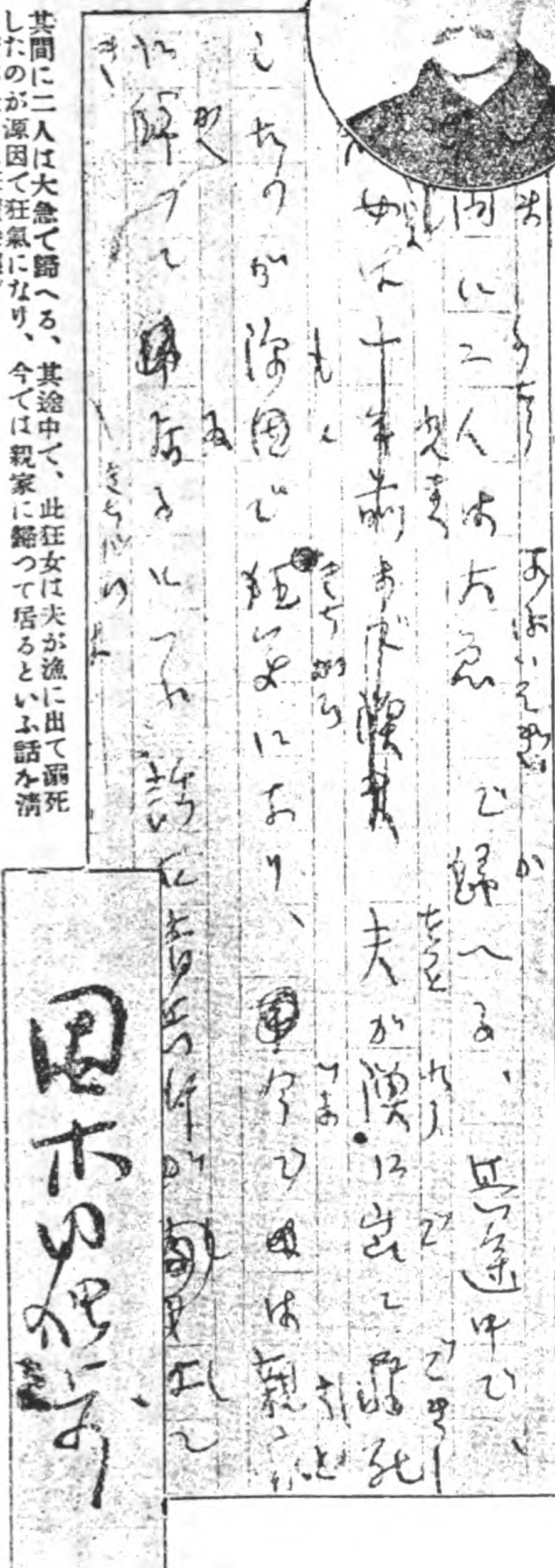
噫國木田獨歩氏

西大久保の大きな藁屋根の家に國木田君を訪れたのは去年新樹の緑滴る頃であつた、日の暮れ〳〵て折しも庭前から廻ると、ランプの光が障子に薄く射してある、君は例の通り元氣の好い態度で、文學の話や、自然の話をした、久しぶりて郊外生活をして見ると、又自然が面白くなつて來る、散歩がてら若葉の色などに氣を付けて見ると、朝日に向ふ時の活々した色や、風があると晝間、葉が飜つて白く見えるのや雜木林の樹に依つて一帶に若葉の色の違ふのや、若葉の研究だけても書いて見やうと思ふことが澤山あると君は語つた。而かも若葉が紅に染まつて、落ち盡す頃から君の肉は愈ゝ衰弱て來た、遂に都を去つて病軀を相州茅ヶ崎に養ふことゝなつた、六月二十三日、相摸の海に波暗く雨降る夜、「息が塞るやうだ」との一語を殘し、溘然として永久の眠に入つた、天下知ると識らざるとに論なく、苟くも讀書の人は皆獨歩の死を痛惜した、作家としては詩人肌の人、個人としては健闘の人、君の生涯は僅に三十八年であつた、けれど變化あり、光彩あり、決して無意味の三十八年てはなかつた。生の時間は人間の力を以て動かすことは出來ない、短き時間に爲した君の作家的生涯は模範として宜しからう。

（六月二十九日、君の遺骨を青山原頭に埋むの日、河井醉茗識）



故國木田獨歩氏
（永眠卅日前撮影）



獨歩氏筆蹟
（文章世界掲載『涙の音』の原稿）

其間に二人は大急で歸へる、其途中で、此狂女は夫が漁に出て溺死したのが源因で狂氣になり、今では親家に歸つて居るといふ話を淸兵衞が仕て（筆蹟参照）

時文

文壇の不振

文壇の波動は毎に一高一低がある、本年の上半期は波が甚だ低かつた、秋になれば何か目覺しい活動でも起るか知れないが、先づ本年は此まゝで終るらしい、自然主義を標榜する作家も昨年の餘波を受けて作しつゝあるが、近頃は實の入つた作も見當らない、藤村の『春』と、花袋の『生』は此間に在りて注意を惹いて居る、併し兩者とも存外評判の無いのは、倦き易い多くの讀者の氣が他に移らうとして居る爲ではあるまいか、兩者とも作としては眞面目なものであるだけ新聞向でなかつたかも知れぬ。

語弊

言語の弊害は恐るべきものである、自然主義と云ふ語の一度行はれてより、肉慾の代名詞であるかの如くして了つた、其罪多くは新聞記者にあらうと思ふが、少くも思想上、藝術上の一術語を斯くの如き輕佻なる意味にして了うと云ふことは甚だ嘆はしい、流行語と云ふもの決して宜い意味のものはない、眞面目なものはない。

内部の動搖

作物にこそ目覺しいものは現れないが、各作家内心の動搖は確にあらうと思ふ、根本の動搖、直ちに人生と交渉したる苦痛、此等の動搖ある證據として吾人は森田文學士の行動、川上眉山氏の自殺を擧ぐるに躊躇しない、今年は悲むべき紀念を殘す歳である。

淺薄なる樂天家

斯る時勢、斯る人類根本の解決をつけやうとして闇黑界に彷徨ひつゝある時勢に、淺薄なる樂天家が如何に眼前の諦めをつけさゝうとしても恐くは無駄であらう、人間の感情は日に荒んで行く、理智の働きは直ぐ或る衝動の下に破壞される、未だしも創作の感化あつて一層墮落する處を繼ぎ止めやうとしてゐる、學理や宗教で此の大暗潮を堰止ることは出來ない、却つて暗潮に乘つて來た文藝其もの こそ一道の光明を與へて居るのである。

詩壇の新形式

言文一致の詩がそろ〱興つて來た、當然起るべき筈であつたから、此度一つの形式にはなるであらうが、目下の處では只、從來の文語式を破壞して口語にしたと云ふ許りて、口語にした爲に感歎に値するやうな作もない、既に運動を起した以上は無意義に終らないやうに、何處までも努力して之をものにせればならぬ、大いに新進作家の潜心苦慮を促す、言文一致の詩なら作り易からうと思つて、侮つて入つて來たら大違ひだから一言を添へて置く。

二個の詩集

岩野泡鳴の『闇の盃盤』と、相馬御風の『御風詩集』とは相前後して刊行された、泡鳴の詩は角が多く、御風の詩は圓い、泡鳴の詩には底に光るものがある、もつと琢けばもつと光が出やうと思ふ、二個の詩集を同時に批評するのは便宜であるが、作者に取りては面白からぬ事だらうから熟讀の上、別々に所感を述べて見やう。

作れ女流作家

進めば閨秀作家になるだらうと思はれてゐる婦人は多少ある、諸君は大いに作るべしである、好い作を一生懸命に作りたまへ、嫉妬も無用、恐怖も無用、自棄も無用、只管自分を頼りにして好い作を出さうと努めたら諸嬢の力でも爲し遂げられぬ理由はない。

日記文

中村文學士選



▲規定　文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

五等

○逝く春の記

大阪市北區
蜆橋郵便局内　鈴木ふさ子

久々で友の家を訪ねたので、まあ〳〵と進められて夕飯を戴く。

奈良子さんと今お風呂を上つたばかり、五月の始めだが、團扇づかひがしたくなる程、夏でもないのに、門へ小さい椅子を出した、外はまだ明るい、宵の明星が二つ、店の陳列箱の鏡を、のぞき合つてはにつこりする。

どの家も、さつき水をまいて戸を閉めた、往來する、自轉車の燈火が急に目にたつと思つたら、邊は何時の間にか暗くなつて居る、一町西は心齋橋筋だのに、割合にこゝは人通りがない、懐かしい昔を思出さす樣な夕風に、履物と書いた、軒の灯燈がふら〳〵と動いて、何處かで、細い〳〵口笛が聞える。

奈良子さんの姉さんが、入口から半分顔を出して、横手の柱に手をかけて居らつしやる、天女がさつと彩いた、朧の月が照らして、片頬が蒼白く痩せた指、二十六で獨身だとか……

臺所で、「もう八時でござりますなあ。」とお梅どんの聲、妾も「おそくなつては。」と歸りかけると、奈良子さんが、「そこらまで。」と仰有つて一所に出た。

若々しい樂しさに包まれた樣な、奈良子さんの笑ひ聲に行く人がふりかへる、車夫が、「行きまよか。」「相乘りどうだす。」とすれちがふと云ふのを夢心地で聞いて、薄絹に掩はれた町を歩いて行く。

安綿橋を北へ渡る、欄干には妾の影だけ、長く、向岸にのびて行く、奈良子さんとは育英校の前で別れて。

華やかな奈良子さん、淋しさうな姉さん、思ふと妙に悲しくなる、逝く春の今宵、現心に友に別れたのが殘念な樣で、何か深く友の胸に刻み込まなかつたのを、悔むとでも云はうか、ものたらぬ心地がする。

と淋しさがせまつてきてそれを逃げる樣足を早めた我家までは、まだ橋を二つ渡らねばならぬ。

（評）結末、妙。

○晴日記

赤坂　成富矢須子

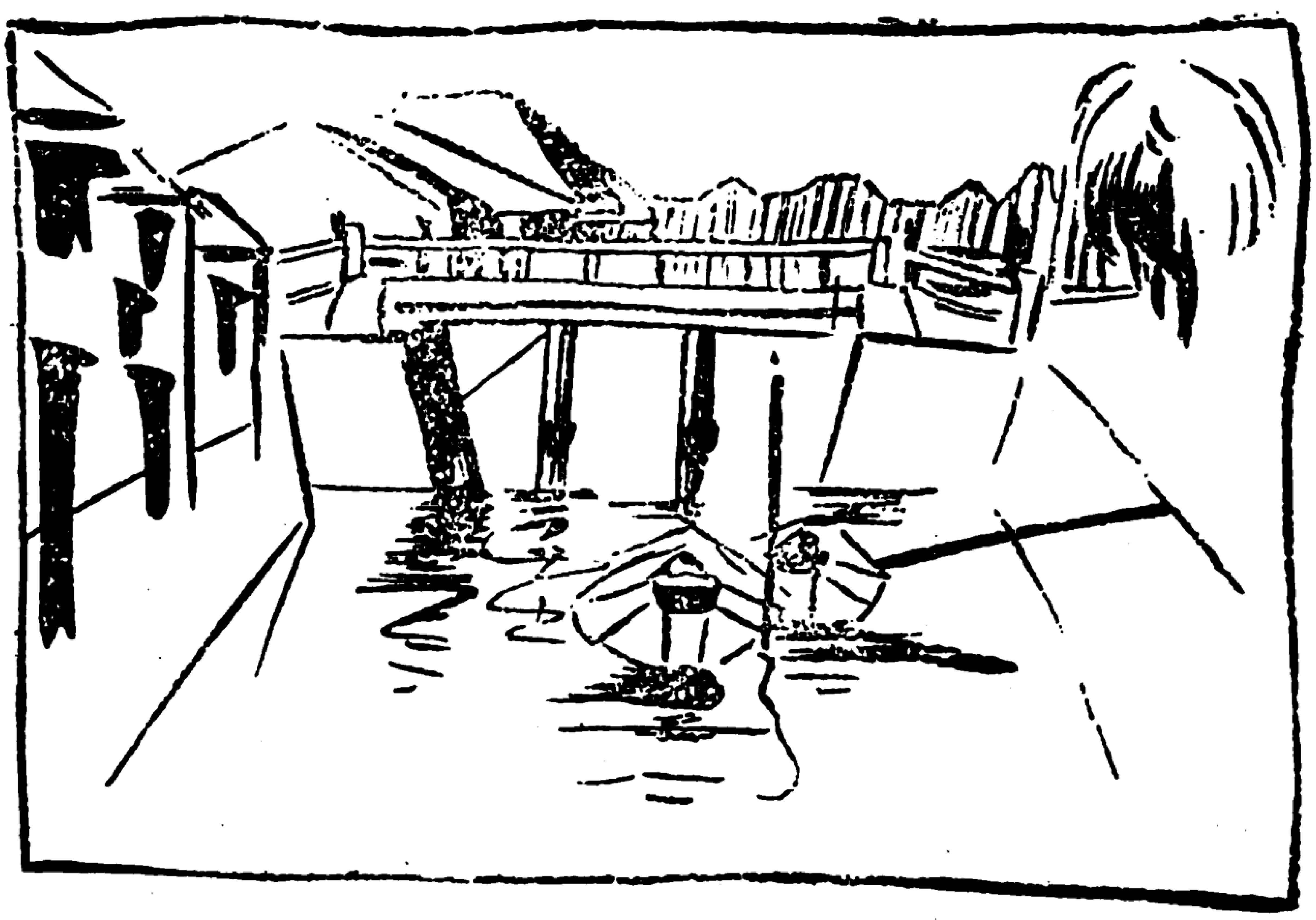
二十一日、袷にても好き日和なり、朝餉の後に二階に上れば、今日も亦緑の色すが〳〵しき木の間より、白雪深き芙蓉の峯仰がれぬ、いつ見ても崇高き姿や、麗けき春の日は高う登りて、青々と萌え出し、芝生の處々に白き花片のさながら友染模様のやうに、こぼれ居るも美くしや。

來客は多けれど、わが身を尋ねての君達にもあらねば、獨空想にふけりながら、心ゆくまで裁縫をなしぬ。

二十四日、温かき風に袂吹かせて、庭の築山に登り、池の邊を逍遙ひて、清けき朝の氣を吸へば、心地よき事限なし、花壇に咲ける西洋草花、名は忘れたれど、あまりに美くしければ切り取りて、机の上の花瓶に挿せば、えならぬ香の室に滿ちぬ。

讀みさしの黒潮見終りたれば、紫と日の絞り糸にて、リボン入の枝折を編みぬ。

橋　京都　神戸　まさる子



夕まぐれ淋しさまゝに、オルガンにて六段をひき居る折から、郵便の一聲と共に、なつかしき芳子様よりの御玉章、相變らず涼しきみ筆の跡にて、面白き事のみかゝせ給ふ、なほ〳〵がきに、明後日若葉の御宿尋ねまゐらせんとあり、讀み終りて嬉しさは小さき胸にあふれぬ、かの快活なる御口より、いかなる面白き御言葉や出づらん、早や二十日程もお目にかゝらねばと、そゞろ微笑まれて、夜直に御返し文認めぬ、お出遊ばしてからあげたらと言はれたれど、今日編みし枝折封じこめて送り參らす、折からお向ふの春子様にや、琴の音優しく聞えて、耳を澄ませば、「沖の方へと入る月」との殘月のしらべ。

○玉の日記

福岡　廣瀬櫻子

三月二十八日。庭の桃が盛りてあるしお天氣はよし、

椽になが〳〵と寢そべつて居たら、御孃さんが習字を濟まして、例の御庭で毬をついて居らつしやるから、ちよいと行つてお毬に戯れると、お孃さんおこつた振りして居らつしやるから、桃の木に登り上つたら、花が紅の雪のやうに、ひら〳〵と宙に舞うてお孃さんのリボンに載つたお孃さんそれと知らず、私を見てニコッとなすつて、また毬ついて居らつしやる。

三月二十九日。花ぐもり。お三の裾をちよいと引ぱつたら『あらッ』と金切り聲を出して、持つて居た御鍋の蓋を落した、あまり可笑かつたので裏へ驅け出ると、隣の犬のエスさんが、いやな顏して來て居たので、吃驚して椽に上つたら、琴をつゝんで居らつしやつた、お孃さん、

『玉よお出て……』

三月三十日。お孃さんまだ朝寢して居らつしやるので、そつと行つて布團の裾からはいり込むと御孃さんまだ夢の中、無理に起すのも罪だと思つて居る間に、私迄もとうとう白河夜舟、漸くすると、お孃さん目を醒まして『おや玉が』と私を引寄せて御なでなさる。

三月三十一日。お三が何かこはしたと見えて、奥さんから小言云はれて居る、とお三『玉でせう』と私にぬれ衣をきせる、これを聞いて居らつしやつたお孃さん『玉はそんな事しないよ』と云つて下さつた、其時の嬉しかつたこと、お三のうらみが來ぬうちと裏に出ると、櫻の蕾がちよい〳〵破れて、幽かしい香を洩らし、裏續きの野には摘草の歌が長閑に聞える。一羽の蝶は垣の破間をくゞつて去つた。

○日記の一節

信濃　彌生

七月三十日。青葉に殘る朝露を瑠璃色に照して太陽は昇りそめぬ、顏洗はむと小川の邊に行けば近くの山寺より朝務めの太皷の音聞えて三年ぶりにて來る祖父母の里のなつかしさに暫し四方を見廻しつ、向ふに見ゆるは鎭守の森なり、其すぐ下を流るゝ小川其上なる小山皆幼き時遊び廻りし處なり、見ゆるもの聞ゆる物皆なつかしく只眺め入るのみ、杜鵑の幾聲となく聞ゆるこそ、うれしくも又淋しき限りなれ、此聲も亦三年ぶり、晝過に家人は餅つきに忙し何故につくかと問へば土用に餅を食べぬ時は腹中に惡き蟲がたかる故なりと答ふ、さることはなき筈なるに、古よりの習慣ならむ。

三十一日。晴、母上より送られし小包とゞく、眞心をこめられし品々只有難さに涙ぐまるゝのみなり。庭のツミよく熟したれば木の一番高き所に上りて採り居たるに叔母樣よりお猿の樣だと笑はれてすぐ飛び下りぬ、ほんとに猿の樣、ツミは澤山とりしも叔母樣には差上げずと云ひて又も大笑はれ、一時頃より炎暑甚しく人に遁り少しの風だになければ竹の生垣動かんによしなく蟬の聲さへ却々にくるしげなるにたへかねて

牛ヶ澤に沿ひたる木陰に行きて暑さをさく。涼しく起る川風に今迄の暑は打忘れつ靑葉若葉の風にゆられて涼しげにサワサワと音して心地よきまゝに去年の冬生れたる勳の日記を讀む、こは叔母樣が勳を産まれてより十日目から愛子の爲に書かれしもの、上手ならる筆つき生れしばかりの小さき勳が見ゆる如く獨笑まるゝを勳が成人の後之を讀まば必ず大なる樂を得るならむ、夕づけば涼風立つ、螢とび交ふ夜を遠方より笛の音など聞えていと床し。
今日も亦杜鵑の聲に暮れぬ、明日よりは葉月なり。

○さみだれ日記　　赤坂　はる子

六月十一日。子雀のかしましく囀る聲に夢破られて起床す。前夜より續きて降る中を親雀らしきが餌ひろひつゝ巢に運ぶ哀れさ。まこと畜類に至るまで貴きは子を思ふ親心かな。けふは一きは故郷の母の上忍ばれ、殊に入梅なれば御老體御保養專一と文認む。
六月十二日。霙濺々雨潸々。只素々たる卯の花凡を拔いてひとりさかゆ。垣の朝貌のぶることと目に見ゆる樣なり。終日うさをバイオリンにて慰む。
六月十三日。庭の池水あふれて椽の下に流れ入る心地わるさ。濕氣を含む風うす寒くフランネル着ばやと出して見れば、未だ肩揚とりあらず。何となう過去戀しうて其まゝ着たり。大きなる手のヌッと出しには、叔母樣も竹（下女）も大笑ひ。
六月十四日。四隣寂寞。聞ゆるものは軒の玉水とほろりと落つる花柘榴とのみ。机のもとにつら杖つきつ、何を考ふるとしもなく思ひはあらぬ遠くに走り、たゞ眺むる庭、靑葉の樹々雨にぬれて悄然とたつ。
六月十五日。午後より日影きら〳〵とうるほへる靑葉にかゞやき、目のさむる樣なり。日比のうさも雨と共に霽る。得難き日和なればと柿の葉かげにて洗濯しつゝありしにあぢさゐの根元に戯れ居りし小猫不意に飛び出で、傍へに開きある蛇の目傘を破る。口惜しさやる瀬なく、したゝか盥の水あびせたり。
夜に入りてバイオリン奏でしに、誰やらんかいま見るけはひに何となう恥しうて曲半ばに止む。螢一匹池邊を飛ぶ。

○自炊日記　　深浦村　船水白梅子

四月十七日。天氣よければとて生徒を引率して、吾妻の濱に錦石拾ひに行く。某宮殿下に獻上せん爲なり。未來の國民が愛らしき手に眞心込めて拾ひし此石、やがて貴き園生に敷き給ひたらんには一層の光を添ふなるべし。午後便にて父の許より音づれあり。常乍ら我身々案じ給ふ有難き御心に感謝の涙を止めあえず、嗚呼父母よ千代迄も榮えませと祈りたり。オルガン練習後ピンポンをせしが昨夜の夢に似もやらず、大敗北したり。

四月十八日。鈍色の空、降りもせず、晴れもせず、晝いかの刺身す。晩は、ねぎと共に煮て食す、烏賊一つ三錢、ねぎ一把一錢。昨日の烈しき濱風にあたりし爲輕き風邪に犯さる。重き頭を癒さんと、ホ調にして、自作の柳の歌に譜を付けて彈いて見る、元より手に當り任せの譜なれど、引き付けらるゝ樣な妙に高尙に沈んだ調子に出來た、靜かに歌つて見る、中々面白い、マーチを彈く、頭も輕く愉快になつて來た、すると聯想が女學校の運動會に走る。面白いピアノの音につれて紅の袖を飜してダンスをした華やかな樣子が……今一邊あんな境遇にと思ふと、私等が神樣のやうに敬ひ尊んだ、何處やら淋しいお顏の音樂の名手小關先生の御樣子が有々と寫る。先生こそ女のお手本で有うと思ふた。練習時間によく間違つたが、一度もお叱りなく親切に敎へて下すつたけ、今思ふと勿體ない程、今頃は如何して被入るか知ら……。故鄕許り戀しく何んだか淋しい晩だ。星一つ見えない。波も中々高い。

四月十九日。晴。海原一面霞がかゝつてる、鶯の初音を聞く。久子樣より昆布苔の禮狀屆いた。夕暮女の子が圓く成て、中の中の地藏達何しになあてに背が低うぞ露に揉れて其て背が低いぞと、面白さうに遊んで居たが、崎の町の小供の一隊、中澤の者共綱に無いなしカーケローシヤ、カーケレナイナ、と節面白く勢よく來たらば、女の子等はワーと散り〲になつて仕舞た當地の風習として綱引には爺も婆も皆出る。

○憂愁日記

伊豫　福井壽美子

五月一日。九十の春光夢と過ぎ去りて、桃も櫻も翠りの葉かげに一二の殘花をわずかに止むるのみとはなりぬ。野も山も茂り合ひて、初夏の香微風につれて漂ひ來る。夜に入りて薄き月光のもとを逍遙ふ。君と共に逍遙ひし時のそゞろに偲ばれていと悲し。かすかにまたゝく星の青き尾ひきて西に流れしは、それや、懷しき君のみ魂にはあらざりしか。

五月二日。山巓を罩め居たりし霧は我が軒邊をもつゝんて、午後四時頃終に雨とはなりぬ。軒を漏るゝ雫の外何音もなくひつそりとして物淋し。君逝き給ひしより早一月忘れんとしても忘れず、窓に凭りて思ひに沈み居れば、偶然、靜けさを縫て鶯なく、一聲、又一聲、あはれ、君は此美しの音を、いづくに聞かせ給ひつるぞ。

五月三日。細かき雨は尙ほ止まず風に亂れて斜に飛ぶ。何處よりか鷄の聲が幽かに霧中を漏れ來る。ひつそりとして淋しき日よ、こんな日に君ましまさば……と想へば胸の呼動はいや高鳴りぬ。あな憂しと窓を押せば、今朝漸く綻び初めし葵の花が露を重げに首垂れて居ぬ。妾の身に比して何となくあはれなり。

○汽船旅行

日高譲子

入月十六日、母上と二人の旅行準備整ふ、午後三時、棧橋に走る、午後五時汽笛と共に巴港を離る、暫し甲板上に名殘りを惜む時、黄金色の夕日は太平洋に入る潮の音次第に高く、眠まふ心地して室に臥す、眼閉ぢ行く先の地、晝の事ども思ひ續けていつしか眠る、胸心ち惡しくなりて眼覺むれば苦しさやるせなく、母上もいたくよひ給へば藥とりてまゐらせんにも動き得ず、親不知といふ樣なり、薄暗きランプの動く事甚しければ惠山の沖なるべし夜のあくるのみ待たる。十七日、入港の汽笛なるか、嬉しくてよろ〳〵ながら起きて髮なでなどす、母上も元氣づき給ふ、ボーイ來りて云ふ。曉より錨いたみて修繕中なればいつやは知れず沖なかにて錨下されねば潮の流るゝまゝとか、あきれて窓を望めば水と空思ひはづれて元氣なし、午後になるも變なし、果物の水に咽喉をうるほして、今若し風の出てたらば何處の島まで流さるゝかと心細き話の中に日は暮れぬ、九時頃漸く進航はじむ、心安まりて夢路を辿る折しも轟然たる音とあやしき聲とに身を起して母上を呼ぶ、男の客人は暗礁々々とデッキにかけ出る音、さては此儘かと瞬間の思ひ千里を走るせん方もなく唯臥したるまゝ神にたよりて物音を聞くのみ、又轟然、再び胸騒ぐ、人聲高し、間もなく進航の音して氣ゆるむ、暗礁小さかりしためことなかりしとか、あやうかりき。八月十八日。ほの〴〵と明けて小さき窓より光さす夜中方向を失ひしとかにて今朝は襟裳岬より後戻りとか山見えそめてより三時間、午前十時上陸す、一夜の旅と思ひしを。



名古屋　きよし

實用文

谷江風先生選



◎規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

五等

○嫂の初産に叔父の許へ

大阪市北區西野田今開町　梅本龍子

叔父さん喜んでください、昨夜姉さんに赤兒さんが出生ましたの、それは〳〵可愛らしい男の子よ。

その晩はちようど兄様が宿直の當番でしたので、妾があの淋しい松原を越して知らしに行つたの、まあその時の兄様のお顏……兄様！いま姉さんに赤兒さんが出生きましたから早く歸つて下さい、と妾が急せき言ふと『エッ、生れて？』て仰有つてね、ほんとに可笑かつたわ。

それに歸路なんか妾を捨てといてサッサと走つてしまふのよ、いつも妾に『遠者々々』て仰有るくせに、昨夜の兄様は餘程遲て丶いらつしやつたわ、家に歸るとお父さまなんか、できた〳〵ッて躍つてね。

昨日までは淋びしかつた家の中も俄かに賑かになりました、兄様だッて姉さんのすぐれないお顏をみるといつも恐い顏をなすッて『どうしたのだらう、妊娠ぢやないのかしら』と仰有るし、お母様はお母様で『何とか言ふ嫌な病氣だらうよ』などゝ言はれるので、姉さんの切ない悶えのおやつれなすつたお顏にみえるたびに妾はもうお氣の毒で、いつも姉さんの枕元で、『何故できないのでしよう』と言ふて泣きますと、姉さんは妾の手を熱くなるまで握りしめなすつて『妾の味方は貴嬢一人よ』てね、ほんとに悲しい事ばかりでしたの、それに昨夜からは兄様だつてにこ〳〵なすつて『春、よう生んだ〳〵』なんか言はれるし、赤兒さんはお父様とお母様とて抱ッ競よ、未だ眼もみえない者に笑つて御覽などゝまるで狂人のやうだわ。

忘れてゐました、姉さんの産後は至極お達者です、ほんに先月あたりからは家中が寒い〳〵枯野のやうでしたが、俄かに暖かい春風が吹いて、お庭の緋桃で啼く鶯の聲さへ一入嬉れしうきこえます、今日はまた朝からじと〳〵と細い雨がふつて、紅椿の花が果敢なげに崩れますけど、ちつとも淋しかありませぬ。

叔父さんもお叔母さんも是非共赤兒さんをみにきて下さい、そして平和になつた家庭の樣をみてともに喜んで下さい。さようなら。

(評) たゞに出産ときけば誰しも頬笑まれぬるを況してこの文の率直なるが中に言ひしれぬ樂しき味を含み居て叔父なる人のいかに御頬やくずし給ひけむ。

秀逸

○音信なき友へ

兵庫 香川菊子

梅に宿る鶯のゆかしき初音をきかば、心既に春ながら花淺き枝に霞散る事屢々、餘寒の名殘りいつ立べしとも思はれず、雲山幾重雪を頂く信濃路の淺き春さぞやと偲ばれて候、其後はお障りもおはさずや、何かにつけて思ひ出されつゝも心にもなき御無沙汰の罪お赦し給はり度去年の秋病院に徒然を慰められし身のいたつきはなほ癒へやらず瘦身徒らに過去を偲びて時ならぬ時雨に頬を濕ほす事の幾度、夕暮雲の行衞を眺めやりつゝ戸に佇めば冷たき風の身に泌みて、心の限り淋しさを覺へて候、夜に入りて机に向へど何となく心安からず淋しさと悲しさの胸に迫りてやるせなきあまり筆取り申候、あづさ弓引き放ちたる覺はなきにあらねばお便り、閨中に燈火を失ひし思ひのせられてひそかにお恨み申居候、よしや一度のお返し言戴かずとも日に月に色も香もうつろひ行く菊の、はかなき君が友どちを思しいでの折も候はゞ、其夜妾が夢のいかにおだやかなるべきか、あはれおなつかしさの小さき胸に溢れ來て聞え上度事のつきざるも今宵あやしう心亂れて筆の運びまゝならず、さきくおはせと祈り參らせつゝまづは、かしこ。

(評) 行筆流るゝが如し才筆といふべし。

○花菖蒲を贈る

天鹽 小林清乃子

そつじながら一筆申上候、先日は美しき御手造りの藤の花お送り下されありがたく存じ候、妹こと殊更に花を好み候へば大いそう喜び居り候、さてこの花菖蒲は先年妹が兄のところにて二株程貰ひ候て培養いたし候ものにて此度珍らしきまでに咲きいで候間一株差上申候、元より彌生の花にくらべ候ては美しさはちがひ候へども妹が手づから造り候ひしなれば何卒お庭の片隅へなりと御植ゑ下され度候、先は御禮まであら／＼かしこ。

(評) あどけなくてよし、文意も亦よく通じ居て申分なし、此の上勉強が大切ぞかし。

○初めて母となりて

和泉 あい子

吹く風も香ににほふ今日此頃御許樣には如何に御くらし遊ばされ候や伺上候私事も其後次第にすこやかに相成り今は最早子供の世話も致され候程に相成り候まゝ御安心下されたく候今日は少しくひまも候事故母とな

り候てよりの事ども申上候さても藤紫の袴と別れを惜み此家の主婦となり候時にはテニス音樂に夢中になり居りしに引かへ一家の主婦になり候事とて重き荷をいくつもいくつも負はされたる心地致し候ひしに今又一人の母と相成り候事とて前にも倍したる重荷をおはされたる心地致し今までなほ殘り居りし學生時代の御てんばも急に氣がつきあらため候やら又はかゝる事をせば見習やせんかゝるしつけせば惡しかりけんなど思ひ氣づかれ未だ物心も知らぬ赤子にと我ながらをかしき時も御座候さあれ草木もねむる夜半何にをびえてか高聲に泣き出し晝のつかれにね込居候夢を破られすかせばとて乳をあたへばとて泣やまず一時間も二時間も起き出てゝ人々の目をさまさんと心づかひつゝゆすりつすかしつ致し候時にはほと／＼悲しく母子もろとも泣き候事もこれあり實に親はくるしきものよと思ひ候事は度々に候夫につけても身にしみ／＼と覺え候は我母の恩に候よ我母も此身を抱きたまひて寒き冬の夜半泣きたまひし事もありしかと思へば今までをろそかに思ひ居り候ひし事のいと勿體なく存ぜられて常々人々より聞き居り候ひし「子を以て親の恩を知れ」との言葉の實に實によくいひしものかなと思ひ居り候されどさは思ひつゝも萬分の一をだに報ゐ參らす事を得ぬ我身をうら耻かしく存じ居候。申上げたき事は山々に候へども先程より又々赤の泣き出で候と下女のつれ參り候まゝ此にて筆とめ候末ながら父母君へもよろしく御つたへ下されたく願上候、あらあら。

（評）評者は文題としてこの種のものを歡迎す、されど惜しきかなこの文未だ完璧といふべからず。

○別れて後教母なる君に

磯千鳥

師とうやまひ、母と慕ひまつりし事こゝに三とせ、おなじ宿舍の朝夕に、暖かきみ手とりまつりて、頰ずりせし事もあはれ儚なき夢と暮れて、會ふが別れの初めと言ひけん言葉の、冷かなる事實として我身にふり來り申候。

噫母上よ赤き煉瓦の校舍を後に、かへりみ／＼立出でし時の吾が心、思ひやり給ひてよ。更になつかしき母君がふりかざし給ふ白きハンカチーフの見えずなりし時の思ひ、いかでかゝる拙き筆もて云ひ表すことを得べき。けがれにみちし世の中も母君故にしのび申候ひき、さま／＼の苦痛も母上の笑顔に慰められ勵まされてすごし申候ひき、噫さるに今よりは何をのぞみに世をばすごし候はんや。

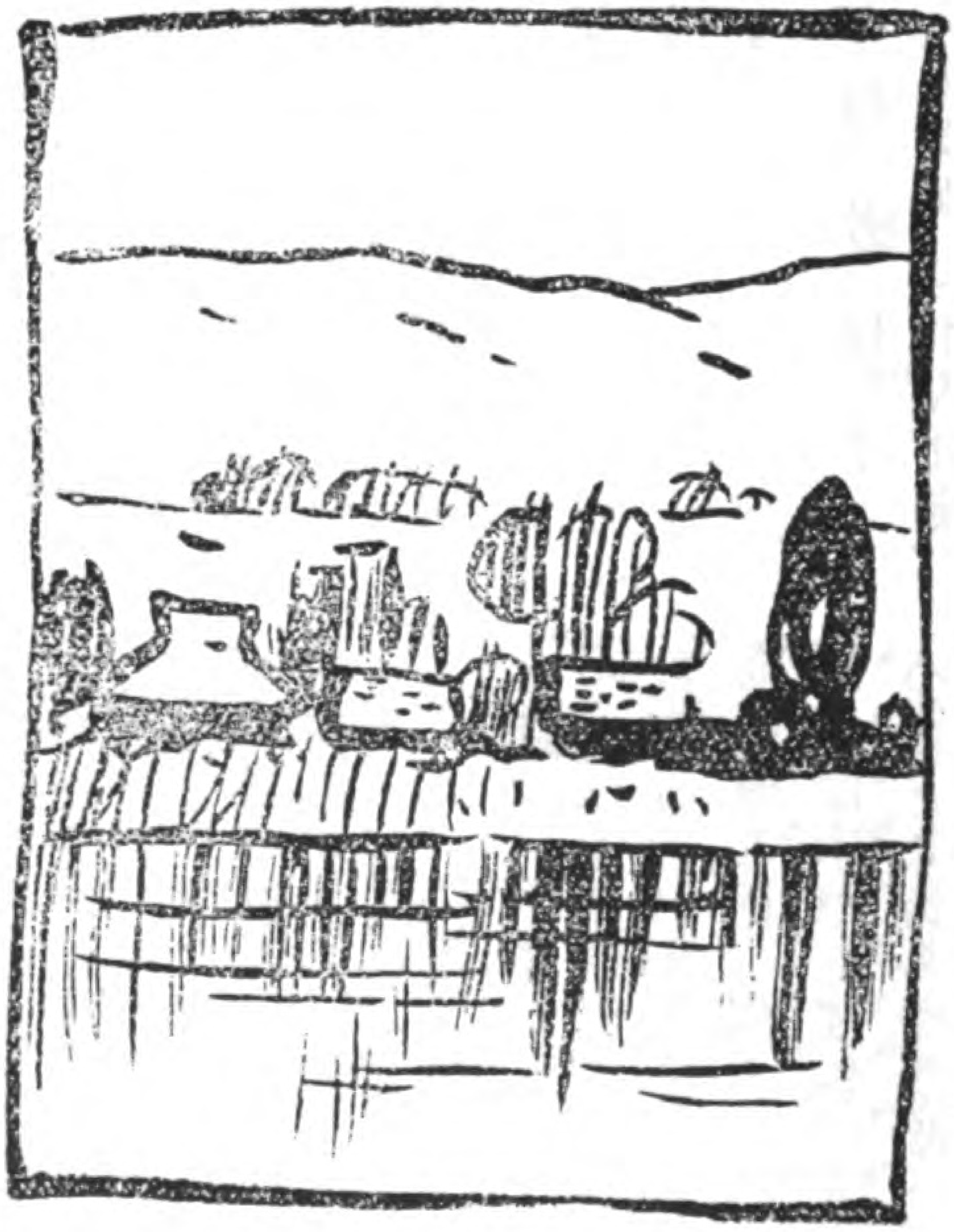
母上よ我ために祈り給へ。母君が厚き祈りの天なる父のみざに至る時、その時こそ君が愛し給ふ子供の一番

つゝき時にて候ふ。長閑なる春の日も物淋しく暮れ、破れ垣にもたれて寂しき落日を眺むる時の吾心、母君よ再び思ひやり給へ。過る日の追懐のまざ〲とあらはれて、我ハートは死ぬるばかりにいたみ候ふ。いさゝ小川をゆく水は、岸邊に生ふるわすれな草に、甘きキッスをいたし候へども、やがては心も流れゆきて、冷かに忘れ候ふ。その如くわが親みし友も、教師も、さては校舍も、つひには我名をわすれ、我かたちを忘れはて候はん。されど噫されど、母上よ三たび思ひかへし給へ我心を、世人はいかにわれを忘れ候ふとも、母上だに、母君だに、我を忘れ給はずば、千代はちよは滿足いたし候ふ。さらば折にふれて我を思ひ出し給はゞ其時は、千代はどこかて感謝の涙をさゝげて居ると思し召し下され度候ふ。嗟聖けき朝の讃美歌、靜かなる夕べの祈り、思ひ出する涙のたねに候ふ。さらば母上よ、雨の夕べも風のあしたも、御身に心し給ひて、み神のためにつくし給ひてよ。いざさらば!!

故山にて　千代より

（評）筆に之れぞ一難はなけれど現在の母に對しての文としてはいさゝか他人らしき詞ぶりにあらずやかくては誠しき情のほど薄らはあらずや、いかに。

田家



青森縣　松尾ちよ子

○養女に行きし妹に

無名子

菊さん、姉さんはいつも斯う思ひます、菊さんは遠い所へ行つて、別な父さんや、母さんを、お持ですから、嘸、此方らが戀しいでしようと、思ひますの、又、時々は辛ひ事もありませう、けども菊さんは最う少さなお小供ではなし、何日ぞや言つた樣に、必ず、父上や母上の、お口答なぞ、してはなりませんよ。

聞けば、菊さんの、通つてお居ての學校は遠方で山の中の事だといふから、道も嘸ぞ、わるいでしよう、から足も痛みませうけども學校なども休んだり、又お友達と、いさかひなぞも決して、してはなりませんよ。

そら、菊さんが、行かれる前に天神樣に、おたてになり

ました、梅の花が、花は申しませんけども、あなたが戀しそうに、一昨日、三つ咲きました、姉さんは、其を見るにつけても、菊さんが戀しくて、姉さんの、愚痴が、つひ涙がこぼれました、ほんとに近ければつひ行つて見たいに。

昨夜も今日は、お節句であるから、お花見に行きませうと降りの、美代さんと、一緒に向の山へ、お重を提げて行つた樣な夢を見ました。

今度のお節句には、母さんと、一緒に、お出でよ、姉さんは、菊さんのお顔を見たら、どんなに嬉しいでしよう、そして夢に見たよか倚ほよい遊びを致しませうよ。

まだ申したい事は、たくさんありますけれども、最う何も申しません、只々始に言つた事を、よくお守り下さい姉さん一生のお願ひです」さよなら。

（評）いかに離れて居ても姉妹の情はかくもあるべし。

○活花會を友に知らす

本郷　朝井松子

文して申上參らせ候、扨昨日高濱先生より、「申入れ度き事有れば」との御使ひ有之候儘早速參上致し候處、兼々御噂承り居候若先生の御脩號御披露と高弟方三人の奥傳御許とを兼て明後八日より三日間伊勢平樓にて大會御催しの由、就ては例に寄つて門人一同挿花せよとの御申付けに御座候、委細は封じ置候心得書を御覧遊ばされ候はゞ御解りの事と存じ候儘くだくしうは申上候はね共、先生よりの御言傳に「杉浦樣には日頃の御手際を以て白と紫の藤を株分けにものし給ふやうに」と仰せられ候、又妾は牡丹か杜若をとの御差圖故もし杜若ならば水盤へ、牡丹ならば籠活の積にて候、何卒御目もじの上いろく御相談致し度き事共有之候へ共生憎今日は横濱の叔母が參り居候て何分參上致し兼ね候に付、もし御出席遊ばされ候はゞ挿花は明日夕刻迄にとの事に御座候間何時頃よりお出廻し遊ばされ候や、道順故お誘ひ申べく候儘一寸御返事きかまほしく御待ち申居候、先は取いそぎ申上參らせ候かしこ。

（評）文意明晰、趣味に富む。

○病後友に

紀伊　室井美那子

お見舞下すつて有難う、恰度約束でもしてあつたかのやう二十日目ですつかり快くなりましたの、けれど其間どんなにか苦しみ惱みましたらう、明けても暮れても陰氣な雨、偶々はれたつて曇てばつかり……だが病む者は幸ひですね、妾苦しみ惱んだ丈けそれだけ又悟つたとこあるやう思へてならないの、本當の病の中には神樣のみ意があるやうね、誰かゞ「覺めざる者は之によつて覺まされ既に覺めたる者は又之によりて瞑想の機會を得る」つて言つてるやう覺へますが、實に眞理だと痛切に感じました。之から活動します。

（評）想高し。

さとみやげ

服部貞子

柿の花

私は片足を石段におろしかけたまゝ、擴がらうとした洋傘の手も躊躇つた。

ほろりとまた、目路やゝ遠いところに響は消える、日かげの土の黒さを打つ音の、その幽かなのを、その床しいのを、どうしてこの足音に打ち消すことが出來やう。私は其床しい響を、聞き洩らすのを恐れて立ち竦んだ。

立つて居るのはわが實家の、頽れかゝつた裏門の石段である。苔蒸したこゝにも、葉かげの限りは柿の花の、古きは濃い茶に、新らしきは白く、萼の緣りに彩られて落ち散つて居る。

黒板塀に背中を合せて造られた一連の長家は、見るからにむさ苦しく、屋根の草も可なりに延びて居る。壁の落ちかゝつた端の家の前の、いぢけた檜扇の咲きかけた井戸端には、中古の印半纏を着た男が後向きに蹲んで居た。研ぎものとは其體のゆらぎでも知れる。傍に置かれた手水鉢の水は白く濁つて居た。

柿の花は頻りに落ちた。もの靜かな晝である。

ふと目の前に人影が立つた。ひよろりとはして居るが、八つか九つ位らしい男の子、青ぶくれた顏の眉毛は薄く、小さな目はどんよりとして何の働きもない。形の剝げた行丈の短い筒袖を着て、小さな其目でつくづくと私の顏を見て居る。何の積りか藁を嚙んで居た。

私も凝視て居た。暫くするとふら〳〵と柿の木の下を横切つて、研ぎものをして居る男の方へ行つて其前に突つ立つた。着物の臀が赤黒く汚れて居た。

男は一寸顏をあげたが、

「なんだ勝う……うゝむ?」

と氣のなさゝうに言つて、また兩腕に力をこめてごしごしはじめる。

二三日前まで、今は空家になつてる端の家に居た車夫の伜で、屋賃の滯りで逐ひたてられてからも、毎日

ふら〳〵と遣つて來るということは昨日聞いた。馬鹿でおまけに無籍者だといふ。

晴やかな六月の日は額に熱くなつた。私はふと新町の伯母訪ふと出掛けたことを思ひ出して石段を降りた。

柿の花散る、柿の花散る！と歌になりさうな想ひを繰り返しながら、道を曲らうとして、またなんとはなしに振りかへつて見た。

――あゝあの子はまだ立つて居る。



お豊

雨は降る、降る。小褄はとつたが、駒下駄にははねあがる飛沫の素足なれば殊に氣持ちの惡るいこと甚しい。今少し小降りになつてからと婆はとめたけれども、假に人ないところで靜かに考へて見たくなつたので、番傘を借りて暇をつげた。

裏口から裏口へと敷きつめた炭俵は、踏まるゝ度に濁水が浸みあがる。いつ晴れさうもない梅雨は、じわ

じわと傘を打ち、袖を濡らした。

婆は見送つて居る。と思ふと、其日に涙のあるのを知つて、婆を憫れむのか、お豊を悲しむのかはたまた我身を憐れむのかたゞなんとも知れぬ涙が胸にこみあげて來た。

檐には露切ると細引をひいて、桑が枝のまゝかけられてあつた。皆蠶室に行つたと見えて、母屋には一人の影も見えなかつた。廊下を通つて離れに入つたがそこも檐は桑のために暗い。大儀な軀を横へて私は吐息をついた。

今更にお豊の昔が思ひ出される。

お豊は私を姉様と呼んで居た。年は二つばかり多かつたが、恐ろしく老成たところと無邪氣なところとのある女て、常にふい／＼と面白いことばかり言つて人を笑はせて居た、其顔付手付がまた可笑かつたので、私はいつも苦しくなつて、腹を抱へては逃げ出したものだつた。

お豊は字が一字も見えなかつた。貧困つて困つて、貧窮り拔いた頃に育つたので、學校へもあげられず、十一の時から在方に子守にやられてしまつた。さうしてやう／＼家に歸つたのが、確か十六位の時てあつたらう、大きな中剃りと、眞黒い顔と、其言葉とは、暫らくの間笑ひの種となつて居た。その頃は、私の家でおろしてやつた資本てはじめた豆腐屋が、めき／＼と都合よく行つて、兎も角も喰ふに困るやうなことはなかつたので、お豊もそれからは家に居ることが出來るやうになつた。併し一年の半分は私の家て暮したといつても宜い、此頃のやうな養蠶時の忙しい時は勿論さもない時ても、一日に一度や二度は必ずやつて來て、そしては人を笑はせて行く。尤も家は近かつた。

お豊はまた何ても眞似が上手だつた、芝居の眞似よし、源水の口上、人の癖ても何てもござれ、人が大笑ひするのを見て自分も喜んで居た。かくした女に誰も眞面目な相談を仕かける者はなかつたので、自然世の中の事情に疎い……といふよりは、すべての思想が極く幼稚だつた。

私はお豊が大好きだつた。お豊も私を好いて、私の言ふことはなんても感心して聞いた。喧嘩はよく毎日のやうにしたけれども、短い前掛をしめたお豊は、目尻の下つた兄の子を負ぶつて、すぐにこ／＼とやつてくるのが常てあつた。

お豊は縁が遠かつた、見事に發達しきつた肉體は徒

らに着物の行きを短くさせた。彼女も來年はもう廿三になります、と婆がよく母の前に首を曲げるのを見たが、其頃、人知れぬ戀に敗れて居た私には、大きな體をして子供を背負つて歩くお豐が、せめてもの慰めてあつた。私は祖母の秘藏娘、その顏色を覗つて、思ふても言ひ得ない、爲し得ない義母の仕打ちが氣に入らず、拗ねて〳〵、數ある良縁も我から無茶に斷ち切つた。

新婚の人の交情に、情に驅らるゝ無智な男女の驅け落ち、こんなことが話題にのぼる度に、お豐はいつも皮肉な、腹の皮を縒らせるやうな茶かしを入れた。文字なき者の常として、其言葉は露骨に過ぎたけれども、悶へては人も呪つた其頃の私には、それが、何事かを復讐し得た時のやうな冷笑み泛ぶ心持ちに聞かれたのてあつたが……お豐は家出した。或る夜お豐は或る男と手をとつて驅け落ちした。

出し拔かれたやうな腹立たしさに、私は其時お豐を信じて居た自分の心を嘲笑つた。いつともなしに胸に抱いて居た處女の矜り、其力の弱いのも知つて、間もなく私も平凡な生涯に入つた。

お豐の子は二つになつた。薄暗い佛壇の前にいんこして、ちゆう〳〵澤庵を嚙つて居た子の、氣味惡るい程細い手足、ぶつ〳〵と腫物のふき出た大きな頭、思はず胎毒の恐ろしさに身を慄はしたが、婆は此子が可憐しいと指さして泣いた。二年目にぶらりと歸つたお豐は、腰のたゝぬこの子を置ざりにして、間もなくまた飛び出したといふ。

身内を環る不安、慵さ、味氣なさ、梅雨の欝陶しさは此身に堪え難い。

常ならぬ體故と人は言ふけれども。

卯の花垣

「何家へ？」

下梳のお仙ちやんが、荷物を前掛にまるめ込みながら膝をついて顏を見る。

「……相原さんに昨日あがらないてしまつたから……」

先て縺れて支へた毛を手をかけてひいて、

「少し順が惡るいけれども」

とすつとまた梳く。

お仙ちやんは出て行つた。横目て其後姿を見やうと

して居ると、

「いかゞてせう？」

と前髪を持つて鏡を見て居る。

「相原さんて謂へば、あのお得さんが養子に行たんだつてねえ」

と私は其事を思ひ出して、鏡に云つた。

「はあ、あのさうなんですよ……」

と饒舌る用意に唾を一つ飲んで、

「なんだか此頃評判が惡るくつてねえ……旦那樣と出來てるんですつて」

すつ／＼と手際よく毛筋を使つて、鬢の毛を結んでさげる。

「いやだ…オホヽヽいくらなんだつて」

私は思はず失笑した。

「いゑ、眞實なんですつて……」

と眞顏てちらと鏡を見て、

「あの奥さんが亡くなつてから、あとを二人まで貰つたつたんてすがね、お得さんが極道つて居られないんてすつて。その後の人は郡山なんてすが亭主がね、あんまり道樂者なんて愛憎をつかしてこつちへ來たんださうてすが、その通りだから一月と居られないんてすあ、さればつて夫婦の縁を切つて來たもの今更おめおめ歸られやしませんしね。あの何、大野屋……今大野屋のお針になつて居ますがね、私はあゝいう怜悧な娘に初めて遇ひましたつて言つてますよ。それは／＼極いんですつて……」

ぎゆうと締めた元結を一寸嘗めてまた結ぶ。私はたゞ微笑んで居た。

「あのもと高久田から行つた陽一さん……とかいつたつけあの人は今矢つ張り米國に居るの？あの人と取り合せる積りなんてしよ」

「いゑ、いゑ、あの方はもうすつぱり縁が切れてるんてすつて、今ぢや立派なお醫者樣になつて子供もあるさうてすよ、大變彼國はお金になるんですつてねえ……」

て、今度は話が其方にうつるかと思ふと、また、

「なに／＼しても評判てすからねえ、皆んなが言んてすからねえ、まんざら嘘てもないかも知れませんよ……いつ行つても眞つ白くお白粉をつけて」

「だつてまさか……」

私はやつぱり笑つて居た。

取り合はないので一寸また鏡を睨めたが、頭に差して

た毛筋を拔いて、そのまゝ默つて髷を掻きはじめる。鏡の面が暗くなつて來た。降るのかしら、と思ふ間もなく、雨呼ぶ風がさら〳〵と、竹の葉に鳴る。

「へえ前髪を……」

とやがて私の手に鬢掻きを渡した。

それから二日ばかり過ぎてのこと。

私は伯母の家からの歸り相原醫院の脇の道を通つたふと此間の髮結ひの話しを思ひ出して、背の低い、赫ら顔の、産科を得意としてゐる、時世後れの醫者と、同じ系の相原という、白い鬚の生へた士族の家に生れたお得さんとを思つて、彼樣な話は嘘だらうと思つた。家の裏には、昔ながらの小さい石の祠に、色の褪めた赤い木綿の幕が張られて、それを圍んだ卯の花の垣は眞つ白に咲き亂れて居た。

「こい〳〵〳〵」

突然人の聲がする。今まで蹲んでゝも居たか、垣根近くにすらりとしたお得さんが立つて居た。お得さんとは插花の友達、きちんとした人て、いつも唇の皮が乾いて割れてる人だつけ、こんなことを思ひながら、私は一寸笑顔を見せた、そしてまた彼樣な噂は嘘だらうと思つた。

ころ〳〵と鈴の音を立てゝ、むく〳〵とした小犬が其足許に戲れて居る。

私は其犬が欲しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

御不沙汰のお詫までに拙いものをお目にかけます實家に歸つてかれこれ一月、かうした筈てはありませんてしたが、祖母の主張て、實家と婚家との間に再三の手紙の往復、つひ身二つになるまでは其里にとゞまることになりました。蠶は今四眠を覺めるところ、家内の者皆手古舞ひをして居ます。てはこれを里だよりの第一信とも。さよなら。

六月廿日　郭公なく里にて、澄子

道子樣



新體詩

横瀬夜雨先生選



見て振假名をつくること
懸賞は甲種の規定に據る

三等

○汝の爲に

阿波　長曾我部菊子

『汝の言葉は婦人の口によりて敎へられ、汝の涙は婦人の手によりて拭はれたり。汝のまさに死なんとする時にあたり傍に侍して汝が臨終の語をきくものも亦婦人なり』
（バイロン）

「七本櫻」を讀みて埋れ草の君をなつかしみはるかに月波根詩人のもとにささぐ。

野茨の花の散り敷く小河原の
石ころ道につまづいて
草に埋むる愛敵に
胸をし柔すたまゆらは
再び夢の見えかへれ。
顏花の色とはいはず少女われ、
繋げば解る五尺の毛は有りながら
命なりけり一人ただ
逸れて侶無き野を往くも。
ああ野の花に見る紫の
雲鬟くてふ二並や
阿波の山の下にして、人生を行くに
足なやむ君が旅路は長からん——
長からまし。
夢殿ごもる七媛は
櫻と見しか、飜り來る
花に光なき苑にして
肩かす人もおはさずといふに。
思ふは出羽の海べより
雪ふりくらす冬までに
行かん常陸へと契りし
あくらの濱の埋み人
いつの日君に

否、七行く少女は終に行路の客なりき。埋れ草もまた行路の人なりき。冷笑す、汝すでに人の世を行くべき足を削らる、なんぞ思ひの翼にのりて彼のあをぞらに翔らざる。汝の眼また病むときく、晴れがましき人の世の旋渦に眩せんより、仰いで天上に燃えさかる煉獄の火の白きを見よ。汝の心すでに平和を傷けられ圓滿をそこなはる、行け、最後の希望は汝を待てり。

四等

○悲しき丼オロン

東京　野村光子

雨の音のしめやかに
牡丹くづれし宵にして
寂しらに居しわが魂は
ゆかしき人の柔胸に
奏でられたる金玉の
絃の音色に溶け入りぬ

春の山行く七少女
七色色のあや被衣
留針を拾ひてかへせども
人は霞にまぎれ入る——と

哀音籠る丼オロンに
涙こぼさぬ猛者は不知

母にすねて日本風にはあげぬ黒髪の
柔かき情もちたるわれも少女の
人生の
年齢の階段幾段か
『寂寥』と『哀愁』のいたましき
荷を負ひてのぼり來し人の悲歌聞て
心ぞ闇るる遠く望むに

感謝。

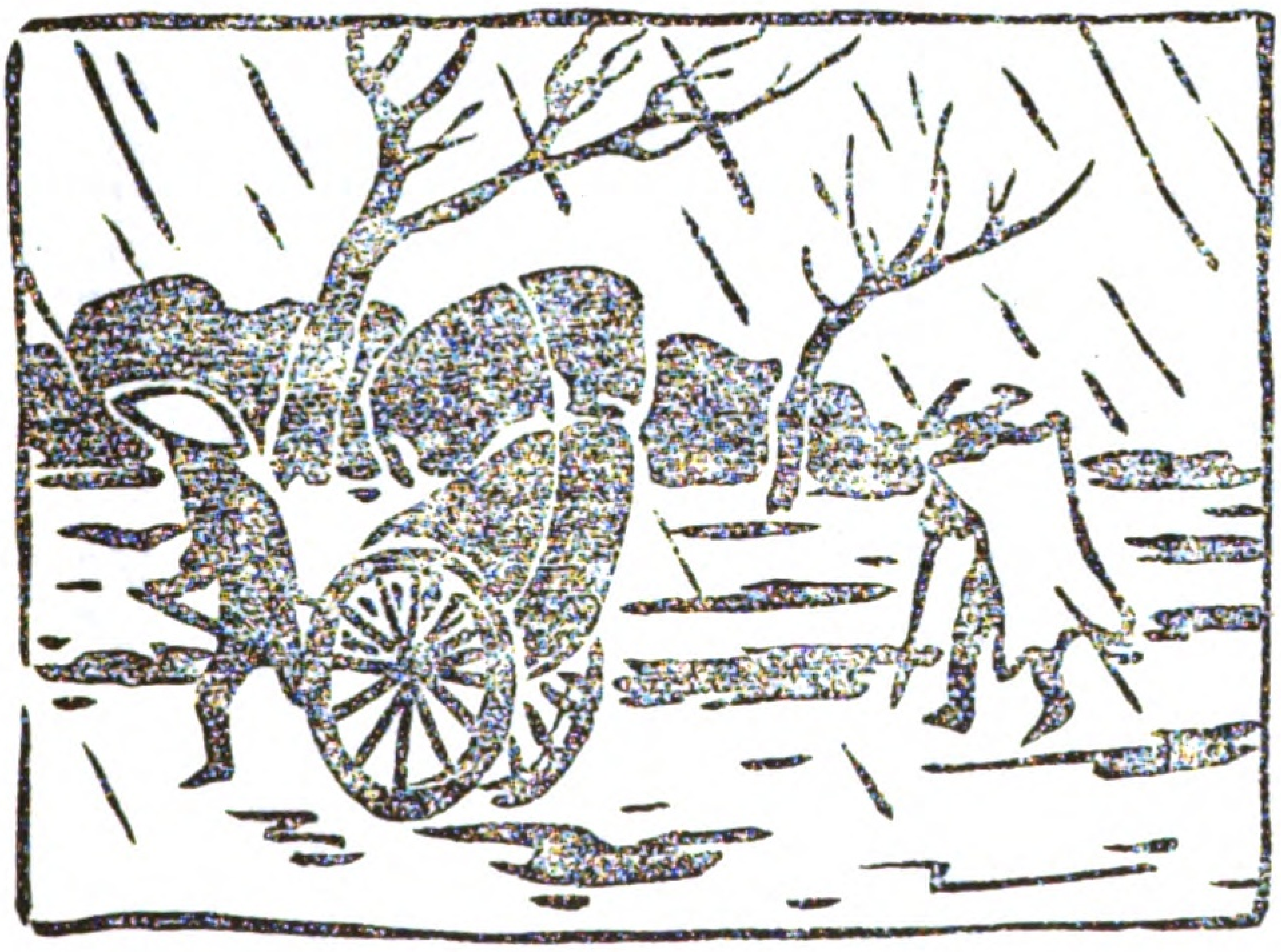
五等

○病床にて

四谷　河野槇子

現無の瞳にゆらぐさみどりや
ものみなは新しきめをみひらきぬ。
去年こそは——五月雨晴れし夕間暮
胸もやすくと、梅の葉に綴れる露を
そと唇にうけてもみしか。
一昨年煩悶なくして
永久に變らぬ幸あれと
仰ぎ見し金星のかげ
窓よりと、思へど翠ひろごりて……
世は初夏——
すが〳〵しかをりぞみちて
光りみなぎる碧き空

雨　加賀　波佐谷みどり



あゝ魂のみは憧憬るれども
肉の重みに痛みたゆみ
熱き露のみ、蒼き頬流れ枕ぬらすよ
ねがはくは——母にすがりて
さゆり花匂ひほのめく森蔭に
洗ひ髪衣とさすてゝ露の上
双手を胸の上にくみて
永久に靜けき夢に入らまし。

われは傷弓の鳥、弦聲を聽きてだに心いたむ、況んや妙齢、双手を胸に組みて露の上に死なんとうたふ君が心をおもふたや。

○復活

巣鴨町　飛川眞琴女

戀の額、龜裂打割れて、
吐き出てし息の魂凝り、
あえかなる室に滿ちては、
馥々の香にしぞ沈む、
夢の花——。
愛の伽具、炎は立ちて、
むらさきに湯沸ろ煙り、
夢見ぬる室に滿ちては、
青ざめし頬もこそ浮べ、
闇にして——。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢なる室に、せまやかに、
飾りし息の魂凝りや、

菫むら色の沸たぎり、
圏にもつれて、綾解くる。

＊　＊　＊　＊

わが室籠りの高韻、
かゝげてそよのうき風に、
醉へば舒むなる、夢の花、
復活の思ひこそすれ——。

怪しき造語を爲して、宛てたる漢字とふり假名とによりてわづかに他を瞞着せんとするものはあはれむべきかな。「香にしぞ沈む」のしの用法を過れる、「あえかの室」の愚かしき言葉となれる、「かぐつち」を略して、「かぐ」とのみ言ひ、「籠り」を「こり」といひ、「紫」を「むら」といへるなど、畢竟是れ文を亂る輕操の才子ならざるを得んや。

○追　想

佐渡　本間なみ子

あゝ扉は沈默の洞の悔の門、
冷えし我が胸の淀みに追想は、
うす霧と固く氷りぬ、出つ入りつ、
音もなく——彼方の闇に迷ふらし——。
きはみなき心の奥の長きみち、
もだしつゝ今其道のゆきかひに、
やつれたる面はみ翳ぶる風光り——。
新らしぐ『死の日』にかへる夢を得て——。
一瞬は幼き戀をはぐゝまれ、
かすかなる胸の温みを、血の搖れを、
しかすがに寄ある性と覗きて、

背きにし狂ひの笑みのいま更に。
はゆかりし思ひに痩せて灯のゆらぎ、
たまさかは、冷えし涙を憎み得ぬ、
我からの弱さ覚えてよろ〳〵と、
くゞりぬる——沈默の洞の悔の門。

甲摸し乙倣ひ、丙丁戊己相ひきゐてたゞ他の襞壁を拜して滿足す、第に及ぶを得ば幸甚なり。

○甕

本郷　田口秋子

年古りし煤の香けぶる暗ぬちに、
仄かに白き、そのかみの夢繰りかへし、
うと〳〵と、陶小甕ふしぬ『沈默』に——
つゆだにも、ふれなば破れむ、もろさかな。
みよそが表面は、光もなき、香もあらぬ
陶小甕、はじろの素燒そのまゝ——
寂のあと、回想のくゆり、悔恨の色、
無地の素燒に、みだらなる汚染の様々、
縱横に、悲愁のひゞこそいため。
そのかみの甘酒の鑑——いたづらに
香をこそ忍べ——永久に盈らむすべなき
戀の酒、胸の古甕われぞ抱ける
その三。

○誘　惑

濱松　岸つぎ子

誘惑の螺旋階
前に横にはては踊なう
力の極みぐい〳〵と引かるゝ
一方に身動もせば
幾千にもあゝ身は切れんず
さながらの石ひた默しつくばんど
蜜のごと惡濁のあまみ
强ひられて溶けむのうつけ心
ともすればよろぼひやすき。
かゝる時つと眞闇ぞ迫れ
醜の國おゝそは包む醜の影
想像てはとみに縮みつ
石のごとき餓にかへる。
さはれあゝ鋼のふとさよ
叫べどももがけども
刻々に强さぞまされ
氣力萎へかくて——
息盡きし日にこそ朽ちなめ。
その四。

○悔

金澤市　高村やすゑ

赤土に小草は枯れし山の洞
とも思ふ我胸よ。
暗憺と光りもさゝぬ灰黑き
追憶の屍のみ横はり、
愛もなき失意の巷を滅亡は
うろ〳〵と立ち迷ふ。
追憶の屍の下ゆむく〳〵と
「悔」はあな頭もたげぬ。

弱き腕を挙げつゝ「悔」はなずくと
罪業の闇き囹圄に
つながれぬそよわな〳〵と。
執念くて
「悔」はまた疲れも知らず。
その五。

○闇のひま

紀伊　岡村美雪

室咲の藥の薫の——さゝゆらぎ
薄闇に消えゆくが如——夢のひま
追想は老の冷めたき——空洞なる
わが胸に——うら若けき日をうけつ
紅艶き花咲きぬ——面影の
金蓮花？——そは戀の花。
哀しさに消えんとすなる胸の灯を
高くかゝげつ見まもれば
雄蘂めしべの狂ふさま——
花の眉ひらきつゝ胡蝶まつ——
心の想心の夢——春の野に。
溢したる愛の言の葉
目も絢爛にうかびぞきたる。
あゝされど——あはたゞし。夢すぎ逝く
追想のほだしたぐれば
ひた吸——ありし想ひに
何ものか頸さしのべ——胸の血を。
悠紀に追想さむれば
聞け。遍刻の血の通ひ——暗き音。
室の臭。衾の香。
樓遏のなげき——肉の香。

髑髏と起きたちて我に叫ばむ
男よ睨かす女に——と。
あゝ斯る胸の宮朽ちはてぬ間は
われ泣くよ。思ひ出に。
白蠟の灯はてらす——血の痴態。

その六。予は似而非象徴詩を數へてこゝに六篇をあぐるを得たり、六篇各同一の内容をつゝむに同一の衣を以てしたる摸倣のあとの顯然たるを見よ、つゝめるもの綿繍ならばしばらく措く、予は實にその肌あらはなる弱衣をあはれまずばあらず。反省せよ呪はしき邪道の人。

○煩悶えて

廣島　岡信操子

煩悶えて窓に倚る、
我胸の炎は消えにけり、
戀の炎のもえがらに、
再び火をば付けよ君、
煩悶えてたそがれの、
しづ〳〵せまる色見ては、
亦我胸の戀の炎の、
もゆらん時のしのばるる。

○春の賦

水戸　島田小桃子

瑠璃にほがら〳〵
もゝ色の淡雲引いて
春あさき陽炎も
あたゝかき良晝時
際限しらぬ青草の
若綠彼方此方に
小羊の群見えて
靜かなる牧場かな
なれ〳〵し小羊の
優しさに鞭投げて
今日も又横たはる
草の床心地よや
微風に吹かれつゝ
我か結ぶさゝ夢は
紅花の香に醉うて
あこがるゝてふ〳〵よ
たち方にそばだてゝ
楡の木の囲き森
知更鳥の囀りに
夢見し春送る

○病

高松　句取信子

貧病いゆとも見えず
日々に身はほそり行く。
すぎし日に『またくる年の
今頃は必ずいえて
歡樂に狎ひ醉はむ』と、
ちかひせしのぞみの糸は
たゝれしか。

あな淋し。
飼病いゆとも見えず
日日に身は細り行く。
くろとしを叉願はむか。
あゝされどわが胸内に
死の暮は來りて今し
おもむろに闇行く途に
あらざるか。身は戰きぬ
しかすがに。
　胸の音に答て合すと、
　春雨はものみなを打つ、
　長き日を泣けよとばかり。

○火柱

山口　松岡きさ子

彼の弱りける駱駝をば、
綱とりて歩ます心地、
いと廣き夜の濱は、
さながらに砂漠ぞみする。
すゞしらの星生みて、
地に這ひよる闇の宽は、
「あれ紅き色奪ひたり、
眞靈にみつる花よ‖‖さて」
我が魂までも喰のかす。
やらじとばかり悶々の、
虚空を摑みて踠ぎゆく、
左手に古き二十五絃、
一と絃されて音こそあれ、
人か我れかに怖心地。
弱き音——そは我れを咒の聲にして
ひた戀ひし人の

(愛樂器)、また九段よりや射放てる
打の夜光蟲　…　強き
光に照されて、
眼に火柱くろめきて。
身を焦さむずもゆるなり

○物おもひ

岐阜　篠田とみ子

佐保姫が微笑の御聲そこゝに
錦や綾の袖匂ふ
櫻の花に蝶は醉へと
霞がくれに鳥は唄へと
樂眠催す頃ならなくに
うつとり惡な空もよひ
怪肖けぶるなて眉に
側羅の香薫ろ袂解けて
俯居にもゆる頰の色

○青春譜

伊勢　大原しづ子

八千花笑な傾けて、
百島妙に榮へ誦す
蝴蝶舞ふや艶かに
羽翼に春の風かろし
ヴイナスそも佐保姫か
春の女神と尊まる
君が御袖や紅に
オリン持つ御手玉の如

○心の焔

上總　山口與志子

心ぞうるふうるはしく
玉にも似たるあこがれの
君をし見ればすべもなく
ほのぐ\香れ胸の奥
わかき血のどよめきはらぐ\と
火はこそ燃ゆれ此刹那
流れぬ頰に火の涙

○貝

土佐　島内芳

春新汐のよせかへす
渚の貝の片われて
甘し血汐の香らありて
戀とき色にもゆるなり

○菜の花

安房　渡邊浪子

代理石して作る宮、
黃金の甍鱗々と、
誰が住む殿とことゝへば、
胡蝶の夢の遊ぶ所、
吾に夢かせこの宮に、
白露うべなひ堂に入る、
五色黃金や白金と、
かざりし室に来りしに、
琉璃の殺盤に飾ぶすま、
暫しまどろむそのゆめや、
眞善美なる詩の國に、
胡蝶と遊び王に謁ぬ、
てふは云ふ王妃に欲しと、
——あれ妾を?——

お伽噺

巌谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は每月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

三等　○ひらめ

相模國高座郡大和村下鶴間　鍋田美代子

昔或る國に姫樣と云ふ歳は二十八て、色の白い眼は鈴のような、立派な氣量のよい女王がありました。あまり氣量がよいので世界國々の王樣は、此姫樣を自分の奥方にしようと思ひ、王樣どうして仲が惡くなり戰が起つて、今日は敗けた、今日は勝つたと云ふ風に、世界は戰國の世となりました。

此姫樣は心配し過ぎて、とう／＼重い病にかゝりました。此の病氣には藥がきかないので、おそばづきの人達は世界中の動物に、回章を出して魚類獸類鳥類などを集め色々相談しました。姫樣の病氣のなほる方法はないか？、知つてゐる者は遠慮なく敎へてくれと、云ひましたが誰れも敎へません。中に章魚が奥の障子をあけて姫樣の枕元にゆき、私がなほる方法を知つてをります、それは猿の生命をとつて飲むのです。さうすると必ずなほりますと、敎へて歸へりました。或る一人が動物の居る席へいつて、どうも御苦勞でした。歸つても宜しいと云ふと、皆うれしさうに歸つてしまひました。あくる日猿の好きな牡丹餅や、鮓や、團子や、赤飯などを船へ一ぱい拵へ、猿の住む海岸山へこいでゆきました。猿は意地のきたない獸ですから、一目見るや、ほーい／＼と木の上て呼んてをります。

或る一人が、猿さん用があるからきてくれと云ふと、猿は木の上からきやつ／＼となき乍らおりてきました。それは先頃の姫樣が體が非常に惡いのですから、お前一週間ばかり姫樣の枕元で、此御馳走を食べて遊んでくれないかと、聞くと猿はうれしがつて船に乘り、姫樣の所へ參りました。そして每日御馳走を食べて遊んでゐる内に、一週間を漸く過した。六日目の朝になると、ひらめがきて姫樣のゐる奥の障子をあけ、猿さんに少し用事があるから、顏をかしてくれと云ひました。猿は何事かと思つて外へ出ると、ひらめが、猿さんお前明日になると恰度一週間になるから、姫樣に生

命を捕られてしまひますよ、何かうまい事を云ふてお逃げなさい。と云ふて歸つてしまひました。猿はびつくりして姫樣に向ひ、私此間木の上に麥を干して置きました。今、雨が降りそうですから入れてすぐ參ります。と云ふて姫樣の家を出てゆきました。

あまり久しく歸つてこないので、又船に御馳走を澤山拵らへて、迎へにゆきますと、今度は呼んでも頭を横に振つてきません。猿さん誰かお前に何か教へたのですか？、ときくと、ひらめが教へたのだと猿は云ふ。空しく家へ歸つて、又世界の動物を集め、ひらめを下に置き鳥類獸類魚類などを



上に乘らせ、いたい〱と大聲を出してひらめを壓しました。

初めひらめは體の圓い魚でしたが、此時にひどく壓せられて、あのようにひらたい魚となりました。

姫樣は病が重くなつてとうとう亡人の數に入られました。そして此世界は平和の國となりました。めでたしめでたし。

（評）日本昔噺の猿と海月より脱化したものでせうか、平目の起因と結末の所が一入面白い樣に思ひます。

秀逸

○衣服のなる國

京都 綿引 眞砂

或る處に遊子さんと云ふ娘が在りました最早十五に成

るのに何云ふものか裁縫が嫌ひて學校でも裁縫の時間は何日もお腹が痛いの頭痛がするのと休で計り居るので一寸も上手になりませんお母樣も心配して女は一番裁縫が肝心だのに今のうちに勉強して置ないと成長くなつてお嫁にいつても難義をしなければならないと種種仰有るが少しも習ふ氣が有りません其くせお友達が立派な裝をして居ると羨んで兩親にせびるのです或日遊子さんはお母樣から云付かつた衣服を自分の部屋で縫ひ始めましたが元來嫌て勉強しないから思ふ樣に出來ない幾度も縫ひ直して居ましたが遂々腹を立て衣服を投出して仕舞さうして「あゝ否だ這麽衣服なんか仕立ないでも木になつて居る樣な國へ往きたいわと獨言を云つて居ると何處かで「お孃さん〳〵」と云ふ聲がするから誰か呼ぶのかしらと聲のする方を見ると奇妙な顏の小人がひよこ〳〵御辭義をして居ます「お前は何處から來たのと聞くと「私は衣服のなる國から來ました」と云ふので遊子さんは吃驚して「まア其麽國が有つて「エヽ有ります共私の國では衣服は勿論帶でも何でも縫物は木に出來て居るのを取つて着るのてす」と云ひます遊子さんは今獨言に云つて居た位ですから此話を聞いて急に往きたくなりました其處で小人に向つて「私其國へ往きたいけれど如何したら往かれるか敎へて頂戴な」「敎るは易い事てすが私の言通に被成ますか」「エヽ往かれる事なら何んでもしてよ」「其れては此指輪を上げますから」と銀の指輪を出て「是を右の親輪にはめて『衣服なる木の有る國へ往きて見ん』と三度稱へるのてす其れから此事を人に話たり稱るのも人の居る處でするとと往かれなく成りますから其れてはお暇致します」と何處へか見へなくなりました遊子さんは氣が付と自分の前に判然と銀の指輪が有りましたから早速驗して見やうとしましたが誰にも云つては否ないのだとお父樣お母樣にも默つて往かなければならないが若し跡て心配なさると否けないからよさうかしらだけれど矢張往つて見たいわ搆ない一寸往つて直き歸つて來れば能わと獨極して指輪を右の親指にはめ小人に聞いた通「衣服なる木の有る國へ往きて見ん」と三度云ふと氣が茫として霧の樣な物に包まれ身體が輕くなつて恰風に吹かれて往く樣にずん〳〵進んで行くうち二三十分も經たと思ふ頃足が地につきましたすると四邊の霧が晴れて先刻の小人が來て「お孃さん能く入らつしやいましたサアお約束通御案内致しますと先に立つ後からついて半町程行くと衣服のなる國と書た榜

杭が立つて此所から道は二つに分れて右絹道左木綿道として有ります小人が何方の道が能いかと尋ねるから遊子さんは「絹の方がよくつてよ」と云ふと其れでは右の道へ這入り少し行くと「彼れが衣服の木ですと」小人が指ざすのを見るとまアお召縮緬だの友染縮緬だの糸織大島皆な絹物計り大人のは成長た葉小供のは新芽と云つた樣に恰芭蕉の葉の樣です亦先へ行くと羽織の木があり是れには色無地の紋付や小紋や生つて居るし帶の木は朱珍繻子で五色の吹流を見るよう其れに川も水は白縮緬や水色縮緬ですし柿の實と思つたのが錦や朱子の巾着で有つたり何方を見ても衣服や帶て埋つて居るので遊子さんはもう／＼欲くつて夢中で歩いて居ましたすると小人は「貴女は此衣服や帶が欲いでしやう」「エヽ欲いわ」「其れては何てす此國の王樣になりませんかさうすると是丈の物が皆んな貴女の所有になります實は此國の王樣は先達お逝になつて私一人限て淋しいのてすから是非王樣に成つて下さいと熱心にすすめます「まア其れてはお前一人限外に誰も居ないの」「左樣てす」遊子さんは考へて見ると什麽に能い着物を持つて居ても誰も見て呉れる人が居なくつてはつまらないと思ひましたから「成つても宜いけれどお父樣やお母樣が一緒てなければ否やです」と云ふと小人は笑出して貴女は歸られると思て其麽事を仰有るが此處へお出の時落度が有つたから歸る事は出來ないのですよ」と云はれて遊子さんは急にお家が戀しくつて堪らなくなりましたけれど自分ては落度はない筈だから歸れない事は無いと思つて其通り云ひますと小人は「貴女は忘れて居る屹度有りませんね」「エヽ無い事よ」と云ひ切りますと「其んならお勝手に成い然し後悔しないと歸れませんよ左樣なら」と居なくなつて仕舞ひました遊子さんは氣強く云ひ切たもの丶獨になると心細くなつたが何卒して歸らうと元の道へ引返しましたけれど今迄夢中で歩いて來たのでサア道が解りません其處でつく／＼考へると自分は何共思つて居なかつたが來る時にお父樣やお母樣にお斷りして來なかつた其落度で此樣に難義をするのだあゝお父樣お母樣私が惡う御座ましたお許し下さいと後悔して泣伏ましたすると何處ともなく「衣服なる木の無き國へ歸らなん」と三度歌ふ聲がするので遊子さんはオヽ今の歌は私がくる時稱へたのと反對ださうだ指輪もはめかへ稱事も反對にしたなら屹度歸られるに相違ないと考へ付きましたから一生懸命に左の親指に指輪をはめかへ「衣服なる

木のなき國へ歸らなん」と三度稱ると俄に大風出て大きな岩で身體がこな〳〵になつたアッと云ふ自分の聲に氣が付いて四邊を見ると矢張部屋の中に居たのでしたけれど不思議な事には左の親指に銀の指輪が判然とはめて在りました此事は誰れにも話しませんでしたが其れから後遊子さんは人の裝を羨まず濫縱も嫌がらないて一心に勉强したものですから成長なつてから立派な家のお嫁さんになりました、めでたし〳〵。

（評）これも一種の教訓的寓意談で別に新らしい所も見えませんが流暢にして難のない作です。

○泡坊主

島田壽美子

或時或所に惡戯盛りの剛太郎と云ふ小供が居ました、或時お友達の三吉だの、夏一だの、仙吉、友二郎だの云ふ人々と一同に海邊に遊びに行きました。

頃しも夏の初めで、お日さまは、この地球を燒き捨てて了うかのやうに、灼々と照して居られました、沖の浪間に馳せて行く帆前船の帆が如何にも睡むさうに垂んて居ました、今しも此四人の小供等は素裸になつて、淺い靜かなあたりに這入りまして、互にボチャ〳〵やつてゐましたが、剛太郎が手拭てもつて泡坊主の作つことを始めました、併し外の小供の分は剛太郎のに及ばなかつたから、殘念で堪りませんて、それでは、水泳ツくらをしてみやうと云ひ出しました、が剛太郎はまだ水泳術を知らなかつたので敗亡にきまり大癇癪がりました、すると今度は、「僕はこの泡坊主に乘つて、あの空の日輪さまの御殿に行くことが出來るのだ」と大變意地を張つて、大きな大きな泡坊主を作り、ひらりと其に乘ると共に、身は次第々々に空中に登つて行くのです、さあ愉快で堪らず、彼方此方をキョロリキョロリと見渡しますと、お友達の顔も次第に見えなくなり、遠い島山も、岸邊の巖も森も消えてしまひ、さては砂を洗ふ浪の音も聞えず、たゞ雲と鳥とがみへる許りです、ただもう美しい眞赤な日輪さまの御殿から、サーチライトが自分の泡坊主に突つかると、泡坊主が五色の色彩で飾られる、誠にその奇麗さに呆れて居ました

遙に遙に剛太郎は日輪さまの御殿間近に來たので非常に悅び「外のお友達は今に海邊で、水泳のお稽古ばかりしてゐるだらう、意久地のない奴等ぢや、己は日輪さまの家來となつて、多くの寳や黄金を持つて僕の宅へ歸れるのさ」と獨りで囁いて、猶もます〳〵雲の中

を登つて行きました。すると程なく神の宮に着きました、其日輪さまの御殿と云ふは、先づ大きな長い雲の梯子と云ふのがあつて、奇麗な雷の鼓もあれば、深くして廣い雨の池もあれば、夜の幕と云ふ恐ろしい大きな幕もある、澤山の星の宮が、火の御殿と云ふ日輪さまの玉殿を圍んで、遙に月宮殿と向き合つてゐる。

軈て取次のものに牽かれて、玉座のあたりに進むと錦の幕が靜に卷かれ多くの女官や異樣の服裝をした官人を引連れて、日輪さまが莞爾と顯れ給ふ、「汝は下界の剛太郎と云ふ大膽な少年か、よくも訪ねて來た」と大層可愛がられて、澤山な金銀財寶や、特に寶石を鏤めた眼醒むるばかりの神劒を賜りました。

剛太郎は勿論大喜悦びて、四方山の下界の噺もそこそこて、お日さまに暇乞ひしていざ出立と、例の泡坊主に乘ッかると、それと言ふ間もなく、太陽の熱度で泡坊主は天地も碎けんばかりの爆音がして破裂しました、剛太郎は丁度秋の木の葉が散るやうに天上から落ちました、恐い時には致し方のないもので、浪の荒い太平洋の眞中へザンブと計り落ちました、高慢で水泳を知らぬ剛太郎は、若しも其儘であつたなら、水に溺れて死んだであらうが、折良く汽船が通り掛つて、無事に家に送られたさうです、それから剛太郎は水泳が上手になり海軍兵を志願するさうて、世の中の事は心のまゝにはならぬと悟りました、目出たし〳〵。

おしごと　小きく





美人草のこと

美人草は一名を虞美人草とも云ひ、ひなげしとも云ふ、種子は秋に蒔き、夏になつて花咲く、多くは緋の色である、紅白の斑あるもの、白きもの、紫のもの、薄紅のもの、さまざまあり、八重と一重とあつて、一重の方が可憐の趣がある、莖の高さは一二尺より長くはならない、蕾の時は伏して居る、罌粟の一種であるから八重の花は罌粟に似て居る、昔支那の美姫、虞氏の墓に咲いたから虞美人草の名ありと云ふ、日本の名稱はひなげしである。

眉山と獨歩

◎川上眉山と國木田獨歩とが、月を同うして他界したのは文壇近事の痛恨である。境遇を異にし、性格を異にして居るが、只二者とも小說作家と云ふ點に於て同じことである。

◎川上眉山の死は不意であつた、國木田獨歩の死は豫め期して居たことである、然かも其が月を同うして起らうとは思ひ設けなかつた。

◎眉山の死が自殺であつた爲に一層世の同情を惹起したかと思ふ、兎に角文壇一方の雄將であつて、是と云ふ蹉躓もなく、世間に對して申譯のないやうなこともなく、若い人の失戀とか、厭世とか云ふやうな意味もなく、自意識ある立派な最後は充分同情するに足るのである。

◎眉山の死を以て生活難に歸するものもあるやうだが眉山位の生活をして居て自殺するなら、今の文士中には自殺の資格あるものは澤山に在らう。

◎生活の困難は單り文士のみでない、世を擧げて生活の困難を感じて居る、生活の困難と云ふことも死を早める一つの動機であつたかも知れないが、之が最大原因だとは受取れない。

◎作家として眉山の地位を案ずるに才氣は風葉に如ばず、幽玄は鏡花に及ばず、秋聲の寂なく、春葉の趣なし、然れど眉山は最も師紅葉の衣鉢を繼ぐに足るだけの才藻はあつた、細心鏤刻の文を行るもの、現代稀に見る處であつた。

◎文に能なる眉山は、想に於ても常に一新機軸を樹てやうとして居たらしい、けれども眉山の作に世を驚かすやうな反響はなかつた、溫雅なる氏の性格では、一番あてゝ見やうと云ふやうな野心が起らなかつた。

◎明治の文壇に硯友社諸秀才の働きは最も目ざましいものであるだけ、一家を爲すべく餘りに緩漫であつた眉山は、衷心自ら焦慮する處があつたと思ふ。

◎獨歩は眉山の死を評して曰く「これには種々の原因あらん、然れど根本の原因は新思潮の壓迫と、先望的良心が鋭敏になりし爲ならん、氏は己が通り來りし軌道が誤りなりしを悟り、自己の存在を拭去りしなり、文士として敬すべき態度なり」と。

◎流石は獨歩、眉山の死に對して敬意を拂ふ、而も之を評した人すら今は世に居ない、何ぞ人事の忠忙なるや。

○文士の死に對しては須く滿腔の敬意を拂ふべきものなる事を信ず。

○眉山の事を終るに當り、懇なる葉書の文面を紹介しやう、左の文面は氏が一七日の後、知己友人に頒たれたるものである、因に云ふ、男晴彦君は當年五才、國夫君は三才である。

父眉山川上亮死去の際は種々御世話下さいまして有難く厚く御禮申上げます、本日私共は左記の母の實家へ引移りましたから、今後とも何分御厚情を願ひます、先はお知らせまで

明治四十一年六月廿二日　東京市淺草區――

川上晴彦

仝　國夫

猶國夫は追て叔父の來馬琢道方へ參ることになつてをりますから併せてお知らせ申ます

○獨歩の作は酷愛する人と、それほど味ひの分らない人とあらう、獨歩は何れ程豪いのか分らない人があるだらう。

○獨歩を豪くした一つの原因は譬へ何んな短い作でも投げやりに書かなかつたこと、何か人生の或る意義を人生の現象から捉えて來て、理窟なしに書いたこと、換言すれば鋭き觀察力の下に、全力を傾注してそれを表出しやうと努めた、加之獨創の見地があり、熱烈なる情調があり、而してパンの爲に筆を執らず、自ら興動いて作つたのだから作に屑が無い。

○文士として獨歩の名を知らるゝに至つたのは近年の事て、獨歩集出づる前には何人も氏の作を讃嘆しなかつた、文士早くより名を歌はるゝは却つて不幸かも知れない。

○個人としての獨歩は氣持の好い男であつた、氏の經歴中には隨分變化がある、政治家にならうか、事業家にならうか、それとも文士にならうかと迷ふた形がある、けれども氏は文藝作家として不朽に傳はるやうになつた、藝術の生命は尊むべきものである。

○世人往々文士の末路を悲慘なりと云ふ、然りながら眉山の逝くや擧つて愛惜した、獨歩の死にも文界を傾けて痛哭した、人間の末路に悲慘ならぬものゝ無いのを思へば、文士の末路の如きは寧ろ花やかである、冥すべきである。

○梅雨蕭々として陰雲低き今日此頃、文氣徒らに振はずして、傷心の事のみ却つて多い、作家として立つ者皆多少の感を抱く。

新體詩の話



新體詩とは何

新體詩とは何てすか、新體詩とはうたてす。

新體詩と云ふとむつかしく聞えますが、うたと云ふと優しく聞えます、うたと新體詩とは別物てはありません、同じものと言ても差支えがないのてす、今まて歌と云へば三十一文字の和歌に限られてありましたが、三十一文字と定めて了うと、歌うことか狹くなりまして、何ても歌うと云ふには字數の多いものて、又字數の定まつてないもの丶方が自由てすから、新體詩が起つたのてす、昔の人が三十一文字て歌うとしたのも、今の人が新體詩て歌うとするのも、歌うと云ふ心持に變りはありませんから、新體詩をうたとも云ふのてす、皆さんもうたてあると思へば新體詩は作り難いものてはないてせう。

新しい歌

三十一文字の歌は神代の昔からあつたと云ひますけれど、新體詩は明治になつて起つたのてすから、歌としても畢竟新しい歌てす。明治に生れた人が歌うなら新體詩て歌うのが眞個てす、文字の數に制限はなし、言葉の使ひやうにもむつかしい掟はなし、歌て此位自由の歌はないのてす。

誰ても作れる

うたは誰ても作れます、作れないのは作る心掛がないからてす、少し心掛のあるものなら、雲の色を見てあゝ美しいとか、胡蝶の死んて居るのを見てあゝ憐れてあるとか、人の言葉に感動したり、苦痛に遭ふて泣いたりする時に、うたは出來るのてす人間は生れながらに歌ふ性質を持つてゐます、子供を御覽なさい、何か面白い事があると、言葉に節をつけて歌うて居るてはありませんか、彼れがうたてす、彼れが進むと新體詩てす。

むつかしい詩

それほど誰にても出來るものなら、新體詩と云ふものが誰にても分らなければならぬ、處が實際は然うてなく、世間多くの新體詩は誰にても分らぬむつかしいものてはないかと疑問もあるてせう、之は至當てす、之にはいろ／＼說明する事もありますが、新體詩は明治の文學中ても存外進歩して居て、作る人が少く、其少い人が世間とは關係なくずん／＼進

んだものですから、思想が勝つて、普通の言語や文章とは離れ過ぎたのです、分るやうにして讀んで見れば新體詩の好いものほど、深い味ひがあるのです、けれども今言ふ通りむつかしくなりすぎましたから、之を直ぐ皆さんの手本にせよと言つた處でお困りでせう、何れ追々分るやうになりませうし、又分る詩も多くなるでせうし、今までの新體詩の中でも能く分る作もあつたでせうし、要するにむつかしい作は、むつかしい作として置いて、分り易いものから新體詩を學び始めると、直ぐ作れるやうになります。

惡い眞似

文でも詩でも作り初めは好い作を眞似するのですが、此眞似に好い眞似と惡い眞似とがありまして、惡い眞似をする人の方が多いやうです、新體詩は氣取るものと心得て、わざとむつかしい字を選んで、自分にすら其意味が分らないやうな句を並べたり、唯眞似ばかりで一篇の詩を作りあげるやうなことは、甚だ忌むべきです。未だしも詩に使ふ言葉だけを眞似して、歌ふ事柄、又は感想は自分で考へ出すと云ふのが宜しい。言葉も、句も、内容も皆人の眞似で、唯つぎはぎだけ自分でしたと云ふやうな作は、自作と言つて人の前には出されますまい。

獨創の才

地は堀つて見よ、才は絞つて見よ、堀れば泉は湧きます、絞れば露は滴ります、他を探すに及びません、今立つて居る處の足下さへ堀れば泉は湧きます、自分の才さへ絞れば、他の眞似はしないでも好い考も感じも起ります、自分を深くすると、淺くするとで、えらくなり、えらくならないの差別がつくのです、深くするにも一つの方法はありません、所謂修養です。

幼き詩

私は女子文壇に限らず、何處の詩壇にも幼い詩のないことを悲みます、幼い詩は、幼い詩で人を感動させる力はあるものです、何も作が大人だから皆えらいと限つたわけではなく、十二三の女の子でも、十四五の少女でも、正直に、眞面目に、飾らず、大人ぶらず作つたならば、屹度人を動かすやうな作が出來るでせう勿論其人は幼くても、多少他と異つた才分を持て居なければなりません廣い世間に二人や三人はあるでせうと思ひますが、嘗て然う云ふ詩に動かされたことの無いのは、思ふに未だ新體詩と云ふものが大人計りのもので、少女時代には作れないとして了つて居るからではないでせうか。

新派和歌

與謝野晶子先生選



▲規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

○　大坂　百田ふみ子
鞭とりてか弱き手うたんにはふさひ給はぬ兄にやはあらぬ

○　伊豫　曉子
日うけなばやがてひぬべき朝の野の露にも似たる榮よ命よ

○　紀伊　壽美女
村時雨そぼ降るなかを樂しげに語りつゝ來る賤の妹脊よ

○　大坂　荒木咲子
けがれたる人の此身のたゞしばし君がおん目にちかづきし罪

○　遠江　林　衛子
櫻花影に巢つくろ蜘蛛の子が花見て今日も夕となりぬ

○　四多摩　森田なか子
岸をかむ水の音ゆるう松風のしらべに答へうたゝたふべし

○　岐阜縣　とし子
春の波なすにまかせて船ながし行きなば夢の國あろらんか

○　長崎市　一瀬みどり
いつしかと雲のかゞやき消えゆきて寒き風吹く秋の日の磯

○　佐賀縣　津田ひで子
三四人春の花野にすみれ摘む里の少女をよしと思ひぬ

○　上毛　飯塚登亜子
眼閉づれば百の蛇きてわが髮に纒る如きゆふべのおもひ

○　長野縣　山下とう子
藤咲くや龍住む池に紫のやゝくろずみて水にうつりぬ

○　甲斐　勝村もりよ
春ふかき鎌倉山の舞殿に袂をふかし人なこそおもへ

○　佐賀縣　橋口御幸子
今日も亦雨降り織く暮れ方に花をあはれみ龍王のろふ

○　備前　堤　志加代
病める日はあくこと知らずみ名とらへ胸に小ひさきものがたりきく

○　名古屋　鵜飼菫子
亡き君に似たる少女子懷しや今朝もあひけり花ちるみちに

○　紀伊　室井美那子
雷止みぬ風又止みぬ雨止みぬ海原千里明けて波なき

○　小樽　淸水菫朵
見まゐらす君が寫し給美しう我を見つめて幾年かへぬ

○　岡山市　池田芳子
眼とづればゆめむ夢には君ゑみてわれにぞよりくわがかげのやう

○　秋田市　奥田碧子
磯の宿朝日はさしぬ高どのの京のみ客のまださめまさぬ

○　柳河　梧桐知登子
青葉若葉淸らに匂ふ中にして君の御手に倚るをおもひぬ

○　長野市　一瀬白菊子
仄しろきなげきの影はわが胸を暗くとざしぬゆく春にして

○　德島縣　上野浦花子
海の道さらばの手とる戀の子の片頰にひらく夕映の花

○　秋田縣　押切芳子
春の野や君が御手に我が手觸れあらむここちすつぼすみれ草

○　後志　池野すゑ
三月や軒の氷柱に北國は落日するなり五光のやうに

○　若狹　早水その子
鍬洗ふ人は歸りて里川に野ばら花うく夕となりぬ

○　千葉縣　桑子
物思ふ人や打つらん小夜衣音ぞ亂るる風なき夜半に

○　伊勢　山路くに子

野の川の水はぬるみてひろ〳〵と菜の花さきぬ伊勢の大國
○　上越　北田秀子

夕ぐれに露おく花の月見草かざしてきませわれは戸にまつ
○　岐阜　句取信子

櫻花ちりゆくころの春七日後世をいのりぬ山の御寺に
○　豐多摩　澁谷嶋子

籠に居てさくらの花を見もくらす小鳥の思春を我れ病む
○　伊豫　福井白百合

やがて散る花に眠れる蝶よ汝が明日をおもひぬかなしきわれは
○　土佐　弘光芳樹

吾が家の兒童静かに鶏の白尾なびかし八重櫻咲く
○　奈良縣　中宮よしみ

たまゆらにまさなき想ふと出てゝやがてあふれぬわお小さき胸
○　若狭　武田濱子

覺めて後繰り返しわが嬉しさよ夢にききける君がおん歌
○　伊勢　佐々木らく子

たどりつゝ君がみ言葉とき得てはひとりほゝゑむおぼろ夜の窓
○　岩手縣　富士根小枝子

鐘樓ちかく紅梅さきぬ山の寺住むは詩僧か紫衣のみ尼か
○　大和　我澤素枝

戀ひやつれ思ひに沈む吾が身をばせめて哀れと云へかし人よ
○　大阪　鈴木房子

二十とせや今息たゆるたまゆらに樂しき日をばおもひててあり
○　長崎市　平田すみれ

少女子が黒髪みだしていろ〳〵の袖なびかする春風ぞふく
○　日向　乙女

草取　牛込　佐野良子



あさましとおもへどかひな胸の火はほのふとなりて身もやきつべく
○　陸前　沼倉孝

雲もなく晴しみ空ののどけさに憂を忘るゝ身あらばとしも
○　伊勢　岩崎ふく子

わが心弱きが故にあひも見ずもだえもだえて三年すぎぬる
○　安房　東鷹翠江子

歌の優しきふしに合はせまし姉と朝ひくつま琴の音
○　常陸　小泉はま子

空ろなる胸には紅き紫の花は咲かずに白き鳥とぶ
○　大阪　新家順子

琴弾きて君まちにける七年のそのかみに似るおぼろ月哉
○　新潟縣　小林久子

星まばらに月なき宵に君まちぬ音してくづる白牡丹の花
○　下總　すみ子

波わけて君行きし島ほの青くかすみて夕なつかしきかな
○　京都市　山口愛華

祇園會や青龍白虎なつかしき稚兒練り行きぬ都大路を
○　伊賀　山村すみれ子

美くしき國へ着くらむ心地して花野の路を君と歩むも
○　尾張　鈴木詠子

我戀ふる人の吹くらし笛の音の震みて聞ゆ春の夕に
○　筑前　田中とよ子

紫は姉の面影白なるは御母とおもふつぼすみれかな
○　京都　藤士星雫

ふとわれは寂しみおぼへ窓にして興なく街のたそがれを見る
○　松横　鍋田靜子

たそがれの鐘はひゞきぬあらいそにあまた飛びゆく名の知らぬ鳥　千葉縣　古谷みつ子

○

歌に倦みてまどの扉をせば藤さきて山の端ゆかし九日の月　丹後　神田春子

○

亡き母に逢ふ心地してなつかしう春風かをる野に一人り立つ　京都　大草すさぶ

○

靜かにも春に眠とづる御菩薩のおん瓔珞に花散りかゝる　大津　夏山ゆり子

○

ゆく春やたわゝにしづれ窓にさく藤のみながめ物言はぬ君　信濃　ゆふぐも

○

旅の宿髮うつくしき京人と狀語りしぬ小雨ふる日を　豐後　加納豐子

○

春の神銀の御輿にのりまして白き朧月の雲にかくれぬ　鳥取市　上山千重子

○

我が心君の心とたはぶれになだまきまきぬ紅の糸　青森　松尾とし子

○

夏の月大川づつみ君が家に二町あゆみぬ涼しき風に　長野縣　剛角ゆき子

○

そよ風は歌ふ小鳥の羽をふきそと動かしぬ小草の花を　下總　木村仙子

○

うら若き畫師とひもきぬ春雨にさびしき家の海棠の花　筑前　絲田八千代

○

よきおもわよき黑髮よ衣召せるよきみ姿よ姉に似ませる　岩代　遠宮いち子

○

咲き匂ふ花の木陰に打むれて歌ひつ舞ひつ春の日あそぶ　上毛　飯島喜代子

○

やみながら君つくろひし春袷われはなさめやつづれとなるも　大分縣　御手洗操子

○

傘を忘れていにし主や誰雨に逢ふらん袖のむらさき　越後　志賀美代子

○

わが戀ふる人は何處ぞ鐘鳴りぬ空は時雨て淋しき夕　長野縣　安坂靖子

○

ゆあみして泉をいでゝ白百合の花つみ給ふ女神とも見し　弘前市　佐野てる子

○

藤の花近くゆらぎぬ朝の戸に君くとめざめおどろきて見る　和歌山　神保須磨子

○

戀しさにそとふりかへる君が門一重のさくら花ちるが見ゆ　德島縣　坂野文子

○

白百合は尊き姿ただ一つ闇に立つなり聖母のさまに　德島縣　吉田紫花

○

あやめぐさみ墓に手向けひた泣きぬこの花に似る君おもふゆゑ　千葉縣　並木きく子

○

野のうばら君來る道の夕ぐれによき香をたきぬいみじきかなや　土佐　高橋白ばら

○

化粧だにものうき朝の小かがみや春をやせゆく黑髮のかげ　常陸　今泉磯千鳥

○

御使の恐ろしき聲のわれ征むと夢見ぬあらぬ人こふゆゑに　京都　絹引眞砂

○

少女子が清き瞳のまたゝきに似し夜の星の國をおもひぬ　宮城縣　河原榮子

○

銀杏葉の扇のごとく散る夜は葉守の神の發すと思ふ　大阪市　梅本龍子

○

二月の紫の野をさまよひてかたみに思ふ心を云ひぬ　神戸市　秋葉婦美子

○

我れと生ひ小さき花さく我が胸の小草をいつかつみ給ひけむ　上總　鈴木梅子

○

春霞うすうこめたるすみれ野につゝまれて行くわれにやはあらぬ　羽前　杉葉女

○

美くしき春の小川に髮洗ふ少女に似たる柳をめでぬ　伊勢　かすみ

○

美くしき友をかたらふ袖の上に櫻こぼるゝ麗なる夕　茨城縣　中村香花女

あやめ咲く里の五月雨晴れ初めて君きますべき夕となりぬ
○　紀伊　田中早苗
はらからと小舟浮べて夕川の花ちる水にうたひけるかな
○　横濱　清水千秋子
五月雨のふりしきるなる黄昏の窓には獨君をまつなり
○　南葛飾　松操子
憂きにつけ樂しきにつけ我が父のいまさばとしも涙ながるゝ
○　安房　吉田やす
昨日みし美き子をなつかしみ今日も野に來てさまよふわれは
○　東京　枚谷女
くれないと白と珊瑚の枝しげるかたちに獨活のたけのびにけり
○　大和　小橋きく子
繪扇の小さきかざして舞ふ姫の樣に咲くなり白百合の花
○　仙臺　早瀬このめ
さうび香を衣につつみ君とわれまひしその夜のなつかしき夢
○　松山市　草村豊子
いつとしもわかれば人は死を忘れたゞにたのみぬはなれぬことを
○　神田　小倉雅子
君を捨てぬこの時胸のいづくにかいと口惜しと泣聲を聞く
○　下谷　藤田ゆう
夏姫はものに動ぜぬ御さがやつゝじの白衣風にもゆれず
○　熊本縣　宮川鈴子
あげは蝶袖をたゝみて眠りけり陽炎もゆる街道の小石に
○　青山　加藤花子
胸の扉はくもりてあればうき人の影もうつらず藤ばなちる日
○　羽後　大野こう
目とづれば冷めたき冥府の水底に踊ると見ゆ死にたる君と
○　岩代　桑美子女
手枕に罪ある戀を夢に見しわがくろ髪はかぶろに切らむ
○　豊後　菅原芳子
少女等は皆うすものゝ衣きて君をむかへぬなでしこの花

○　熊本縣　上原せつ子
龍田姫の羽衣の襞のそれのごと織なす野邊の七草の花
○　下總　三森ゆき
紫の山を廻りて春の水君住む里に流れゆく國
○　大分縣　工藤たまき
薔薇色の霧ふる中をぬけて來し君は光かれり頰に頰をよせむ
○　伊勢　片岡せき
姉君のみ髮にゆらぐ沈香のけむり淋しき夕ぐれの家
○　岡山縣　播磨吟子
打ち寄する波も靜かに空晴れて富士こそ見ゆれ腰越の濱
○　日本橋　岡本梅子
磯づたひ戀しき人と肩ならべゆびさして見る紅の星
○　下野　下河邊なみ子
胡蝶舞ひ菫咲く野をさまよひぬ長閑き春に戀の少女は
○　大坂　芦花
雨ふる日机によりて物思ひみ文の上に涙こぼしぬ
○　越後　伊藤幸女
天人の羽衣かりてはても無き世界にゆかむ君と別れん
○　常陸　松澤よし子
綾錦しきにけるかな散る櫻さくやの姫も居ます社に
○　若狹　津田汐汀
美くしき童等來り我が胸に矢を射るごとし君みし日より
○　印旛郡　山本きかど女
いささかのいかりにたへていにしへの書のかずかず炎になげぬ
○　尾張　鈴木詠子
たゞひとり堪へぬ思ひに泣く夕ほのかにかをるたちばなの花
○　伊豆　尾崎そひや
おん寺の鐘は春野にゆるゆるとひゞきぬ蝶のうつくしき時
○　播磨　おみな子
朝の霧ほのぼのあがる山麓に少女ならびて牛飼へる見ゆ

あがなひ

山田くに子

一日の勞働を握るかゞやけき
銀貨のひゞきかちや〳〵と
嬉しき音に若者の
血汐はをどる夕の街
何と代んか一日の
勞働の報酬、そは慕ふ
生命のかをりすが〳〵し

やがてぞ肉はひず〳〵と
はらばふ如く若者は
古酒店のしきだいに
呻吟き倒れつ「あな酒を
苦をし忘るゝ濃き酒を」と
叫びつ、醉にまぎれ入る
刹那の前の恐れみに
顫へぬ――あはれ若き子は
たゞよび廻る恐ろしき
強き力に魅られつ

悶をすゝる酒の泡
消えつ浮びつうたかたの
頓て溶け入る酒の精に
酒の命はなみ〳〵と
あふるゝを見る若者は
正氣も失せてする〳〵と
倒れかゝりぬ魔の影に

酒の價！と恐ろしき
だみたる聲にふとさめて
再びかへるうつし身に
應へぬ、酒のあがなひと

投し銀貨のきら〳〵と
店にかゞやく燈火の
光を受けて一日の
勞働の價きら〳〵と
かゞやく中に毒々し
蛇のうごめき若者の
心は悔と恐れとに
すくみぬ――あはれ醉醒めて

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歓迎す、同じく二十四字詰三十行以内、半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

四等

○儚き努力

松山市二番町富田方　草村瑩子

美くしい時代——ほんとうに、妾らはそれを望むのです。『他人の為め、義の為めには自分を犠牲にしても顧みないと云ふ』妾の美くしい時代と申ますのは、それまでゝはないのです、けれど、とに角に、女はどうしても、男子に助けつ助けられつしてゆくべきものであらうと思ひます。

女だつて獨りて立派にやつてゆける、どうして男子などに頼らう————などゝ申される方があります、又中には立派にやつて行つてなさる方もありませうけれど、けれど、妾はやはり、獨身主義などゝ云ふ言葉を聞く度に、戰慄を禁じ得ないのです。

『女とは弱き者の名なり』妾はどうしてもそうだらうと思ひます。

西洋の誰かの詩に、一本の大樹が高く聳えて、それに美くしい蔦が、はかなくなよ〳〵とからんでゐた。そこへ急に強い嵐が吹き起つて來て、樹は今にも倒されそうに、揺られゆすられたが、その蔦のために、漸く倒れずに止まつたと云ふのがあるそうです。

大木は男です、蔦はどうしても女でなくてはなりますまい。男子の力を得て、はじめて、女もその力を、光を、美を發輝し得るものであらうと思ひます。

女の獨立——畢竟それは、儚ない努力に終るものだらうと、妾は信じます。

勿論女だとて、主義も、理想もあります、そして男子の力を藉るためには、時にはそれをも犠牲にせねばならぬこともありませう。と云つて絶對的の服從と云ふのではありませぬ。要するに妾らは、自尊の念も、誇もなければなりませぬが、それと共に女だと云ふ弱味を忘れてはなりませぬ。その弱味こそ、女の強いところ、美くしいところ、尊いところだらうと思ひます。

蔦は到底、樹を離れて立つことは出來ませぬ。

妾はこの故に、綾さんが獨身主義を捨てられたのを、心から喜び、何となく安心をしたやうに思てゐます。

獨身主義は、つまり若い女の弱い反抗の聲に外ならぬと思ひます。

婉曲で然かも何處かに力があつて動かない說を述べる、斯る人こそ其實弱くない、健氣な婦人であらうと推察する（評）

五等　○女子教育

備後國神邊　井上年子

古今盛に進歩發勵を圖りつゝある女子教育は二つの目的を持つて居る。一つは賢母良妻を養成するのと、一つは女子に獨立生活の出來得る位な適當な職業を習得さすのとてある。前者は我國古代から傳つてる女子教育の本領て、後者は時勢が生んだ女子教育の目的てある。而昔の英勇儒者の母妻は多く前者から出て、近世の名流女史の大部分は後者から出て居る。

時代が要求する女

前後兩者何れが可か不可かの問題は大分前から識者間喧しく論じて居られるが、未だ明了確固たる解決を聞かない。故に是は教育界の一大疑問として暫く置いて要は兎に角時代が要求する女てある。時代が要求する女？それは後者の意志を以て前者の行をする者てはあるまいか。

賢母良妻の基本

賢母良妻の基本は愛情てある。愛情は女子の最美なる特點て女子の生命てある。如何に他に秀て如何に拔群の才智を備へて居ても、愛情に乏い女は確に缺點ある女てある。愛情に富んだ女は勉めずとも自然に賢母良妻の行ひが出來るてあらう。

女は何うしても女

如何に女子が男子に劣らないやうな職業を得て居つても、何うしても男子と對等の權利を持つ事は出來ぬ。自分は出來ても社會が許さぬ。否社會は許しても我國三千年の聖曆が許さぬ。故に女は何うしても女てある無暗に主義を振り廻したり女權擴張を論じたりするのが、強ち女子の本領てはあるまい。

夫人と成つて

良人を差置て、少しの才智を頼み社會に飛出して小成功を望むなどは大なる誤りてある。それよりも自ら良人の顧問と成つて、其特有なる愛情を以て或は慰め或は勵し良人をして克く激甚なる生存競爭に勝たしめ、克く社會に成功さす方が遙に優つて居る。のみならず是夫人が良人に對して盡す可き道てある。否夫人が自ら行ふ可き道てある。猶良人の成功は夫人の成功と云ふ事を忘れてはならぬ。

獨身生活

獨身生活唱導者は亡國論主張者てある。何故か？曰く子孫繁榮の道を失ふからてある。のみならず今玆に假に彼等の思惑通り日本二千有餘萬の女子が殘らず獨身生活を主張する事と成つたら何うてあらう。家庭も無ければ趣味も無い。實に人性の行路は苦痛と煩悶とを以て作られるてあらう。それて獨身生活主張者は何うてある。面白可笑しく世を樂觀して暮す事が出來るて

あらうか？否、否、必ず何かの煩悶を以て是又悲觀的過世するに違ひない。故に獨身生活は絕對に不可である。罪惡である。あゝ獨身生活、是れ女子敎育の進步に連れ起る一種の弊害であらう。

終にのぞんで

斯う云ふと無暗に女子を突落して、男子ヒイキをする樣であるが決してそうではない。女子だつてそう〳〵無權無能の者許りじや無い。云へば何程も理屈はあるが、そうなくても虛榮心に驅られ安い女子の事であるから、其の長所を一々擧て云ふのは却て不利益だらうと思ふ老婆心から斯くは其の弱所缺點を擧た次第である。誌友諸孃幸に諒せられよ。

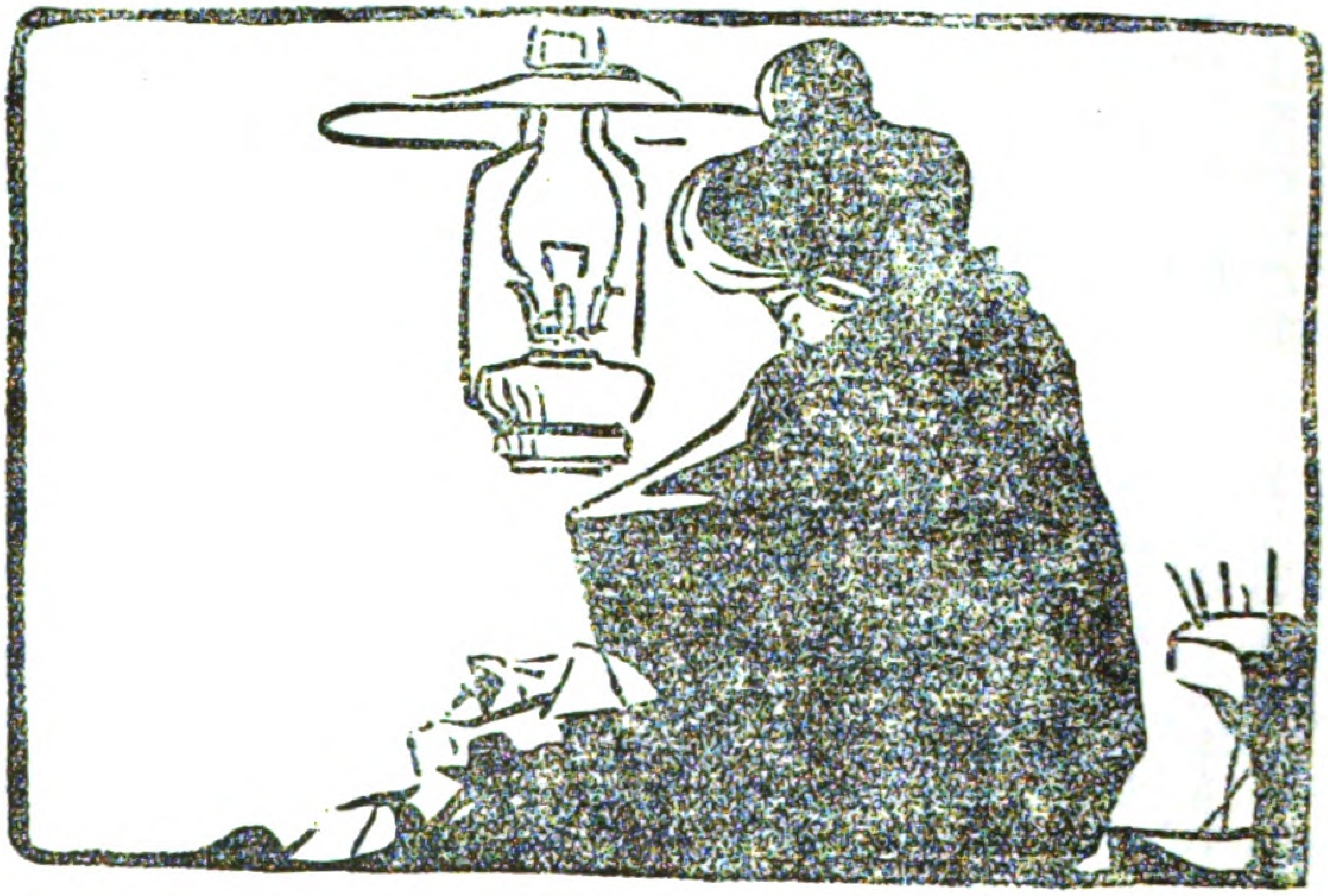
文章が男らしくて、ごつ〳〵してゐるから疑に見えるけれど、論はしつかりしてゐる、見るべきもの(評)

秀逸

○海水浴

相模　鍋田靜子

夜業　　京都　張田秀子



私は海水浴と云ふ事に就て少し述べて見たいと思ひます。近年女學校あたりでは海水浴を初めましたが、此田舍女子は更に海水浴を致しません。從つて戶外へ出る事が少いので顏色は靑白く病人のやうなのが多いのです。であるから先生が菫の花はどう云ふ花、木瓜はどう云ふ花、女郎花はどう云ふ花と問はれても、一々其答が出來ないのです。之即ち日本女子の四季折々散步遠足をしない證據であります。外國女子は之と違ひ四季折々散步遠足をするのです。殊に夏季などには田舍女子さへ誘ひ合せて海水浴をするのです。之外國女子の長命を保つ原因一つはこゝにあるだらうと思ひます。日本女子の海水浴にゆくなどと云へばおてんばだとか生意氣だとか云ふて笑ふのです。之日本人の大いなる誤解であります。此夏季休業などには宜しく海水浴をなさい。下手なれば淺い所で、上手ならば少し深い所で、女子などは十分か

ら二十分位が最も適當です沖から吹きくる凉しい風は泳ぐ女子の髮などに當る其心地のよい事は、とても戶外へ出た事のない女子の味はふ事が出來ないだらうと思ひます。

あまり長くはなるし時計も十一時で眼もつかれましたから之て筆を止めます。

時節柄、參考とすべし（評）

○圖畫短評

盛岡市　四戶節子

碌々人並の繪さへ眞似の出來ない私が皆さんの御手になつた立派な圖畫を評するとは甚だ恐れ入りますが只私が此の繪が斯うと感じたことだけをお話しませう。

先づ四年第五號の分の當選繪畫。これは矢張り當選だけ私の目にもよく見へました。殊に日永などは老手だと感じました。それから選外繪畫では春の野路、これは水彩繪としたら一層美しからうと思ひます。夕ぐれ。私には餘り綺麗にも見えませぬ。歸省。汽車中の二人のお方はいま何んな夢を結んで居られませうか。それからおてだま。これは何うやら目の視線がおてだまからそれては居りますまいか。春の海岸。一度も海岸へ行つたことのない私ははてこんな物かと思ひました。新星。中々態度も良うございますが私には畫題の意がわかりません。露店。七福やきを頂きたい。大入。隨分お上手ですこと流石は佐野貞子樣のお筆。彼岸詣。何ちらの方も頭が大き過ぎるやうです。梨賣。おつとこれは私の拙作。床の間。大分ゆがんで居ます。スケッチ。なんだか此れは縫物のやうですネ。若き母。何時かは私もかうなるでせう。雪の小川。水彩畫的。それから岩瀨通ひ。これはハガキ文學（三卷七號三十三頁）の太田三郎先生の潮來とそつくり。然し暗合かも知れませぬ。

まあ〳〵色々と口の惡いことを申しあげて、或ひはお怒り遊ばす方もありませうが、何卒お許し下さいませ。

批評があどけないから却つておもしろくよみました（評）

○大丈夫

福島縣　泉　花枝

此間新らしい足駄を求めた。所が穿いて四五日目の用便途上、ふと小石に躓いたら、プッリと鼻緒が切れて了つた。『何屋の緒は品がよくないから弱くていけない。』といふと、母樣が『弱くなくつても、新しいつても切れないとは限らない。』と仰つた。夫て『それでも新らしい强いのなら大丈夫な筈よ。』とかういふと亦、『其大丈夫が切れた因だ。』つてお笑になつた。後て考へて見て成程と感じた。大丈夫と思ふから、自分はさう感じなくても、自然取扱が手荒になる、注意が疎忽になる、無理もする。そこて切れもするのだが、糸だから切れると思つて注意して步けば、決してこんな事はない筈だ。よしや切れるにしても、足を痛めるやうな烈い事がなくて濟むてあらう。

此間亦隣村て、可なりの大火災があつた。失火の原因は藁細工場の爐からと斷定された。しかし其家主のいふ所によると、『よく消し止めたのだから大丈夫私の宅の爐から出たてない。』といつてるが、之も矢張り前の通り、大丈夫氣遣ないと安心したのが、即ち失火の原因となり、多大の損害を來たしたのかも知れない。

凡て物事は、狐疑逡巡するのは、大抵の場合によくない事てあるが、しかし優柔不斷は勿論よくないといつて、何大丈夫と獨飲込みに早合點して了ふのは、決して褒めた事てない。事業の難局に當つては果斷決行も必要てある。勇猛驀進もよい。が之をやるまてには、細心綿密、幾度も〳〵省み鑑みつゝ爲し行ふを専一としなければならぬ。氣壓が高い空氣が乾燥して居るから、翌日は必ず好晴天だ。とは理論上動かす可らざる斷案てはあらうが、愈其翌日になつて見てから雨が降る例はいくらもある。況んや有爲轉變計り難き人世、榮枯盛衰定め難き浮世の中の事柄が、さう定規てきめるやうにキチンといくものてはない。と考へて餘り大丈夫がらずにするのが、即ち眞の大丈夫てあり、且亦過誤なきに近いてあらう。

少しこじつけも有ますが、先づ論文としては好い書きぶりです（評）

◎第五號に就て　茨城縣　村野春翠子

◎美文『祭の夜』花の様な玉かと云ふ處に趣味があつて美しく光つて居る『雪消え』姉様に就いて書したらしい根本松江子嬢のお得意の文章らしい『あらぬ戀』戀人が嫁に行くと云ふ事をきいて少なからず驚いたてしよう而し戀人の心中、獨身主義迄て結んだてすものと自分て自分に訴えて見ては雪ちやんに同情察しました此度私が雪ちやんはお嫁に行かぬ様にして置きます『祭の宵』叙景賞すべしてす。

『お伽噺』『山の規則』極面白い題てす猿に辨當を盗まれては氣の毒様てすねいだがね蝶子さん今年は猿の年だから堪忍してお出なさい『章魚』體を負かしたはよかれ先生勝戰の爲めに御親類迄て飛んだ迷惑漁夫は大漁なりと酒五合と洒落ずや『御雛様』妾大好き御兄さん一所に飾りましよう妾の宅へ御座ませなだが喧嘩は閉口するよ夢ては安心々々『宵の明星』よくかきました二人の心中察しました。放言多罪。

◎五月號の評　大阪市　田宮薫子

美文。石拾ひ。八重子様作。

友の難を見ては、自分のりぼんを落して迄も救けると云ふ事は、友情の無い者の、とても出來ぬ事です。

御伽噺。御褒美。井上年子様作。

良い事を、眞似せよと云ふのが、氣に入りました。

小説。發明家。服部貞子様作。

題か發明家とありますから、其發明家の性格をもつと

細く記して欲しう御座いました。
日記。病床日記。松永しげ子様作。
美う書けて居りましたが、もう少し細く記して貰ひたい様な氣が致しました。が行數の制限もありますからこうなつたので御座いませう。
論文。誌友の面影。鹽見千代子様作。
觀察の力に長けて居られると云ふ他は御座いません。
短文。橋。拓植ちか子様作。
昔と今とで、同じ橋が、違つた想が起ると云ふ事が、良く書いて御座いました。
實用文。興津より。菊笠みつ子様作。
此手紙を、受取つた方は、其身興津に在るの感がするでせう。が十五行以内と云ふのが、三十四行にもなつて居るのは、餘りひどい事だと思ひました。

○國なまり　上毛　元子

これはつひ近頃のことである。信濃の國から、其國の人と上州の人と二人、重荷を負ふて碓氷嶺へ差かゝつた、すると信州人が後から「休まず」といつた、上州人は休まずといはれて、苦しさを堪へて、よし〳〵と諾しつゝ行く、然るに信州人は頻りに「休まず」を連發ずる、上州人は一生懸命に行く。と突然、後の信州人が上州人を引たほした。驚いたの何の、殺されでもするのかと思つたさうだ。これは言葉の相違より起つた逸話で、信濃の人のいふ「休まず」とは「休まう」と云ふ意味なのだ、上州人は是を知らず、休まずに行く。亦信州人是を知らず、頻りに云つても上州人がきかぬので腹を立てたのだ。とはこの上州人なる人の話。まるで彼是正反對である。實に不便なことだ。
國なまりには様々あるが、自分の聞いた處を二三あげて見よう。越中の人は「上ショ(州)の人のいふ言は、ふス(節)がッがふ(違ふ)てわからぬ」亦「ムッ(道)もせにッる(散る)山櫻花」といふ具合にこの場合、音を發する事を得ぬのである。これは幼時よりの習慣で中中よくなほらぬものだ、斯様な所に產れた人は不幸な話だ。又、常陸の人は、鼻かけ聲で濁音を發する、例へば「いばらぎ縣ひダちの國つジ(土)浦」といふ。こんな人と話をして居ると氣になつて、をかしくて堪らない。亦諸國の國なまり等を笑ふ東京邊のシとが、「ひ」といふべきを「し」といふのは甚だ耳障りだ、
面白いのは京坂言葉である。概してやさしい、聞いて心持ちのいゝ云ひ方だ。聞いてわかればいゝ様なものの「そうだすさかい」等といふ「さかい」と云ふのがどうしても受とれぬ。何だか不用の語の様な氣がして。まだ〳〵多くあるがこの位にして置く。

○感じたるまゝ　伊豫　曉子

世にはしきりに臺所の世話をやきたがる男子あり。或は衣裳の事共にしひて嘴をいるゝ男子あり。一見いか

にも心切げに見ゆれども、實は女權を奪ふの甚だしきものにて女子にとりては此位迷惑の事はなかるべし。由來一般の女子はあまり外出せずして一家を整理し、せまき家を天地と見てかまどの前を都とたのみて、長き五十年の人生をおくるものなれば、家内の事は男子より世話をやかれぬまでも進んでなし終ほせたきものなり。殊に廚の事は男子の外に働かねばならぬ如くどうしても女子がせねばならぬことなり。

然るに女子の生命とも云ふべき廚の事までをとやかくと重箱の隅をせゝくる如く云はれては、相當教育ある女子は廚の權までも男子に屬するものかと心細く感ずるに至るべし。それならば育兒だけにても女子がしたらばと云ふ人あらんも、それ位の男子ならばむつきの世話までも自身にてするにちがひなかるなるべし。

私はかゝる男子をしば〳〵見受けし事ありしが、男女同權などゝ唱ふる世の中にもかゝる無權のもとにくらす者もあるかと其妻なる人に對して同情の念禁ずる能はざりき。かゝる男子は親切ぶりと云はんよりも主人ぶりたき故ならずやと思ひし事もしば〳〵なりき。廚の世話などのやさしたき樣の男子はそれ丈け自分の業務にぬけめのあるものにて決して敏腕家など云ふ者はいてざるべし。加ふるに男子の特性なる應揚の美風を失ひて、品格に於て大なる下落を來すべし。

これが性質であると云へばそれ迄なれども、かくては男女共に不利益なれば男子はどこまでも男子らしくありたきものなり。

五月雨　青森縣　田島まつ子



○極端なる自然派

丹後　鹽見千代子

極端な自然派とか云つて、近頃の小說や畫は、餘りに事實をさらけ出し過ぎて、嫌な嫌な感情を呼び起させるものが、多くなつたやうですが、實に醜體の極みてはありませんか、失禮てはありますが、私から見ますと、精神修養の足りない、輕薄文士が徒らに、自然主義主張の摸倣に醉ふて何の意識もなく書き散らした、反古同樣のものとしか思へません、甚だしきは引き裂きもしたい程、ぐつと癪にさはるものさへあります、それは少くも作者御自身の顯はれてなからうかと思はれます、よしましたさうてないにしても、美くしい人ならそんな事は、夢想するのも嫌な筈てせう、して見ると先づ最初に、高尙な思想を養つてからてなければ、浮々と不健全な作物を世に出して、靑年男女の淸い胸を、汚がす樣な者は、斷然止めて頂きたいものです、澤山の著書を得さへすれば、嬉しく思ひ玉ふやうなお方は、無いとは思ひますが、呉々も文士の責任を自覺して、少しても高く美くしい、立派な作を出して、腐敗せる社會を感化して頂きたいのであります。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

雨晴て月おぼろなる春の夜や　赤阪　成田たん
此宵の顔朧げや地藏尊　羽前　齋藤菖蒲女
春雨の名殘りを朝の霞かな　靜岡　根岸貞子
朝霞や若菜賣る子の市女笠　岩代　金子敏子
一本の紅梅香る讃佛會　下野　下河邊なみ子
我戀は此鬼怒川の螢かな　茨城縣　宮本さい子
春風や公園の人紅に　信濃　駒澤ひろ子
限りなく寢らるゝ物よ春の雨　神奈川　片野良子
花散るや樊からのぞく鶴の首　廣島縣　紫　英女
行く春の机に榮華物語　牛込　井上春子
舞姫の腰の細さや更衣　長野縣　小林みつの子
玉川の水に生まれし白魚かな　豐前　さ　く子
戀猫の鳴く聲遠し春の風　鳥取市　上山千重子
長居する京の紅屋や桃の花　長野縣　兩角ゆき子
麥に見し若葉の宿や不如歸　茨城縣　木村仙子
明月に杉の梢やくもの糸　青森縣　松尾とし子
思ふ人思はるゝ人秋の月　大阪　眞田芳子

更けし夜に泣く兒すかすやほとゝぎす　奈良縣　よしみ
古雜誌など出して讀む日永かな　大和　我澤素枝
現はるゝ九十九島の霞かな　下總　すみ女
麥飯に南瓜の菜の暑さかな　伊賀　山村すみれ子
病む窓に月のさしこむ弱生かな　宮城縣　八巻貞子
海濱に向ふ座敷や宵すだれ　丹波　伊東菊枝
名月やさす棹をそき渡し守り　印旛郡　加藤豐子
抱て來る琴の重さや春の暮　茨城縣　松澤よし子
山門の花寂として春の雨　宮城縣　菊地葉子
散る花に思出もなし春の夕　千葉縣　八千代子
一點の雲なき春の晝の月　若狹　武田涙子
おぼろ夜を小唄をかしき男かな　伊勢　佐々木らく子
若葉して峠の茶屋の見えぬかな　常陸　小泉はま子
春風や裏美はしき能袴　金澤市　茄子野しげ
春の夜の月おぼろなり殘り酒　大津　あや子
京へ行く能師に逢ひぬ春の暮　本所　秋山飲子
夏の月汀に丸う浮びけり　相模　渡邊君代子
方丈の灯は靜かなり春の宵　横濱　鈴木菫子
炎天や消えて殘らぬ峯の雲　京都　大草淺子
妹は一足先へ霞みけり　丹後　神田春子
卯の花や京の邊りの繪師が宿　千葉縣　飯塚みどり子
名月や柴の戸叩く歌使　京都　澤田鶴子
麥刈て戻る戸口や二日月　越後　五十嵐須賀
五智如來花を餘所なる詣かな　山口縣　松岡きさ
餅燒いて客待つ宵や水雞啼く　相模　鍋田美代子

祟りありと傳ふ古塚や蕨肥ゆ　上野　小林いし子
無住寺に百合花さいて晝の雨　沼津　吉川政子
新妻の若い手柄やさつき雨　小石川　下山啓子
月の窓新茶こぼれて香りけり　横須賀　藤野百々子
桃咲くや垣に衣干す寺男　大阪市　梅本りふ子
何事も思はぬ花の盛りかな　相模　目代奈加子
さゞら波かすむや志賀の浦曲より　鹿児島　山崎秀子
深草の里の夜頭や浮れ猫　上總　北田かれ子
背戸口に掛けし簾や花芙　金澤市　花代
葉櫻の雨に著作の窓暗し　南多摩　中島鮭子
傘ほせば傘の下とぶ燕かな　常陸　畑越つる子
帆のたれし千石船や春の海　伊豫　福井幸子
大根汁すゝり盡して別れ哉　下毛　古橋みつ子
村の宵神馬いなゝく社かな　紀伊　田中早苗
啼かぬ鳥一つ飛びたり春の月　大阪市　岩津愛子
遠山の雨見つゝ行く夏野かな　茨城縣　橋本けい子
雪ぐもり窓に灯ともす女かな　伊豫　芳枝
螢かとつまめば露の落ちにけり　富山市　ぼたん
春雨の道に捨てたるすみれかな　喜惠子
涼しさやすだれ隔つる瀧の音　山城　山田幸子
五月晴河骨咲いて田の畦に　三重縣　紅子
夜は寒しれられぬ門の犬の聲　徳島縣　四野花莚
春雨に伊勢物語よむ夜哉　小石川　梶水仙子
山茶花に片山影や寺の庭　下總　鈴木はる子
古寺の鐘なる夕べ肌寒き　徳島縣　中村勝子

十八の春をやせたる我身かな　越中　萬子
ストーヴに香蕈焙ふ夜寒かな　山城　政子
窓明けて机を拂ふ若葉かな　遠江　田口つた子
鶯のぬるゝ恨みや春の雨　花江女
朝櫻今朝はお成の掃除かな　廣島　愛春子
陽炎に香焚きつくす夏野かな　芝　長谷川靜枝
行春や是も莊周の夢のあと　安藝　吉岡智惠子
山泊りして待つ夜なり時鳥　澁谷　杉山菫女
若鮎や山吹も咲く川三里　麹町　泉鶴子
酒倉の隅より出てぬ春の月　札幌　佐藤千代子
金魚さま〲霓裳羽衣も遊ぶなり　神奈川　ふじ子
春の夜の夢美しき詩人哉　大阪府　親藤子
若草に冬病みし雛太りけり　神戸市　三澤政子
佳き人の言葉すくなに春の行く　千葉縣　いわ子
床の間に木蓮いけて我病みぬ　岐阜縣　日野政子
夏の月將棊さす人照しけり　大阪市　山内溪子
野燒きして月なき夕の暑かな　紀伊　壽美女
花曇り蝶々二つ飛て居る　ゆき子
咲くや花奈良は千年の月朧　磐城　渡邊英子
木蓮花高く咲きける草家哉　信濃　小林いさ子
桃の道珊瑚の鞭を拾ひけり　豐後　姫島さち子
長閑さや石なげて見る山の池　東京　あき子
打水に夕日さしけり草の露　丹波　紫雲英
美しき子の湯浴りや春の雨　筑前　島よろづ
新設の電柱高し春の街　熊本　加納白薔薇

誌友俱樂部論

本誌の誌友俱樂部は諸孃の交際機關として、永く開放主義を取つて居る事は、皆さんも御承知でせう、何しろ此の欄内に現れる事柄は雜誌以外、諸孃の直接交際に影響する事とて、利益を得られた方が大多數あると共に、少數の迷惑した方もある、一々住所姓名を明記してあるのですから、其方々が責任さへ持つて下されば、恐らく間違はない筈ですが、實際は然う行かないと見え、書物を只取られたり、男子がぶしつけな失禮を申上げたり、いろ／＼騷動が持上る、誌友俱樂部改善の意見を記者が實施するまでもなく、諸孃自らさへ改善して頂けば天下は無事なんてす。

そこで此處に揭げやうと思ふのは、讀者から來て居る誌友俱樂部論てす、是は皆「新論文」の原稿として來て居るのてすが、少し破格てすけれど、同じ題の物を同じやうに並べるよりは、玆に摘要を拔萃して諸孃の參考に供した方が宜しからうと思ふのてす。

本誌四月號に上毛、元子の君の誌友俱樂部論を出した處、反對者、贊同者、兩方とも反響がありました、山形縣、齋藤菖蒲女の意見は、小說辯護論て子女敎育上或は良妻賢母たる上に小說は顧問になると云ひ、或は人情風俗を知る上にも小說は益がある、元子さんの意見は盲目的て、幼稚て、無趣味だと云ふことに歸して居る、反駁論としては急所を外れて居ました。次に茨城縣、みだれ子の說は一時的と云ふことに反對して、矢張交際は永久的てなければならぬ、一時的と云ふてとは餘り短か過ぎて交際をしかねると云ふのてした、此れは一時、永久と云ふ時間の長短問題でさした事てもありません、みだれ子女も小說贊成者て、其意見に曰く、

それから小說てすが私は大好きてす、決して害があるとは思ひません、ゲーテはサイカーオフウエークフキールドを讀んて文豪となりましたし、ベンダムは、テレマツクスの爲に立身しましたし、其の外時の古今によらず、洋の東西を問はず、小說の益を證明した事實が澤山あります。てすから害がないばかりか、却つて人々に多大の益を與へると存じます、但しこれは文學者の意見てすよ、戀愛小說必ずしも憎まないて宜しいてせう、しかし、小說に依つては前途有望の青年子女を淺間の烟となし、華嚴の鬼としますから、所謂選擇して御愛讀なさい。

とありました。

それから又元子女史に與ふる文で呉の山田觀月と云ふ人から來て居る文章は、自ら「予は堂々たるにはあらざるも男子の一分子なり、然も予は軍籍にあり、日露の嵐に吹き洩らされて、今猶玆に餘命をつゞけ、浮べる城を守りつゝ」と言つてゐられるから確に男子でせう、隨つて全文を紙上に掲載しかねますが、此海軍人の意見は、女子と男子と一言を交しても世間で兎や角云ふのは餘りに外面を粧ひ過ぎると云ひ、却つて内部に腐敗した女子の多いことを嘆息して、暗に男女交際の自由を望んで居られるやうでした。神戸、平林たつ子孃から來て居る文は、一種の懺悔談とも見るべく、女子と思つて交つてゐたのが男子であつて驚いたことを書いてあります、參考までに左に其大部分を拔抄します。

誌の人眞似とやらで、私は誌友倶樂部で交際を求めました、すると實に驚くぢやありませんか、男子の名を明記して來たのもありますし、名のみは女子で筆跡は男子のもありました。夫等は一々返事は出しません、出すとまた何とかかとか云つて來て、事が面倒になる恐れがありますから。まあそんな事はどうでも宜敷いのですが、此交際について、私は實に悲慘な目に遇ひました、それは外でもありません、私の一番信じてゐるお方で、府立の女學校に通つて入らつしやる雛子樣と云ふ姉樣がありました。其文字のお上手なことゝ云つたら驚く程で、女らしく優しく恰も姉の妹に對するそれのやうに、慈愛溢るゝ書き方をして居られました。昨年十二月から今の三月まで、一日の如く文通をして居ましたが、過日突然一封の書が參りました。見れば懷かしい雛子樣からのですが、どう云ふものか、まるで男子のやうな手蹟で表書がしてありましたので、オヤーと思ひながらも別に怪しまず、開封して讀み下しますと胸を衝く文字！私は知らず机上に俯伏て、潸と流る涙を拭ふ勢もありませんでした。胸を衝く文字！とは斯う云ふことであつたのです――私は今まで御許を欺いて居ました、エンゼルのやうな御許を欺いてゐた私は鬼でしやうか蛇でしやうか、實に良心に恥ぢ入ります……小生は當市商業學校に通學致して居る者です。以後左樣御承知下さい――嗚呼何と云ふ情けない言葉でしやう。今の今まで命に代へてもと敬慕してゐたお優しい姉樣が、私の大嫌いな假面の男子であつたとは…………。皆樣私は之以上云ふべき言葉はありません。ですが只一事だけ御記憶を願ひたいのは、私が其後數日を出でずして、其男子と絶交しました事です。

次に掲げる大阪の木村春江孃のお説は誠に女らしくて御もつともに思はれます、交際論としても立派なものです、是も一部だけ省略して左に、

文のゆききも度重なれば一面識はなくともほゞ其人となりを推し得る事も出來ませうが最初から突然にこむつかしき新體詩や新派和歌などで交際をのぞまれましても詩や和歌はいつも沒書仲間の私ですもの、さればとて又あまりに打ちとけた甘たるい文言で字といへば達筆ともいはゞいふべきかきばなしの御手紙に接してはむしろかたくなの兩親の手前、わきに汗する心地でござります愛とか戀しいとかいふ文字がなくともまごゝろのある手紙は人をひきつける力は必ずあるものと私は信じて居りますそれでお互の身状もほゞわかりまして寫眞の交換もすみます迄の間誰に見せても女らしい文であるとの評が動かぬ御手紙を頂戴致し度いと思ひ升。

諸嬢との交際は日頃望で居つたにもかゝはらず御返しも差上ませなんだのは右様の次第てござりましたので微意のある處をおくみ下さいましたなら失禮の段はいくへにも御ゆるし被下まして改めて清い御交際を仰んでお願ひ致します。

斯う云ふ方は安全な御友人を得るでせうし、又家庭にあつてもしとやかな御擧動が分ります。次に熊本の江添ちじ子さんの説を紹介いたしませう、此方は活潑に入らつしやると見えて、小説反對の意見もなかく烈しいのです、初めに誌友倶樂部の有益なことを論じて圖書換讀の處に至り、左のやうな説があります。

小説癡風戀風お持ちの方は下名へ、とか多情多恨お送り下すつた方には相當の御禮は必ず致します。とか實に呆れかへる次第て御座います。其内容はどんな事を書いてあるか私は未だ讀んだ事がないから存じません。存じませんが癡風戀風などは文字の上から見ても作文のたすけとなるような本とは私は思ひません。よしさまて卑猥なる書籍てないにもせよ、學生間には小説はあれ程かたく文部省から禁じてあるては御座いませんか、かく申しますとも早や自分は學生てはないから。とおつしやる方もありませう、然し學校の門さへ出ればどんな小説ても勝手に讀むてゝいゝと云ふゆるしはよもや有りますまい、御自分の胸に手をあてゝよくお問ひになつたら何とか答が出るてせう。あゝ記者様は小説のかへつこをするために此欄をおゝき下すつたのてせうか？　私はたかく叫びたうございます。誌友の皆様以後小説の交換などは一切やめにして今少し新らしく有益なる方面に此の誌友倶樂部を活動させようじやお御座いませんか。

絶對に小説交換を禁止せよとは文部省以上の議論て、兎に角其御熱心には感服ですが、餘りに極端かと思ひます、小説は世情の反射鏡ですもの、全然小説を峻拒すると云ふ事になると、世間の人にも交られない事になります、矢張程度問題て、又其人の根本思想さへ健固てあつたら小説位ゐに誘惑はされまいと思ひます、江添さんの説は一部の議論として參考する迄です。最後に岩代の泉はなゑ孃の文を全文掲げませう、左の通りてす。

先日古雜誌類を郵税丈お送の方に進呈しませうと申上げてから、今日迄御申込遊ばした方が、やう〳〵十名足ずてした。始は、多數の申込みに應じられるか如何かと心配したのは、眞の杞憂てした。それについてふと考へた事がございます。或は知見の狭い妾の邪推かは存じませんが、毎號の文壇紙上に數へ切れん程多くの書籍換讀、寫眞繪物繪はがき交換などの記載がございますが、其中には隨分如何はしいのもあるてはありますまいか。多くの讀者諸嬢の中には、此不徳なのにかぶれてお出てなさる方が多いてはないてせうか。古本なんか望ましくないと仰る方は別てすが、さもなければ、本を貰ふに郵税位惜む方はない答と思はれます。申込むのに郵税は後からつて御照會のお方もございます。妾は折角遙々の御便りだと存じましたから、四五名の方へは、郵税迄妾の方て拂つて上げたのてございます。お一人に三四册もお送りしたのに、貰ひばなして、受取つた丈のお知らせもない方もあります。匿名らしい方もありました。中には御親切なお方もございまして妾の望んだ本をお贈り下さいました外に、換讀書の郵税まで別封で下さいました方も一兩名ございました。かゝるお方へは、思つたより册數を増して上げれば心が濟まんのてございました。外には男子て女名の假面を冠つてのお方もありました。立派に男と名乗つて憚せず御手紙下さいましたお方もございました。妾は何となく其男らしいのに感

致しました。

唯一片の桑蠶の口に入つて、糸ともなり、羽二重ともなり、綾とも錦ともなり、棄てられては、朽ちて土となり、屑となつて無用にも終るやうに、唯數行の慰み文字によつて、生れ出た事柄、ホンの些細な事ではありますが、克く能く考慮推測して見ますと、面白い變つた今の世の狀態の半面が、朧氣乍ら伺ひ知られて、得知れぬ愉快な情に打たれたのでございます。

此の方のは文章も能く書いてありますし、意見も穩當です、不平を言はずに、却つて其爲に世間の人情が分つたとのお言葉、さばけた言ひ廻しです。

何にしても誌友倶樂部は開放して、諸嬢の自由交通機關にしてありますから、多少の弊害もありませうけれど、注意して皆さんが悉く信實なる公明正大の態度をお取りになれば、此れほど有益て、便利な機關は外になからうと思ひます。一人でも不正の方があると其爲に不平者や、迷惑者や、憤慨者を生じて誌友の治安を妨害します、記者が此處に皆さんの意見を成るべく公平に紹介しましたのも、誌友倶樂部欄を確實にしたい外はないのですから、何うぞ御諒察を乞ひます。

終に臨みまして多少記者の意見を述べませう、交換は圖書、書籍、寫眞、繪葉書、樂譜、造花、編物、新聞、雜誌位に限られてゐますが、書物や雜誌新聞の類など皆有益な交換ですから、益す多く、益す盛んに交換を行はれたいと思ひます、未だ以上の外に名流の書簡、各地の名產、草花種子、植物標本など少し變つたものと交換も面白いではありませんか。それから自作の和歌俳句新體詩又は文章を交換して批評しあふのも爲になります、ひたすら物質的利益を得やうとばかりして居るのは、傍から見て餘りよいものではありません、書面上で交際するのに雅號を用ゆるのは宜しくありません、皆樣は初對面の時、私は何地の星の子ですとか、私は春江女史ですとか仰るでせうか、若し仰れば變なものです、手紙でも初めての方に物を云ふ時は禮儀と云ふものがありますのに、雅號や何かで挨拶するのは失禮に當ります。

是は別の注意ですが初めての處へはがきや手紙を出す時は、住所姓名を成るべく明瞭に、手紙ならば封筒にも、本文にも認めて置くのがよろしい、御自分では生れた土地の事だから習慣で能く分つて居ませうけれど、對手は初めてですから、走り書や、くづし書や、又は郵便の消印の爲などて、字が讀めなくて返事の出されぬ場合もありますから、是等にも能く注意して居らねばなりません。

短文

編輯局選



規定　十六字詰七行以内、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は乙種に據る

二等　○夏の我家

青森縣三戸郡三戸町　馬場ちよ子

私の家は老杉がまばらにとりまいて居ります。南窓によりますと、とうとうと水の湧く音が致します、それは杉の根からであります。障子には若葉の影がさや〳〵とうごいて居ります。開けると木の間から川に筏流す人や、馬ひく人が見えます。

如何にも涼しさう、文章も涼しさうです。

三等　○梅雨

信濃國埴科郡寺尾村柴　小林美喜代

變に暑いと思ふと、霧のような雨が降り出した、晩になつても晴れぬ、翌朝になつても晴れぬ、晴れそうになつては又ショボ〳〵霧のような雨が、今日で三日も降つて居るので、お針の手を休めて大欠伸をするので有りました。

此文章、何氣なく書いてあるが餘にたるみがない。

四等　○琵琶湖

滋賀縣東淺井郡大郷村川道一三二　西尾かめ子

廻りの山の緑の雫が滴り集まつてこ湖に湛へるのです、周りは七十餘里とやら、平穩なる時は鏡の如く少しばかり風が吹くと金波銀波を漂はせ、渚に寄する小波は滋賀の都と昔より歌にもうたはれ、殊に朝日や夕ばえにさながら、玉の様な光りを放つ。あゝ我が──琵琶の湖。

此文、竹生島の天女も嘉納したまふ。

五等　○トンチル

梨花

私は眞當の山家育ちて、未だ、一度も汽車てトンチルを通た事がありませんが、宅の母屋から井まで行く間の、靑葉のトンチルを一日に幾度となく通て居ります。

鐵道のトンチルはくゞらずとも青葉のトンチルはくゞりたい

秀逸

○ほうろく船

三重縣　小貝よね

裏の川へほうろく船が入つて來ますといつも雨が降ると定まつて居ますので此船を見るともう糊を煮る事も見合せ　妹は山行の相談もあの船が

去てからと申します。ほうろくは天氣續の時に扱ふと損れやすいので空中に水分の多い時に積上積下するのだそうです。

おもしろい風習もあるものです　點火夫

〇葉の運命　下野　きぬ子

昨日活けた、若葉の錦木が、今朝見たら少しも水についてない、ほんに迂つかりな私よ、堪忍しておくれと言ひながら、冷たい水を、たつぷりさしてやりましたが一旦萎んだ葉はもう再び、生々とはしませんでした。

取りかへしがつかぬ　小きく

〇進歩　茨城縣　永井皺子

伯母さんの未だ若い時分には家毎に草刈り場が有りましたそうですが今は皆開墾になつて馬の草さへ無い位い、それ故田畑には草を入れる代りに科學肥料を入れて田植をすると思へば世も變れば變るものです。

いつまでも新田の田吾作ではない



〇撫子の花　鳥取市　上山千重子

朝の風軒の忍草に通ひて心地よき化粧室へ、祖母樣の御ぐし取りあげ參らせんと鏡臺によれば、はや今日を粧ひし妹がかざしのこりか、まだ露をふくみし撫子の花一輪、鏡のかげにこぼれて。

なまめかし

〇嬉しい　南葛飾　紫栞子

美容散や隆鼻器や色白新劑やローヤル水井筒油やばらはみがきなどを用ひて頭から足の先迄美しい人となつて、女子文壇や同文集によつて、練た歌文を、習字速成法にて上達した筆蹟で書いたなら如何にうれしいでありませう。

女子の虚榮心、依賴心を遠慮なく暴露す・妙

〇希望　上毛　大沼秦女子

蕨が美味しいと言ふお人、茸が美味しいといふお人、青葉若葉が懐かしいと言ふお人、白雪が美くしいといふお人。――同じ山國の者でも、希望は樣ざまですが、東京へ出て見た

いと言ふのは、若い人たち一般の希望です――。

埋れるもの。飛出すもの

○豊年の前兆？

長野市　胡蝶子

長野の丁度東にあたる處に、須賀平と云ふ大部分原の高い〳〵山が御座います。此山へ五月雪の消へる頃、左文字で十一と表れた年は豊年だと申し傳へて居ります、今年もそれはほんとに明瞭と表れました。

何の作用か

○小空中船

府下　中島縫子

氣持ちのよい青嵐が、サアッと吹くと、路傍に老いたる蒲公英の白髪坊主が一時に亂れて、空中高く舞ひ揚つて行く。春の女神はこの小空中船に乘つて、天上界に去り給ふのであるまいかと思ひました。

行方も知れず

○埋めし蝶

福井縣　片山千里

「又澤山に蝶が出ましたから：：」とふれて來ましたので家にも昨夜門へランプをともして置きましたのですが、朝見ましたら白い少さな蝶が何百つて死んで居りました、妾はどうしても是が彼の恐ろしい螟虫の親だとは思へませんので、可愛そうにと思つて庭の赤椿の下へ埋めてやりました。

稍、他と趣を異にしたる胡蝶の墓

○琵琶うた

佐世保市　佐々城よしゑ子

されば彈正の大弼仲國は御寮の駿馬に跨りつやがて：：風がそよ〳〵と通ふお椽で筑前琵琶の小督をひきながら聲はり上げて歌つて居りますとお庭の方からカチャリ〳〵と帯劍の音ハッと思つてやめると簾をまくり上げて兄樣の外に三つ許り顔がニヨツキリ。オヤ仲國は行止りしたの？

小督の宿と思ひしに

○傘

大阪市　佐輪無羅

祖母樣の傘は黒で温しい、母樣のは鼠色で高尚姉樣のは紫でハイカラ私のは白で潔白大きい妹は桃色小さい妹は紅でどつちも可愛いらしい、毎年夏はこの六つの傘が須磨の濱邊を朝夕さまよふて居ります。

曉傘、夕暮傘、時雨傘、春雨傘、

○蠶

群馬縣　田中茂登子

私の家では、毎年蠶を少しづゝします、今年は五月三日に出て六月十三日に上りました其の中で雨天の續いた時が一番困ります、種々の骨折をしてまぶしにうつし四五日の後まぶしを下して繭かきをします其の時の嬉しさ喜こばしさは一通りではありません。

○薔薇　伊勢　操子

私の花園の薔薇が三十四色程美しく咲きました、花の中では一番愛らしくて香も大變よう御座い升、只惜しい事には實を結びません遠き都の親しい友と美しき花を共に愛する事が出來ません之が何より殘念です。

○待つ樂　徳島縣　紫濃子

私は本年初めて、岡山縣長船農事試驗場から、諸種の草花の種二十種送つて貰つて、四月三日に各々區切して名札立てゝ蒔きました。此節從の葉の様なのや、針の様な葉や、丸い二つ葉や白い毛の生えた等十二種芽生えました。あゝ如何な草になつて如何な花が咲くでせう。

○性質　備中　花東女

私は少し時代遲れの性質でいけませぬ、今の皆様の様なイヤ……テニスだのブランコだの何の何と走り廻るよりか家の掃除を隅々まで綺麗にし取かたづけお庭に塵一つも無い様に除け水をまいて夫れから好きな本を讀むのが大好き。

○蚤　伊賀　關本梁子

『蚤の多い晩ね』と姉さんが云ふ、『さいぜんから三つ取つた』と妾が答える『ねられないね』と又姉さんが云ふ、一い二う三い……十二時が鳴る雨の氣でもあるような蒸し熱い晩だ。夜汽車の笛がピー……もう一時に間もない。

○豐美子様　常陸　酒葉貞子

本誌で御交際下すつたお方の内で一番信じて居りますのは本島とよみ子様でありますとよみ子様は三年の間未だ一日の様に親しく御文通して下さいます、只今は江副様と申すお方へおこしなされまして長崎においでになります、妾は毎日西の空を仰いで若いお二方の幸多かれと祈つて居るのであります。

○海の夕　靜江

西の空を、美しう染めた雲の彩もうすれ果てゝ、一面に立ちこめた霧に、只ひた〳〵と水のけはひがするばかり。品川燈臺の赤い光がうつすりと見えて、あたりは音も無く夢の様、とゆるくゆるく極めてかすかに、艪の響がする、歌の聲が聞える、舟は靜かな波の上をすべる様に北へ北へ。

○繭　茨城縣　石川豐野

父と母は蠶扱ひ妾と妹は桑摘みと役割をきめて飼ふた蠶も一生懸命に働いた功があつて眞白な繭が澤山出來ました父は上物だけを賣りてあとの下物は妾と妹にくださるといひますから妾は妹と相談して生糸にひいて二人の羽織を織ることにきめました

○野すみれ　藤井かよ子

時として虚榮心がむか〳〵と出來ますと、いつも質朴な野すみれを心中で畫書きます、飾らなくても天哀れみて下し給ひし色もゆかしき紫の美はしき姿、つゝましげに頭たれたる此優しさ花よ、永久に咲け。

○首夏　麹町　靜江

今朝はやう〳〵雨も晴れたのでまづ庭へ下りて見ると昨日まで春の花を厭た風も今は却て心地よげにそよ〳〵と、木々の梢をゆるぐ毎に緑の露をはら〳〵と落して其清らかなこと、

○螢　越後　原つねを

何が恥しいものやら、終日草葉の中に隱れてはゐるものゝ、黄昏になると、切なる胸の思ひに堪えかねてか、身を焦がして飛んで出る。出ると直ぐ人に見付かつて、撲落されて捕へられて籠の中に封込められて了ふ。あゝなんてまア、不憫な虫でせう!!!

○田草取　秋田縣　園女

炎天燒くが如き夏の日に、田草取する程難儀な事はない日除と組んだ饅頭笠も何の功なく、おまけに水迄沸いて、下からも蒸される様な暑さ

に人並ない身は猶更甚く、汗は出るやら、眩暈はするやら苦な紛れに唄ふ人々の唄も私の耳には入りません。

○粒々辛苦

熊本縣　池邊しづ子

今日は我家の田植てす、母様一人留守居をして貰つて皆行きました。夕方までかゝつて漸ふ植ゑてしまひました私等は今こうして植ゑておきますれば秋風がたつ時分には立派な美しいお米となつてお蔵に入るのてす。

○夜會草

阿波　久米雪子

夕月に露を浴びた一鉢の夜會草は、直徑七八寸もあらうと思はれる純白雪さへも欺く十幾輪が遅からず速からず、言ひ合はした様に花揺れも涼々しく開く、其刹那、自分は恍惚として身の夏にあるを忘れました。

○呆然！

石見　八杉都志子

何うした勢かラケットは空を打つた味方は七分の敗になつてゐるのに……と氣が氣てなく、狼狽て球を追ふて後の草原に駈け込み、いきなり拾はうと手を伸ばした刹那！蛇々と小蛇が一匹、あれッと飛び退く、きやッきやッと笑聲が起る、妾は呆然！

○海の景色

山口縣　深山鶯

私は此間萩の叔母の家へ行きましたので、或る日濱に出て海の景色を眺めました、眞青な色をした廣い海面の其所此處に散在して居る小舟、遥か向ふの島の景色などを見て居ました、氣も清々して胸の内が廣くなつた様な感じがして、何とも云へぬ楽しさを覺えました。

○一と日

芝　しら萩

高くひくゝ舞つて居た蝶が今お庭のばらに。ぬき足さし足漸く來て見ますときれいなそして珍らしい蝶、標本にとそつと捕へましたが、さて針をさす勇氣がありません思はず手をゆるめましたハツと思つて見ますといつしかもとのお庭てヒラ〳〵〳〵。

○笛の音

兵庫　汀女

宵毎の夢かと斗りハーモニカの音が毎夜聞へますので、笛の主は誰かと或夜ソと隣間よりのぞいて見ると、金縁眼鏡にステツキ持つてハイカラ氣取つた西洋按摩てありました。

○さみだれの夕

鹿兒島市　山下敏枝

神代杉の奥にお宮の灯が見へ初めて笙瑟の音と太鼓の響とが神代の様に鳴り出し、糸の様な細い黒ずんだ雨が降つて來ました、杉の梢の間から飛び上つた白羽の鳩は忽ち見へぬやうになつて後はたゞホーホーと鳩の聲が幽かに聞へました。

○村の名物

富山縣　長瀨白峯

我が村で名高いものは村端の菖蒲と、お寺の銀杏の樹と、小學校と、日露の紀念碑と、今年騎兵に入營る正雄さんのハイカラなと、興平さんの田植唄のお上手と、お隣りの芳枝さんの美しいのは一番評判である。

○信濃の初夏

長野縣　内山けさ代

花はもう散つて、鳥も今は青葉に楽しく鳴いて居る。流れ清き千曲一帶の平地には、野夫の麥苅や、田植の仕度に餘念なく、女は蠶飼の業に心忙しく、共に、寒暖同じからざる此土に活動して、朝な夕なたのしくうれしく暮らすのです。

○爪に白點

福島　野の花

私の方では爪に白點が出ると、必とお願ひしなくとも着物を拵へて貰へるのてす、二つ出ると二枚三つ出ると三枚てす、之は決してはづれたことはありません、私は今二つ出てゐますので今からどんなのだらうと待つてます。

○誌友會

紀伊　室井白葬

此度私達『誌友會』を組織しました。會費月五錢、折にふれ時に臨て茶話會を開き諸文藝の互選を行ひ其選に入たのを各自の名て女子文壇へ投稿し更に御批判を仰ぐといふのてす郵税は無論會から支拂ふ代り萬が一登賞の光榮を荷ふ者がありましたら其二分の一の價を會の基本金にする約束てムいます。

○やゑ子様へ

大坂市　梅本龍子

懐かしい八重子様よ、妾はもう、もうあなたを友ぞと呼ぶことが出來なくなりました今宵かぎり、處女てふ美しい衣を燒かれて、樂しい若き日は永久に過去つてしまふのてす灯の街を駒に曳れてゆく妾の姿はどんなに寂しいてしやう。

○兄の務め

和歌山　本多政子

兄さんは毎日銀行へ務めに出て居ります。私は毎日朝早く起きて、辨當をこしらえるのてす、その起る時のれむたいことといつたら、百のお金にも、替へることが出來ません。

○螢

伊豫　高橋姫百合

水音がさら／＼と聞ゆる許り今にも落ちそうな雨催ひの暗黒な夜本街道を右に折れて春土雞探に來た川辺へ出て見ると、まあ何に例へ様火事の火の粉か流星の群か上下左右に飛び違ひ水に浮び流れに映る火の光の麗はしさ。



野莨行き

愛知縣　加藤傳子

之れを持て御出と出して下すつたのは大きな風呂敷……。

○我なげき

三重縣　越村ふみゑ

六度迄も沒書に成ながら、其ても今度こそはとはりこんて出した彼短文きつと載てゐるに違ひない、天だらうか地だらうかよもや人とは下るまいと、待て居た甲斐もなく天は愚か地は愚か秀逸にさへ我名の見えないとは、思はず失望の涙に沈みました。

○どうしようか

群馬縣　須藤みどり子

あゝ世に貧程辛いものはない、父や母がどうしても嫁けと云ふのをいやだとは云へないし、と云つて妾がいけば可愛い妹に好きな學校を中途て止させて家の手助をさせればならないし、家が有福ならば下女を雇ふ事も出來ように、可愛い妹を……あゝ妾どうしようか。

○海龜の卵

土佐　みえ子

私のすんてゐますすぐ向ふの磯へ毎年六月頃に海龜が卵生みにあがります、近所の漁夫の話によればその卵の孵化する頃には、波がそこまで來て澤山の子龜はその波によつて沖へ沖へと泳いて行くさうてす、もし高い所へ卵を生みますと大層恐れるのてあります。

○遠足

芝　多美子

明日は私の學校の遠足てす所は大宮私は宵の内から忘れ物のない樣何もかも取り揃へあゝまだ忘れ物がある母樣蕨を取て來ますから惡いハンカチーフなど云へば傍にゐらしやつた兄樣サア

○結城紬

下野　磯　みい

私のような賤の女が、こんなあばらやにこうして毎日々々つぎのあたつた衣服を着てつむいだこの糸も、結城紬となつて世に出てゝは多くのお穰様や、奥様方にどんなに可愛がらるゝ事でございませう、思へばほんに私はこの糸がうらやましい。

○汀

大阪　松田しづゑ

ぶら〳〵濱を歩いてゐますと、一寸程の少さな蟹が一疋汀を横に這ふてゐます、妾ははつと思ふて素早く其を捕へましたが、ぶつ〳〵泡をふきます故可愛そうですから又靜に放してやりました、すると蟹はうれしそうに石の下へ這ふてかくれました。

○私の心

宮城縣　菊地葉子

私は小說を讀むと小說家になりたく、繪畫を見ると畫家になりたい、詩人になりたいと思ふときは机上にハイネの詩集がのつてゐる、音樂家になりたいと思ふときは演奏會のかへり途である。

○時鳥

靜岡市　良江子

文にも歌にも能く書いてありますが、ほんとの時鳥を聞いたのは始めてゞす、其れは降りしきる五月雨の或る宵てした、机に向つて本讀てゐますと、それ、血を吐く様な音一聲、二聲、ばかり啼いて、何處かへ行てしまひました。

短文

○我が身

盛岡　中村政子

女學校へ入學して、優等で卒業して、早く姉様のやうになりたいと思つたのは、あゝそれはそれは一時の夢てした、悲しや、小學校さへ卒業する事が出來なかつたのですもの。

○うれしき便り

大阪　蘆花

先頃からかりそめの病てこの濱寺へ出養生の私ふん側の柱にもたれて思ひは今日も都の空折から郵便と配夫の聲、受取て見るとなつかしい周子さんからの御手紙と兄様のと二通私は病を忘れて嬉しく封を切りました。

○寫眞

しら萩

卒業のお祝にとてうつした寫眞いま出來て來ました、小紋のきものにしゆちんの帶をおたてやに結んて、例のとほりに大きな目、そして少し胸を出して首を右に一寸かたげた様子、何だかハイカラにとれました、あゝまた兄様にからかはれるたれが出來ましたこと。

○夏草

德島縣　中村勝子

私の宅には今夏草が澤山咲いて居ます。それが面白いのですよ、朝露を含んてる時はこれ見よといふやうに邊の枯草に、其美しい色を誇つて居ますがれえ、夕方になつて萎れた様つたら、ほんとにみじめなものですよ。

○夏の晨

三河　藤野ふさ子

凉しい朝風に床しい青葉の香りは朝霧の中から流れて來る、萬頃の稻田露一面に滿ちて、土に生氣あり、草木に生氣あり、希望の光四邊に充ちて人亦活氣に滿ちて居る、人生の朝も亦正にかゝる境なのでせうか。

○桃の實

常陸　初澤さく子

繼母様と塑たる感情の行違ひて家出なすつてからもう三年、未だに漂浪生活に甘んじてゐなさる兄様が、中學卒業の紀念だと申してお植ゑになつた桃の木、今年は花が澤山咲きましたけれど實は漸く五つしか結びません、私は毎朝日増に色づくのを喜んて兄様に贈らうと虫を拾つて居ります

新歌謠

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謠と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



四等

○泥に一月日に一二尺やつと織り出す大島紬　　大阪　とき

自註　大島紬は田の中へ一月も二月もつけたり干したりして泥染にし絣におろのは日に二尺は織れない程難しいのださうです
鑑賞なるものは修養あり

五等

○妾しや毎朝草刈りながら歌を二首づゝ作ります
手と、あたまと　　若狹國遠敷郡小濱住吉區　早水園玉

○土地で流行るは櫻貝千鳥淋しさしたやお祭りに　　四多摩　森田なか子

○水は流れる月日は走る私しや年あゆく嫁になる　　秋田縣　佐々木千代子

○姉は東髮妹は島田どちらむいても繪の樣な　　尾張　櫻井みれ子

○お花咲く／＼蝶々がまふよ私もまひたい春の野邊　　上毛　元子

○魚が深山の森桜にあそぶ春の湖水にさかさ富士　　信濃　花桂利子

○瑠璃の御船に雛樣入れて囃したきたい春の宵　　神戸市　加藤むらさき

○人でにぎあう祇園の櫻都おどりは花で持つ　　京都市　武部柳葉女

○色も香も優れた薔薇は惜しいことにはとげがある　　盛岡市　四戸節子

○船は遠のく磯はとざす振つて分けたいハンカチフ　　千葉縣　松ヶ枝濱江

○北海名物鮭鱒鰊に鮮りんごと雪である　　札幌　宮增喜代久子

○お味噌するとてすり鉢わつた女學生あがりの新夫人　　播磨　佐久間ゆかり

○高い青空黄色い野邊の中を夫婦の白い蝶　　橫濱　みどり子

○昨日もふらたとなりの嫁はほんに平和な田舎顏　　徳島縣　西野花蕊

○都戀しと云ふたは去年今も田舎に苦勞する　　越後　乙川ふじの

○金波銀波の其間より生れ出てたよ濱千鳥　　紀伊　木下はる子

○朧月夜に謠曲の聲が次第々々に遠くなる　　舞鶴　邦子

○あけて見ようか此の玉手箱何がでるやら波の音　　栃木縣　奈津子

若狹　田中貞子

○
谷ま〳〵に鶯啼いて春な來よ〳〵誘ひだす　伊勢　谷川柳女

○
蝶よこい〳〵お庭の花も早く來ないと散つて行く　尾張　秋波子

○
聞いてたもれよ戀物語り蝶の身ならぬ花の身の　上毛　納尾子

○
今年はたちて肩上げおろしゆくよ我手は膝の上　韓國　原登里子

○
眞んにうれしや昨夜の夢で死んだお母さんにまた逢ふた　上毛　飯塚登里子

○
花を眺んで雪ふるけれど花は默つてゐるばかり　若狹　津田汐汀

○
緋桃白櫻咲く君が里唄に合して筬の音　筑前　椎野さつ子

○
花の盛りに春雨降つて男蝶女蝶が舞ひ戻る　大分　早乙女子

○
雨の降る日は簑笠姿泥田仕事も厭やせぬ　府下　森田しま子

○
神のましますみ空を廻り降つた雨かよ田植ゑ水　土佐　高橋白ばら

○
かむり檜扇斜に曲げて美酒にゑひしか内裏雛　福岡縣　青葉女史

○
おぼろ月夜に惑田土手行けば笹の葉蔭にほたる飛ぶ　赤坂　成田坦

○
咲いた櫻に罪ないものを雪と雨とて責めまする　信濃　駒澤みつ女

○
花香交りのそよ〳〵風に吹かれ畑打つ新夫婦　佐賀縣　ひばり女

○
田舍娘と馬鹿にはするな中にや美人も居るものを　岐阜市　篠田とみ子

○
お指痛たけりや田の草とるに貸して上げよう擘爪を

○
前の堤の櫻も咲いた村の祭りは明後日　宮城縣　菊池露子

○
桃の御庭に群れたる鳩の胸毛そよがす春の風　金澤市　茄子野しげ

○
すみれつみつゝ兒を守る子供袴すがたの女學生　長岡市　土田りた

○
蝶よ花よと育てた娘嫁入さすとはなさけない　大和　我澤素枝

○
少女なぜ摘む菫の花を可愛い蝶々が迷ひ出す　下總　三森ゆき

○
佐保と立田の涙の雨か田植時にはしと〳〵と　牛久沼　橋本けい子

○
五十あまりのとんねる越えて私しやゆくぞえ桃の里　信濃　唐澤喜惠

○
攝津伊丹はお酒の名所川の流が酒になる　大阪市　松田しづえ

○
海老茶の袴にホワイトリボン胸も美人の亂れ髮　吳市　百合野白梅

○
もはや三十に手さしやとゞく若くなりたや五六年　山口縣　深山雪

○
野には菜の花山にはさくら川の向ひは青柳　伊豫　井上いち子

○
何んぼ沒書にせられたとても妾しや記者樣うらみやせぬ　尾張　鈴木詠子

○
櫻眺めて梅の香かいで雪をみてゆく汽車のまど　陸前　あき

○
生れかはるなら浦島太郎龜の背にのり龍宮へ　仙臺市　齋藤はるき

○
姉はお嫁に弟は東京にわたし獨は里にゐる　千葉縣　飯塚みどり子

○
北の姉樣寒さを知らす妾しや南の妹に　羽前　鈴木杉葉女

滑稽談

選者　編輯局



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は乙種。

四等

○つまり賄賂　　沼津　八代美代子

昨日生命保險會社の方が代理店を賴み度いとかて來訪された時私がお茶を出しに行きましたら丁度其方が大きなカステーラの箱を父の前に出して、之は賄賂ても何ても有りませんて、私の手札の代り、と云つてました、私は、ア丶つまりこう云ふのが賄賂だナと思ひ乍ら退りました。

五等

○手　蹟　　岐阜縣惠那郡長島町久須見　山口　鈴子

「ヨージアリスグキタレ」と云ふ電報の來た時、兄さんから來たのか姉さんから來たのか一向知れぬので困つて居ましたらお隣の源さん、「兄さんか姉さんか手蹟を見れば知れるてしよう」と敎へてくれました。

○牛　肉　　無　名　子

私、先日歸省した時お土産に牛肉を買て參りましたらそばに居た四つの妹が姉さん牛肉にはちつとも骨が無いのネー。

○土　龍　　廣島縣　上田まさ子

或日茄子苗を土龍が掻きかへしたと嘆いてをると隣りの爺さんが來て顏を歪め「一體土龍ちゆうもんは三韓征伐の時、働不用の百姓實ぢやと醉人が上つたのを持ち歸つて日本中へ配つたんてこいすけな」と眞面目な面付。

○引き立て丶　　岐阜　白　ば　ら

友「檜垣さん、貸據は何故あんな醜い松本さんなどと御一所にお歩きになるのですか、貸據引き立て丶お美しう見せるお積りなの？

檜垣「それなら貸據と一所に歩きますわ」。

○ハクライと和製　　淀橋　津田たか子

婦人「あのランプのホヤを下さい」

小僧「ハイ」と云つて英文字の書いてあるのを出した。

婦人「いくらです」

小僧「これはハクライてすからたかいてすよ十錢てす」

婦人「でもこ丶にタヤベン大阪と書いてあつてよ」

小僧「ぢやこれやハクライの和製なんだ」。

○暑中見舞　　大阪市　宮本　清子

臺灣の妹より千島なる姉の許への見舞狀。

「酷暑の候如何御暮し遊ばされ候や伺ひ上げ候」

○學校ぎらい　　若狹　田中　貞子

子「お母さん日曜は何日てすか

母「明後日なのよ

子「それてはわたしはれ明日にします

○夏蜜柑　　越後　原　つねを

姉「妾未だ今年の夏蜜柑の味を知らないわ。」

妹「アノ、矢つぱし酢くつてよ。」

○そう早く〵は續きません　　相摸　濱田　結子

或時母は光子さんの寢坊にあきれて母「光子やお前は夜早くから寢て居るくせになぜ早く起きないのですか」と聞きました、光子さんは目をこすりながら「でもそう早く〵は續きません」と答へました。

○澄した顔　　山城　山田　幸子

茶屋の主人「マア一服しなさいよ」田舎者「イヤ己らは煙草飲みましねエだよ、

編輯餘談

▲何と云ひましても、原稿は文字の綺麗なのが徳です、一寸見た處でも、文字の綺麗に、行數字數もキチンと規定通りになつてゐるのは、何となく內容が甘さうに見えます、反之、疎雜な文字で粗畧に書いてあるものは、面白さうなと思つて一寸讀みかけても、讀み苦いために、遂途中で厭やになつて了ひます。

▲と云つて、諸孃に今から、改めて習字をお習ひなさいとは申しません、たゞ諸孃の書き得らるゝ範圍內で、よく規定を守つて、可成丁寧に書いて戴きたいのです、原稿紙の罫から、字の端々の辷り出てゐるのは、丁度人間が寢そべつてゐるやうなもので、餘り見端がよくありません。

▲種々の原稿を纏めて投書されるのに、なかには規定に背いて、俳句など、一人で二十句も三十句も投書する方があります、さういふ方に限つて、一人で二十人にも三十人にもなつて、種々に名前を變へて來るのですが、こちらではよく分りますのです。

▲さうして、其原稿を皆揃へてから、一つに折つて封筒に入れて下されば宜いのに、御丁寧に一枚宛整然と別々に折つてありますので、原稿を區分する上に、非常に手數が懸ります、丁寧なのは何處までも宜しいが、『過ぎたるは猶及ばざるが如し』で、餘り丁寧過ぎると、却て困ることがあります、程度問題です。

▲序に今少しお小言を申して見ましやうか、文字の誤りの多いのに驚きます、殊に木扁と手扁、シにン、などの間違ひの多いのは、强ち文字を知らぬからではなく、多くは不注意の點からでしやうと思ひます、少し注意さへすれば、斯樣な間違ひは、字義の上から推測しても、直ぐ分ります。

▲送り假名の誤り、振り假名の間違ひも隨分あります、是等は文典を少しお調べになれば、容易に直すことが出來ましやう、假名遣ひは現今一つの問題となつて、當局者も迷つてゐることですから、諸孃の迷はれるのに無理はありませんが、輿論が定まるまでは、矢張り從來用ひ來つたものに依る外ありますまい。

▲方言……お國訛り……の濫用、と云ふよりも、諸孃の多くは、無意識に書かれることだらうとは思ひますが、例令ば『さうです』を『さうでし』とか云ふやうに、すをしに、えをいに、ちをつなどに誤る例は、いくらも見付けます、是等はたゞ讀み惡いばかりでな

く、場合によつて、意味の採れないことがあります。
▲方言も地方的特色を現はすとか、其他何か特殊の場合には、用ひて非常に興味を増すのみでなく、是非方言でなくてはならぬ場合もありますが、普通の文章には大々的禁物です。
▲自分の作つた文章に、圏點を附けて來る方がありま す、之は圏點の意味が解らぬからでしやうと思ひます、自分の作物を他人に見て貰ひますのに、此處が妙だらうとか、此處が要點であるとか、しるしを附けて出すのは、失禮に當る譯ではありますまいか。
▲誌友倶樂部に、原稿を何う書いたと云ふことをしるさずに、單に原稿の書き方は之で宜しいか、と質問される方がありますが、諸孃の方では皆同封にして投書されるのですから、之で宜しいかで解る筈でありますが、誌友倶樂部の原稿が擔任記者の手に渡ります時には、原稿が既にそれ〴〵別になつてをりますから、單に『之でよろしいか』何うかをしらべるのに、大變手數がかゝります。
▲以上は、重に投書其ものに就いての事柄でありますが、其他にも可笑いことが澤山あります、例之は原稿に手紙を添へて、此作は自分が苦心して作つたものであるから、屹度何號に出すやうに、決して沒書にしては不可ぬ、と、殆ど脅迫的に言つて來られる方があります。
▲女名前で、女文字で、文章も女らしく、初めの程は優かに書いてありますが、何時の間にか興が添ふに從つて、文字も亂雜になり、文章も粗略になつて、終ひには、僕が〳〵と言ひ出す方もあります、妹さんが知らぬ間に兄さんに成つてるのなどは、隨分滑稽です。
▲住所を認めるのに、縣名か國名を記さずに、郡名から書き出される方があります、書かれる御當人にはよくお分りでしやうから、分らぬと云ふ記者が可笑く思はれるかも知れませんが、こちらでは實際一寸狼狽へます。
▲立派な繪葉書などに、暑いうち避暑に來いとか、或は避寒に來いとか、私の鄕里は風光明媚の地であるから、ちと詩腸を肥しに來るやうにとか、いろ〳〵御親切にお誘ひ下さるお方も、澤山御座いますが、肝腎の住所の明記して無いのには、御挨拶の致しやうもありません。





東京（課題）

三等 ○始めて上京

秩父 登久子

私が始めて東京を見たのは十五歳の春でした。上野停車場を出て先づ驚いたのは學生の多い事と人々の服裝の餘りにはでな事。若い夫婦連が人前も憚らず寄添つて笑ひ興じて行く樣などは田舍者の夢にも見られない事だと思ひました。それから車で途中同じ樣な道の澤山あるのに驚きながら本郷の知人家を訪ふて亦驚いたのは家のせまい事です。これからしばらく此家の世話にと思つたら急に心細く故鄕の家の十疊敷が戀しくなりました。

四等 ○三都

正直に見たる東京

攝津 須賀子

東京と云へばすぐ、日あたりの好い明るい所に思はれ、京都は閑靜で涼しい樣に思ひ、大阪は陰氣で暗くて日光を見ない所の樣に思ふ、此の私の想像は元より何の意味もないんですがどうもこう思はれてならない、そして東京へ行けばお顔の色が黒くなり、京都は白くなつて大阪は青くなると思つて居ます、けれど私は上方の風俗はいやで東京のはつきりした言語やあかぬけのした風俗が好きです四五年都へ出てすつかり江戸ッ子になつて歸つて來てお祖母樣を驚かしてやりたいと私は始終こんな事を想像して居るのでございます。

五等 ○いやな東京

能く比較したる東京

松山市三番丁 まさよ

埃の東京、泥んこの東京、砂利の東京、風の東京、惡疫の東京、金の東京、輕佻な東京、淫靡な東京、油斷のならぬ東京、御世辭の東京、阪だらけの東京、溝の東京、魚の不味い東京、腐りかゝつた菓物の東京、オヽいやな事いやなこと。

あらさがしの東京

○盛んなこと三つ

日本橋 松岡千代子

東京において先づ盛んな事の三つをお話し致し升と第一に人々の姿のおごり衣服は云ふに及ばず頭から足もと迄美しき流行品を付る事月毎年毎に樣々の物にかゝる中以上の方々は上等品を下等の人は之のまがひ物なと云ふ有樣です第二は男女の學生の多い事家外へ五分も居ると十人ぐらい通られる實に學藝の進歩が思ひはかられる第三は第二の人々が第一の有樣に染みて人氣

のいまはしいみだれてありませう。

○後悔　大阪　川見風致子

私の初めて東京へ行きたいと思ふたのは今から二三年前のことて學校は落第して御友達に顏の合せようがないしとそれにまた雜誌口繪には姿の好いのを見るにつけ女心の淺薄な考にて早く行きたい行きたいと兩親の御言葉をも反みず花の都に參り都下の一女學生となりましてから丁度二ヶ月目にいろ〳〵考へましたが如何しても故鄕は忘れられません東京學生の形ばかりの學問や衞生上精神上に付てあゝ早く懷かしい故鄕へと今更後悔しても。

○東京の春　鎌倉　糸月

丸い御顏の糸子さんは、艶やかな優しい女らしい春に遇ふ爲めに京都に遊びたいと申しました。愁顏の蘭子さんは奈良へ行つて、しぶい質素な春を味つて見たいと仰せられましたが私は、此の花々しい活動的な一日々々に進步する東京に止まつて飽くまで華やかな春の空氣にふれて見たいと申しました。

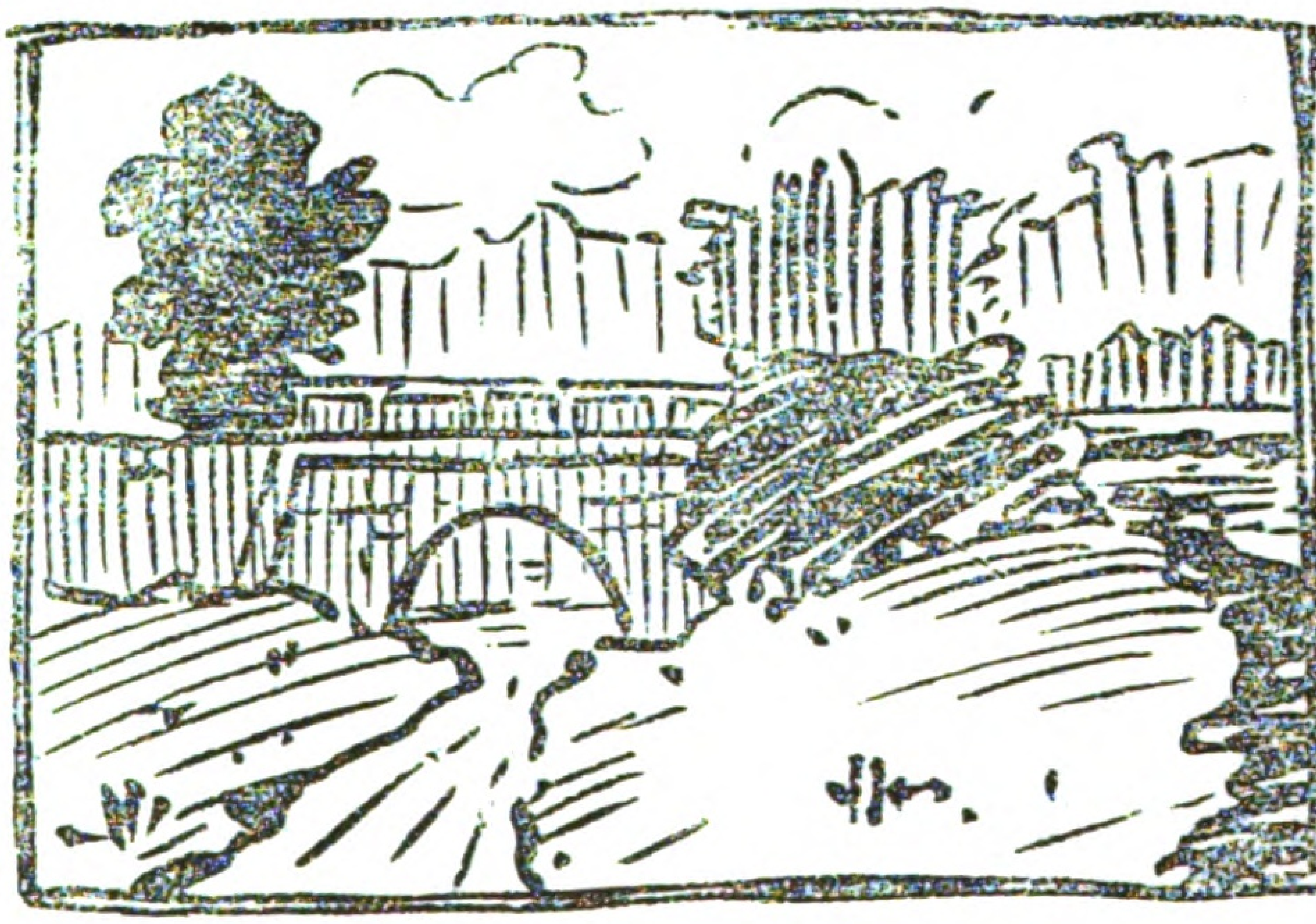
○東京の未來　苔の雫

東京が暫くしたら高架鐵道が頭の上をゴーゴーとひびき須田町邊の「くも」の巢の樣な電信電話線は皆地下線となり地下にも道が出來て銀座邊は內幸町や日比谷町邊の樣な立派な建物が並び外人向のホテルも十分に帝國座も落成し今迄の砂ほこりがせぬように道は敷石て町は品川邊と一處になつて靈間「なわい」層の影等は見えぬようになるだらう、其れにひきかへ「すり」と墮落生は多くなり流行の的となつて美を競ふことはペリーにもおとらぬ樣になるだらうと思ひます。

○自炊生活　佐世保　森口操子

牛込の叔父の家に同居して、學校に通つてまし

橋　無名子



た時は、若い叔母と二人て、掃除と、賄とを、一日おきに、受持ました、掃除部の方には、來客の應接もふくまれて居りますから、是も容易てありませんし、賄部の方ても、三度の御かずの買物をはじめ、すべての炊爨を受持つので御坐い升、初の內は、八百屋に行くにも、魚屋にゆくにも、極りが惡う御坐いましたが、後には、大きな大根を、うち振て歸る樣になりましたので、習慣は、かうも遊ふものかと、思ひました。

○あゝ夢　近江　朝みどう

私は只今東京見物に來ました東京市は普通の市の十五六倍もありまして中央に九重の宮城があります隅田川には五つの大橋を架けて本所深川の兩區に通じ景色のよい川てす上野芝淺草日比谷などの公園に遊び戰死者を祀れる靖國神社へも參詣致しました其他名所古蹟をたづね誠に愉快てございます空には無數の電線をはり夜は田舍ては見られない電氣燈て目がまばゆいと思ひましたら夢。

○祖母樣がをるから　茨城縣　中島いろ子

一度目には大そう立派なにぎやかな處と思ひ、二度目に參りました節には五人といふ惡者が珠數つなぎになつて行くのを見て嫌惡の情に堪へませぬてした。三度目には立枯の木の多いのを見て自然に遠い樣に感じました。あゝ工場の煙突より絕えず吐出される濛々たる恐しい黑煙はどれ程人の身を害ふことてせう。只祖母樣が居るから折々東京へ參ります。

○二十年前の東京　長岡市　中山いつ

十幾年目て珍らしくも北海道の伯父樣が長岡へお出になつた。私の宅へ被入るとすぐ「棗い長

罔が賑かになりましたね」すると父樣が「ハア二十年前の東京です」と。私は此談話を聞いて思はず叫びました。あゝ父樣のお話が事實なら此間まで田舍だ／＼と東京人に云はれて居た長岡も二十年後はあの東京人の鼻を折らす事が出來やうか。おゝそうかも知れない今だつて通行人は左側を通る事になつたし電氣燈もある電話も通じて居るもの。

◎馬鹿も利口も　　磐城　片野よし子

末の妹の六つになる君ちやんが。近頃誰に敎はつたのか。何か人にからかはれるとすぐ「ソンナ馬鹿東京にもないわッ……」て。兎に角東京とは利口も馬鹿も澤山集まつて賑かな廣い／＼處だと云ふ事は君ちやんも思つて居るらしい。妾とてもそう、この位なの、……てすからそれが又どんなによい處だらう、一度行つて見たいな、……などゝ深く考へた事もないのです。道さんや貞さんがあんな生意氣なハイカラになつて只歸つて來たのを見ると、却てゝやな處だと思ふの。然し又中には橋本の義さんのように、立派なえらい人になつて、來る方もあるのだから。

◎東京の風　　磐城　織内文子

妾は東京の各女學校卒業の諸姉樣達の、お寫眞を見たりお話を聞たりすると、身の毛も慄とする程姉ましく思ふのです、こんな片田舍に小い時から、野良仕事をせずとも悠々暮さるゝ家に生れ乍ら嗯何と云ふ不幸なのだらう。今更いふ迄もあるまいが、東京に出て修業して見たい、東京の風に吹かれて見たいと、寢ても覺めても妾は此事許り。

卓上談話（課題）

◎わが母　　日向　福山みね子

私の御母樣は紀伊國和歌山の人てすが父上が當地の人て御坐いますから皆一緒に歸られましたが御母樣の一番困りなさつたことは言葉てす一ヶ月二ヶ月の間は少しも通じませんのていつも私が通辨致して居りました薩摩英語てすから中中むつかしいてす半年ばかり立ましたら大分通じる樣になられましたが國の言葉が少もなほりません其くせに當地の言葉をまれをなさいます其をかしき事と申ましたら實に腹をかゝへて笑ひます其音聲の高低や調子のそろはなひ事如何に敎へ申ても一向うまく出來ません そんなに六ヶ敷物かと思ひます。

◎わが母　　豐後　安部富士子

物事に嚴格な祖母樣から育てられた上に女大學女今川等空讀みする位の母樣てすもの とてもとても寄宿舍飛出しの私などやりきれなくてよ而し人一倍の勝氣な性質は寛大な御父樣を助けて三回の火災と度々の水害の爲に酒造場も本宅も無一物となつたのをまあどうやらして今日を心よく暮すやうになしたのは御父樣の御力とはいふものの一は母樣の内助が大變功をなしたのだと一層尊敬の念が起るのよ、おほゝゝ大變の母樣自慢だ事ネー。

◎わが母　　丹後　阪井峰子

妾の母は、淨瑠璃が大層御上手てす。中ても千代萩の御殿場正岡咲の談が、一番お上手てす。優しいすきとほる樣な御聲。どうしてあんなよいお聲が出るんてしよう。それは母が十七八て、師に就いて習ておゐての時、毎夜人の寢靜まつてから、宅より三丁離れ居る瀧の所に行きて、落水の音にあはして、お聲の練習をなさつたそうてす。亦夏の夜など二階の戸を開き、月下の椽に立ちて、練習をして居ては、度々巡査に注意を受け亦幾度も喉より出血なさつたそうてす。月の夜、三味の音が淸き聲と流れてくる、母てす。然し弱身て……。

◎繪葉書談　　越後　眞柄廣子

お友達から、頂きました繪葉書。繪の所に字の書いて有りませんのは、一番けつこう。少し位書いて有りましても、かまひません。小さい屛風をこしらえて。其繪葉書を、配置よく、はりましたら、どんなに美くしうムいませう。私は是非、こしらつて見たいと思ひまして、大切に、仕舞つて置きます。

◎わが見たる男子　　沼津　三枝子

子供好の方が先生肌落付た靜な方が學者肌からだのきり／＼とした辯才のある方が會社員肌頭のかるい顔面に油斷のない口才な者が商人肌勇氣活潑の方は軍人黑くも薄くゝおひげ計り氣になさる大平の方は高下通じて官員樣そこで私の好きな田園生活の御方は落付た勇氣の有る活潑で子供の好きな趣味の深い優しい方ではなからうかと考へます色で區別すると一が赤二が白三が紫四が遠茶五が時色六が青茶七は淸い氣高い水色。

學校生活

四等 ○袴

伊勢　野菊子

私の奉職して居る學校は、眞實に田舍て尋常科の生徒は未だ袴を穿きませんのよ。今年高等一年生になるべきのが尋常五年生となつたので、又袴が穿けないと大變失望しましたから、穿いても差支無いと申ましたらソレハ〳〵大喜びにて、毎日折目正しく大切にはいて來ます。ほんとうに可愛うございますよ。

五等 ○テニス

讃岐國周吉郡中條村字原田　高井きよ子

私の兄弟姉妹は二百人餘りありまして、高等科は五十人近く居りますが庭が廣くありますので、毎日テニスをします。もう今頃は先生も同樣になりまして他の學校の生徒と度々競爭しますけれども未だ一度も負けたことはありません。それを樂しみにして勉強しますから學問もよく出來ます。

○兄弟十一人

下谷　小川とも子

私の家は十一人の兄弟がありますそれに今年から一番末の妹も學校へ行く樣になりましたので兄弟のこらず學生でありますそれ故朝などはあちらでは洋服をきるやらこちらでは袴をはくやらまるで戰爭の樣です。おしかしこれまで一度もあらそひなどした事はありませんそれは常に父母から家庭の事に付いていましめられて居りますし又兄姉も我等をいたはつて下さいます。

○子供の日

豐前　石田百合子

先日私等の教會では日曜學校 生徒の爲めに子供の日と云ふ會がありました、壇の前面には色々な草花がならべられてあります、それに對してまだ五六才の無邪氣な子供が居ならんでをとなしくして居ます、天眞爛熳な口からは美しい讃美歌が出ます、無邪氣な口からは尊い祈が出來ます平和な一日でありました。

○麥飯先生

上毛　元子

先生麥飯を頰張りながら生徒を見廻し「コレ委勢よくして食べなさい！コラお前のお辨當は白飯だな、先生があれ程不斷云ふのに、なぜ麥飯をもつて來ない……なに內て煮ない……煮て貰ひなさい、米の飯など勿體ない……野村、お前のお辨當にも麥が雜つてをらんな」「先生こゝに三粒あります」といふ具合、誰が云ひ初めたか麥飯先生と渾名がつきました。

○實習

相撲　光月女

私の學校では男女共毎月一錢づゝ出金して、毫刈、髮結の實習をして居ります。男女何れも諸先生がかんとくになつて、男子は一月に一回、女子は一週に一回づゝ、高等三、四年の方が下級の生徒のを刈結して居ります。

○學校の華

熊本市　近野春子

浪子樣が退校なさいました。浪子樣は、妾の學校で第一の勉强家なので、いつも、首席を占めては、ほんに、學校の華だと、皆樣がお褒めなさるのでした。不束乍ら、妾も負けてはと勵みますけど、どうしても殘念です。時には、妬み心も出ぬではありませんでしたが、今となつては、殘り惜くて堪りません。

○家に居る

肥後　桑本松子

學校は第二番目の家で第三番目の家は嫁家ですとさ！今私は第一より第二の家へ日毎通つて居ます！してやがて一度は第三の家へ嫁かねばならぬ人であるから勉強せねばならぬと先生から教はつて家に歸りて御母さんにいつ迄も家に居さして貰ふように泣いて願ひました。

○新らしき校舍

福井市　岡本美規子

私等の學校の校舍は今度また一棟新らしく建ちましたその中には割烹室も圖畫室も有りますその割烹室は廣く甚だ便利に出來てなりまして其の中に白き割烹前掛をなして立ち働く姿は實にかひがひしく有ります又圖畫室は階上に有りまして兩側共に外面に向つて有つて春の日影は長閑にさしそへ且つ見所よく此の室に入るから心もすが〳〵しくなります此の中にて私等は優美高尚なる精神を養はん爲我最も好める繪畫をかきつゝあるのです。



誌友倶樂部

朝顔や
地に咲く
ことを
あぶながり
千代

開き封

○露領より　當地は漸く百花爛漫たる花の世界となりました私は至つて無學な者で御坐いますがそゞろ懐郷の念止む能はずつまらぬ日を送つて居ます諸姉樣何卒御交際下さい又小説雜誌類に不用の物が有りましたらお送り下さいお禮には西洋美人エハガキ又は西洋品を差上升、外國郵便法は郵便局でお聞き下さい（露領浦鹽斯德支那街宮脇楓子）

○花言葉の教示　諸姉樣の中にでもし歐米の交際社會に使用せらるゝ花言葉御存じの御方あれば御教示下さいませ、四つ葉クロバーは何々パンジーは何々、とか、なるべくくはしき意味をたくさんにれえ御禮としてはきつと押し花はがき二十枚づゝ差上げます（東京市芝區三田四國町二番地一號小西方郡こてふ）

○自作に限る　御自作の和歌俳句美文小説等々御惠送下された御方には必ずく私の作を御送り致します（大阪市北區松枝町七十六番地田宮滋）

○新聞の交換　仙臺の愛讀諸姉の中で誰方か其地の新聞送つて下さいませんか、お禮に函舘毎日新聞をお送り致しますから但し毎號〳〵。（函舘旭町二百四十番地小野ゆき子）

○自作の造花　本誌愛讀の皆樣御交際を願ます又私は拙なきながら造花を致します故御望みの方は何なりとも御送り下さい其品に應じて早速作つて御返禮いたします但し毎月發行の雜誌るいだけはおことはりします其外の品なら何でも宜しうございます（下谷三輪町六一細谷けふ子）

○諸國廻文　誌友の皆樣に、女子文壇愛讀者の内にて有志の方々にて廻し文を作り各々國の事など書いて廻しあつたら利益になる事もありませうし又愉快だらうと思ひます御贊成の方はありませんか、もし御贊成の方があつたなら始めませう、（陸奥八戸町二女史）

○小切賣る店　誌友の皆樣の中で何誰か大阪市内で縮緬や御召や朱珍の小切（押繪や人形の着物やらに出來るやうな）を賣てゐる所でも知ておいでゞしたら誌上てお知らせ下さいませ（ぬか大阪田中とき）

○寺の子　あまり澤山な方から繪葉書をお惠み下さいましたので不束な妾には何と致しても末々までは御交際を願ふ事が出來ません夫れて今私は寺に生れた者で御座いますから失禮ですが寺にお生れの方々にだけ以後よろしく願ひますから今後初めてのお方でも寺號を記してお送り下さいましすぐ御返答致します（三重縣員辨郡白瀬村字山口善長寺院内瀬木としえ）

○女子職業學校生に　東京女子職業學校へ御通學の御方樣永久に御交際致したうございます私は今年土佐女學校をすみましたばかりてすどうかよろしく（高知市桝形一七包國眷意）

○新體詩ばかり　みなさま、妾ははらからもない淋しい日を送るもので御座いますが新體詩が好きですから御自作を奇麗な永く保存される樣な洋紙へ清書なすつて御送り下さいませんか。御返事はやはり妾の新體詩でいたしますお手紙や何かは決して御入れ下さいますな、ただ歌ばかりを、これには少しわけのある事で御座いますから（本郷龍岡町鹿野内村澤とし）

○人の妻　京都の御婦人に知己を求む。但し女子文壇愛讀者にして眞面目なる友として御交際を願ひたひもので御座います私は人の妻て御座います御思召の御方は下名へ御はがきにて御住所御通知下さいますれば七八月頃上洛のせつ御訪問申上ます（大阪市北區富田町四〇増田千代）

▲記者曰、本號から誌友倶樂部原稿中の特色あるものは「開き封」と題し別欄に掲げます、諸嬢よ願くば特色ある文章、特色ある方法を以て交際したまへ。

諸嬢の交際

○皆樣の中に、ハーモニカ手風琴、吹風琴ヴアイオリン洋琴、いづれにてもよろしうございますから不用のがございましたら、御ゆづり下さい御禮の事は打合せいたします（下野眞岡町瑞川樣方磯みい子）○皆さん女子文壇愛讀者の懇話會を開かうではありませんか、記者さんにも賛成を願つて樂しく半日を遊びたいものですどなたか發起になる方はありますまいか、妾もかげながら力を盡します（在京ＵＯ女）○諸姉樣方よ、どしく繪はがき玉章の交換を願ひますお返事は、きつと（北信岳北往庾小林しん子）○何卒御交際下さい、遠方からお賴みいたします（北海道歌棄郡有戸村橋本岩子）○親愛なる誌友の皆樣よ永久に御交際下さい繪はがき玉章の交換をも御願申ます（三重縣宇治山田市尾上町七十六山田越子）○敬愛なる皆樣よ私は音樂が何より好きです皆樣の中で松風はなれ小島都の春など御存じの方は敎へて下さいまし又私も洋樂を敎へます同好の方は親しく御交際を願ひます（埼玉縣北足立郡與野町字上落谷沼野清子）○懐しき誌友の諸嬢さんよ妾は片田舍に住む不束ものですが此後玉章や繪葉書の御交換を願ひます返事は必ず致します（千葉縣安房郡佐久間村大朋滿藏寺内吉田天爛女史）○皆樣御かはりはございませんか御尋ねいたします私は今年十六歳の少女です末永く御交際を願ひます御玉章や美しい繪葉書あみもの、交換も願ひます至つて正直ものよ御かけて御返事はいたします（伊勢鈴鹿郡關町新所稲島初子）○誌友の諸嬢よ私は母がなく、友達もなくて淋しく世を送る者よ何卒繪葉書玉章其他の物の御交換を願ひます（京都東山永觀堂前鹽田末次郎方みどり）○今日此頃誌友の姉上樣方もさぞ御健かでありませう一寸誌上で御伺ひ致します時に姉上樣方よ舊に倍し自筆繪葉書交換なし下さいませまづいてすが早速御返葉致しますから（羽前國南置賜郡廣幡村小山田清野きよを女）○誌友の皆樣方妾に御うるはしき御筆跡の一片を惠み給へ倘とこしへに文の音づれをも送らせ給へ（神奈川縣愛甲郡南毛利村小林英子）○誌友の姉上樣方よ私は繪畫練習致して居る者ですから姉上樣方の中で同じ趣味を有して居る方と自筆繪葉書交換を致しとう御座います返葉は早速差上げますから是非御惠み下さいませ（山形縣南置賜郡廣幡村小山田清野萬次郎方幸子）○みな樣よハーモニカ御不用のお方ありますれば御惠送下さいな乾度お禮は致します又繪葉書玉章の交換を願ひます（紀伊國北牟婁郡相賀村大川とせ方深）○妾女學校卒業後學、生花の練習中にて世間見ずの不束ものですが今度當壇の愛讀者となりましたドウゾ先輩の諸姉樣お心易う玉章寫眞の御交換を一々御返事否御指導を仰ぎます（大阪四區松島町二ノ三八㋑西川内松田興佐）○親愛なる誌上の諸嬢樣よ何卒繪葉書玉章の御交換をお願ひ致します但可成文句を英語にて認めし物をも歡迎致します返書は必ず差上ます（大阪府下中河内郡堅下村大字法善寺三九森田浪子）○手許に風景のはがき及種々の雜誌澤山ありますから皆樣ゑはがきの御交換を御願ひ申上升（京都市下長者町新町西に入上坂弘子）○姉上よどうか繪へがきや寫眞を送つて下さいそして先着者十名に限り寫眞を以て御かへし致します（廣島縣豐田郡南方村兒原兒玉春翠）○妾は片田舍の少女ですが何卒繪葉書や玉章の御交換なして頂戴な誓つて御返禮致しますわ（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間、藤野琴月女）○どうぞ新聞紙や雜誌及びレターの交換なして下さい永久に願ひます（京都府加佐郡西大浦村瀬谷浪子）○一寸皆樣私も此の文壇の愛讀者なのですからどうぞ玉章の交換をして下さいれきつとつたない筆ですがお返事差上ます又めづらしい編物お持の方はゑはがきか小說と御取りかへ下さいれ（東京市深川區富岡門前町十一井上秀子）○希くば賢明なる本誌愛讀諸嬢御交際の端緒として繪端書の交換を願ふ（新潟縣北蒲原郡聖籠村大字蓮野第四十三番長谷川普藏方にて高山かをる）○諸姉樣妾此度紀念のため各地の名勝古跡の寫眞を集めようと思ひますから何卒御惠み下さい繪葉書でもいゝのよ其れから寫眞の裏面へ明細に說明して下さい（北總船穂村松崎平川澄江子）○諸姉樣！繪はがきや玉章など御送り下され淋き妾の心を如何許り嬉ばせし事よ猶此上一層深き交りを結ばれん事を伏して御れがひ申します今度下の所へ轉りました故御知らせ致します（大阪市北區松枝町七六田宮かをる）○情けふかき姉上樣よ此後も繪葉書や玉章の御交換を御願ひ致します（京都市新烏丸夷川上る戸野喜久榮）○至て愚な者てすが何卒御心やすく御交りを永久に願升（和歌山縣那賀郡

長田村矢牛田等）○繪葉書寫眞玉章の御とりかへ御交際いたしたいのです（奈良縣磯城郡三宅村字伴堂松井清五郎内にて松井光代）○諸々の姉君方よ私は片田舎に淋しく暮して居る者ですが此三月より愛讀者となりました繪はがき玉章雜誌穪物の交換を願ひます（福井縣大野郡富田村土打森永初枝子）○何卒繪葉書玉章御寫眞の交換をも御願ひします妾は只今京都の諸紀念物を廿組程用意して居り升から地方の名所はがき又は紀念物と御交換を願ひ升（京都新京極四條上ル櫻軒方上田文子）○私も近來女子文壇を無二の友として居ます諸姉樣宜しく御交際を願升（京都市寺町六角南入上田徳）○肉筆其他繪葉書及び御手紙御送り下さい早速自派繪葉書御返し致ます御手紙の方は直ぐ御返事致ます（京都市油小路通り五條上ル木村さく方久子）○感情深き諸嬢樣よ不肖の姿をも御見捨無く御交際下さいまして誠に有難く存じます何卒不相變炎人繪葉書や玉章や錦地の寫眞れ又御寫影等の御交換を（岡山縣上道郡玉井村若本磯明方星貞女）○各地方の珍妙奇習な知り度いのですが詳しく御通知下さる方はありますまいか御禮は乾度致します（神奈川縣足柄下郡湯本村塔の澤士屈泣影）○諸姉上君の御親切により今まで御交際な下さいました御心誠に有がたう存じます、さて此度都合によりまして是非御交りを止める事と成ましたが悪からず…（宮城縣にて英子）○私は今月から本誌の購讀者となりました皆樣宜しく御交際の程を願ひますよ私は同胞がないものですから皆樣が戀しくつて何卒寫眞や繪葉書を送つて頂戴な乾度返禮致しますよ（磐城國石城郡入山炭坑醫院内、久田勝枝）○妾のところに畠太子殿下行啓紀念繪葉書が御座いますから美しい繪葉書に歌や詩を認めて送り下さい御禮として右の繪葉書を必ず差上げます（大分縣速見郡東山香村山中畠種岡内岡部秋子）○昨年妾に御玉章を送られた御方があられましたが横濱から當地に參りました故御返禮洩れの御方もありましたが何分御許し下さい今後厚く御交際の程を願ひます（箱根湯本村遊山のぶ子）○私は故郷遠く離れて當地に參つて居りますどうぞ皆樣御交際を願ひます男の方はおことはりいたします（臺北新北門街一丁目四番戸熊谷濱子）○咲いたかと思ふた花もいつしか散りて皆樂の頃となりました記者樣初め皆樣は御變もありませんか御情ふかき皆樣の恵によりて花去り花來る春秋をたのしく送つて居た妾は此度都合によりてなつかしき皆樣と御交際を斷つべき運命になりました、然れども妾は決して本誌とはなるゝ心はありません陰ながら皆樣のやさしき御すさびを拜し共に本誌の御隆盛をいのり居りますあゝ情厚き諸嬢よ後日の再會を期していささらば、（大和眾山英子）○誌友の皆々樣私は故郷を離れて當地に居りますが高等女學校卒業の方が相當の學力あつて文學趣味のある方々と御交際を願ひます（青森縣西郡深浦學校内船水白梅子）○皆さん不束な妾ですがどうぞお見捨なく御玉章や繪はがきの御交際をして下さいな、尚神戸の杉山とし子樣、仙臺元柳町の英子樣はあんまりな方ねお返事も下さらないで（東京芝區中門前町一ノ十一長谷川秋葉樣方靜枝）○嗚呼誰かしき未見の友よ、華が散る浪速の里に孤影寂寞の身を悲める我れを哀れと思召す御心おはさば御玉章に、繪端書に若くば御交際を許し給へ、大阪西區九條新道九拾四番地白井樣内撫子）○數ならぬ私も今回誌友の仲間として頂きましたから孤弱不束ものですがお見捨てなく御親交が願ひとう存じます（尾張東春桃田醫院内林滋子）○私は今迄別に雜誌などに着目した事が在りませなんだが今度或るお友達から女子文壇を頂き、始めて雜誌の趣味を知りましてよ、未熟な私では御座い升が宜しく交際を願升（名古屋市櫻町吉田たま子）○諸姉樣妾は大宮通三條下ル佐々木武助方へ宅替へいたしました故御知らせもうします（田中文月）○幸多き諸姉樣よ御かはりおはさずや妾は淋しきしづが家に朝夕のすさびもなく自然の音樂をきゝながら文壇を友として居り升文學はごく〳〵好きですから御情深き方方は永久の御交際をゆるして頂戴、繪葉書なり御玉章にて子（仙臺北六番町六十三橋本親子）○私は北海道小樽に居りまして本誌を初號から愛讀して居つた者でしたが昨年四月以來投書する事を見合せて居りました所今度又々投稿する事が出來る樣になりましたから何卒今後宜敷御交際下さい尚私と同居して居ります山中翠子さんとも御交際下さい（小石川區茗荷谷町五十二番地梶水仙子）○私は片田舎に淋しく暮して居るものです誌友の諸嬢樣よ繪葉書やお寫眞の交換を願ひます御返禮はすぐよ（千葉縣印旛郡船穂村松崎鈴木はる子）○私は先月より女子文壇の愛讀者になりましたから誌友の姉樣方よ何卒玉章や繪葉書の交換を願ひます（千葉縣匝

登郡東陽村宮内石井のぶ子）○御交際下さる方は繪葉書か又は樂譜に俳句を認めて送つて下さい御返事は屹度致します、また玉章の御交際も（丹波南桑田郡龜岡町本町十四伊東菊枝）○誌上の博學なる姉上よ私は此度實に／＼なつかしい御交際をやめなければなりません他ではありません遠く海外に嫁く事になりました姉上様の御送り下さたなつかしき寫眞や繪葉書大切にして置きますから御安心下さい仙臺の笠原つや子、近江の樋口あきら子、愛宕郡の或る一人京都の有野貞子、神戸の滑川しづ子、大野やす子千葉の北田信枝子、各位様に厚く御禮を述べ合せて讀者諸孃の健康を祈ります（陸奥小野寺まき子）○誌友の皆様よ妾は繪葉書が大好きなのよだから自作の和歌や俳句を書いて盛んに御交換を願ひます（上毛多野郡小野村大字立石村七飯島喜代子）○御情け深き誌友の御姉様方よ、どうか私にも御交際をなすつてよ私は輸出羽二重の名ある川俣近在のものです、繪ハガキ、玉章御送り下さい御禮には川俣名所繪ハガキ及玉章を進ぜます（福島縣伊達郡福田村羽田入發喜代子）○妾は今年十七で女學校三年ですが不幸でお母さんに四月死に別れましたから内に居ることになりましたどうぞ繪はがき玉章の御交換お願ひ致します（信濃東筑摩郡梭現原雪見子）○紀伊の畑中よし子様濱松の中村雪子様京都の橋本立榮様大連の長谷きぬ子様嚴くてしたれもうおわすれなさつて私いつまでも／＼ほんとの姉様と思つて居りますのよ何うぞ御交際下さいおねがひですから（大分郡日岡村牧富久子）○妾は田舎に淋しく暮して居る淺學無才の者ですが音樂に趣味を持つて居ります愛讀諸姉様どうぞ御交際を願ひます（近江彦根岸橋十五町目坂重子）○私は學を終へて田舎にかへりました皆さんどうか繪はがき交換を願ひます（熊本縣八代郡下岳村寺尾文子）○妾は到つて淺學の者ですが諸姉様末長く玉章の交際をして下さいまし（大分縣東國東郡西安岐村實際寺門前小川頼子）○諸姉上様私はまだ十四歳でまことに無學なものですが交際を願ひます又手紙を頂戴きつと御返事いたします（大阪市北區中ノ島宗是町三十八ノ三川瀬みどり子）○誌友の御姉様度々繪葉書の御交換有難御座います將來も不相變御願ひします（山口縣玖珂郡南河内村貴船艶子）○懷かしき誌友の姉様よ妾も文壇のお仲間入りをしましたから以後は何卒永久に御交際を願ひます（茨城縣新治郡牛渡村大字牛渡石川とよの）○波の音ゆるき琵琶湖畔に詫しく日を送る至つて淺學の一少女ですが以後親密に神聖なる御交際を偏に御願ひ申します、殊に哀れを催ほす様な唱歌の譜、和歌、短文、繪葉書等の交換を切に望みます（滋賀縣東淺井郡大郷村門巡一三二四尾かめ子）○記者様はじめて御目にかゝります私は誠にふつゝかなる者でありますが御情ある諸姉上様と玉章の交換が致したいと思ひます故交際らん内へ御とりもちを御願ひ申上ます（京都市岩上通錦小路東入る伊藤八十郎方常川福子）○記者さま御無事に候ふや私は新參者ですから以後何分よろしく御教導を願ひます次に誌友皆様以後御交際して下さい（熊本市明午橋通九六緒方彌吉方入江しづ香子）○記者様お久しう御ざいます私一昨年の秋から一寸も誌上に顔をだしませんでしたと云ふて本

傑作　優篇

考へよ　作れよ

本誌増刊『文壇の光』の原稿締切は八月三十一日です、諸孃よ今の中に好い作を考へて置かないと、しめきりの日限は猶豫なく近づきます、御注意を促す

誌の愛讀を忘れたのではありません増刊とも皆愛讀して本當に月々待ち遠しい位です之から拙きながら投書いたそうと思ひますからよろしく御願申ます誌友の皆樣御交りください 返信は必ずいたします（信濃上田 二二五八あい）○最も親切なる記者が綴く本誌は實に他に例を見ざる所で私も早くから盛つてゐましたが投書するのは今度が始めてです、皆さんよ何卒交際して下さい、私の地方で投書する人はすこしもありませんから萬事分らぬ勝ちです、どうかあはれと思つて誘ひて下さいな、（三河東加茂郡足助學校内鈴木いつほ）○誌上の諸姉樣よ私は誠に不束者ですが何卒文章和歌の交換を願ひ升（芝區愛宕町二番地廣瀬方香雨）○親愛なる諸孃の君よ色々の都合でしばらく皆樣と別離して悲しんで居りましたがまた御仲間に入れて頂戴何卒今後は前同樣盛んに御交際を御願します（東京市日本橋區堀江町二丁目十番地 佐藤なみ子）○諸姉上樣私は田舍にくらして居るものですどうぞ末永く妹と思つて御交際をお願ひいたします（千葉縣匝瑳郡福岡町八日市場平野梅子）○滿天下の諸姉樣よ妾は片田舍に交際な友として寂しく暮すあはれなる少女です何卒あはれみを以て以後御交際下さいませ（近江國坂田郡長濱町字御堂前森吾次郎内森八重）○誌友の奥心なる諸孃樣どうか今後繪葉書の御交換を御願ひ申します、自作の水彩畫も結構よ私は返信せぬ樣な事は致しません、御安心の上御交際して頂戴、（京都市東洞院四條南へ入正田内松外子）○親愛なる愛讀者諸君よ不束な者ですが御交際を御願ひしますそして繪葉書御玉章等の御交換願ひますキツト御返事いたします（島根縣松江市末次本町中脇はる子）○御自筆の繪はがきをお惠み下さいな妾の書いたので乾度御返し致します（東京芝區愛宕町二丁目十四大村ふて内大村喜代子）○皆さんの内に水彩畫御研究の方は肉筆の水彩畫御送り下さいませんか御禮には下手ですが私の書いた水彩畫の繪はがき御返し致します（京都市高辻新町東入中島ふん）○私も愛讀者の一人になりましたから何卒末ながく御交際を願ひます（神戸市葺合町字熊内勝田樣方松田蕗笑子）○親愛なる誌友の諸孃よ玉章エハガキの御交換を願ひます必らず〳〵御返事致しますから（伊勢國宇治山田市船江町宿瀨とみ子）○珍しき繪はがきを以て速にお返しゝますから何卒御交換を願ひます（富山縣高岡市關町六四 高木辰次郎内高木さき子）○親愛なる未見の諸姉樣方よ何卒々々永久に玉章繪葉書の交換を願ひます、（伊勢國宇治山田市河崎町 山下五郎兵衛方 上田とら）○誌友の諸姉樣よ妾も繪葉書の御交換を願ひ申ます但紀念品の組物で未使用の物でなくつては嫌やよ成るべく上等なれ、お返しには有名なる古跡の非賣品斗りなのよ（京都市下京區元拾組永發子町小林みよ子）○近江八景の繪葉書御持ちになつてゐる方は妾の所持して居る水戸八景の繪葉書と御交換して下さいませんか先着二名に限り水戸名勝の繪はがき三枚別に差し上げます（茨城縣水戸市上市楓小路廿一 根崎方實榮子）○皆さん新井てる子さんて御存じのお方が有りませんか過日葉書を下さいましたが御住所がわかりませんので困つて居ります御存じの方御報知下さいそして枝折、繪葉書の御交換もれ（秋田縣本莊表尾崎町森かく子）○誌友の皆樣先日は美しき繪はがき有難う悉く御返事を差上ましたが中に宛書の解らないのは御返事を差上ませんでしたから御許し下さい又皆樣何卒末永く繪はがきの交換を願ひます（神戸市旭通五丁目百十番屋敷細川みのる）○誌友の諸孃樣よ妾は裁縫女學校に通學中の不束者ですが何卒寫眞繪葉書玉章の御交換を願ます（上總山武郡山迫村餅木松戸たけ子）○女學校を卒業後ホームでさびしく暮して居りますからお情深き誌友の姉樣方よ玉章、繪葉書の交際を願ひます御返事は早速差上ます（茨城縣土浦田宿町小林ふく子）○諸姉上樣土佐の國の名所繪葉書と諸國名所繪葉書との交換なして下さい先着一名には押川春浪氏作の新アラビヤンナイトを差上ます（高知縣土佐郡小高坂四八横田方ふみ子）○片田舍に住する無學の私を哀れと思召し寫眞玉章をお惠み下さいな御禮は必ずいたします（千葉縣夷隅郡刈谷今井なほし）○繪はがきや玉章御めぐみ下されし御方には粗末で御座いますが必ず大磯名所の繪葉書で御返事申上ます（神奈川縣中郡大磯町二宮はま子）○皆樣不束な妾で御座いますが末長く松のみどりと御交りなれがひます（大阪市西區梅本町三五一大神奥枝子）○片田舍に住んで居りますからと云つて見捨なく繪葉書なり玉章なり御交換を願ひますきつと御返事を差上げます（讃岐觀音寺町下市川上方敏子）○諸姉樣妾は昨年小學校を卒て只今家に居ります不束者ですが宜敷御交際を願ひます（名古屋中區丑木町箱與内田島春子）○誌友の皆々樣毎度繪葉書をお送り下さつて有難うよ今後も

相變らずれ、但し妾は下手ながら自筆の斗りお返しするのですから皆様も其積りで御自身にお書きになつたのを願ひます水彩畫は妾殊に好きなのよ（京都市油小路五條北へ入大森與兵衛方はる）○皆様私は未だ誌上へあらはれましてから尙日の淺いのにも係らず段々御玉章御めぐみ下さいまして有がたう御座いますけれど私止み難き事情の出來ました爲め不本意ながら御斷り申さなければならぬ事となりました何うか皆様惡からず思召して頂戴皆様御機嫌よく御勉強遊ばせ（新潟縣數原松枝子）○田舍娘ですが何卒末長く御交際下さい又繪葉書の交換も願ひ升私の方からは繪葉書か又は少年、日本少年、少女界、少女世界などを御禮にさし上ます（上總國長生郡鶴枝町下永吉安藤みつ子）○淋しい者て御座いますが皆様よ兄弟のない私に御手紙で慰藉して下さい私も御返事さし上げ升日本橋に居りましたが左の郷里に歸りました（茨城縣古河町横山町若杉とり子）○私は女學校卒業後さびしくくらしをりますから何卒繪はがきや玉章の御交換をれがひます（茨城縣新治郡土浦町大町石橋とよ子）

圖書換讀

○皆様私の手本に「家庭の模範」「中學唱歌」「明治の令孃」「家庭夜話」「深窓の五歌仙」「女子處世訓」其他小說雜誌も澤山有り升から、皆様の「新體詩辭典」「俳句作法」「乘草」「新俳句集」「秋の草紙」「寒風戀風」などゝ御換へ下さいましな、願ひます（大阪府豐能郡池田町 寺部君子）○諸姉様の內で明星中年二號同六號文庫本年五月十五日發行の分御不用の方はお送り下さいませんかお禮としては私の殘香花、小扇、俳諧紅綠子、小詩國、近代三十六文豪、日本の美文、てにをは教科書、かなづかひ教科書の內でお氣に入つたのをお送りいたします一度紹介して下さい（神戸市兵庫門口町杉山とし子）○化學講義、心理學、普通物理學、外國地理其他秀才文壇、等二百餘册ありますから皆様の許に明治一萬句集、一葉全集、滑稽明治歷史、雜誌としては理科畫報、皇族畫報、科學世界、ハーヒー雜誌、手紙雜誌、文庫等御持ちの方に何卒交換して下さい（新潟縣佐渡郡畑野村與野江谷 川桂月子）○私は霞が浦の北の里に淋しく暮して居ります の御心安く御交際を願ます又古雜誌小說どんなても宜しいから御惠み下さいませんか私よりは霞が浦名所繪葉書を以て必ず御禮します（常陸新治郡牛渡村勅使塚方白菊女）○諸孃よ、樗牛全集、源氏、平家物語、潮待ち草、病間錄、言海、塔影、白羊宮、暮笛集、金色夜叉、同歌、不如歸歌、醉人の妻、青春、乳姉妹、紅涙、夏子、やどり木、二十八人集不用の方は私の小野先生文 かきぶり、三體千字文、こども、臺所重寶記、滑稽教育、大學豫科國文讀本上下、銀鈴、初音草、方丈記、徒然草、枕草紙日本女學全書、帝國文學新年號、趣味新聲、婦人畫報其他數十册の內と御交換下さい（千葉縣夷隅郡古澤村石野靜子）○私の手許に家庭全書第二編と第九編裁縫と手藝育兒の栞女學講義錄第一より第四迄いろ〳〵取まぜ二十五册ばかりありますから皆様何か新刊の小說と御交換して下さいな御うつしゐ下さつた方には近江八景の繪葉書に見ぐるしき私 のもそえて宛名は（滋賀縣栗太郡 上里村大字桐生山本初子）○私方にナシヨナルの一、二、三、ありますからお望みの方は 青春「ハイネ」の詩「ゲーテー」の詩高木良次先生の普通教育算術教科書の下卷いづれにてもよろしうございますから前以て一應何の交換を望むとして申込んで下さい（大阪市南區天王寺六萬體町澤村政子）○皆様私の手許に、藤村詩集、和歌入門、新體詩入門、天うつ波、夏子、明治時代文範、新體詩學、ばらの花小詩國、照子、乙女の戀、朝顔日記、怪光、月しろ、わかれ路、其他女子の雜誌、文學の雜誌等あります皆様の雜誌及小說と御交換致します（福井縣今立郡國高村瓜生三六二吉山梅子）○玉章繪葉書雜誌寫眞自作品女子文壇、何程古くても宜敷くありますから交換を願ひます 其禮として妾は仙臺名所繪葉書奥羽六縣共進會 紀念繪葉書信夫文字摺ハンカチーフ雜誌見惡き妾 の寫眞な以て必ず〳〵御答へ申上げます（仙臺市原町若竹七洲方齋藤寫奥江子）○只今手許に全國名所繪葉書九百餘種と紀念エハガキ數百種に各雜誌俳諧紀行全集其他數拾種あり、皆様 の御不用の雜誌小說寫眞等にて御交換して下さい 御禮は相當の品にて早速御送り申升（大阪市南區數津町岩淵様方にて紫花子）○有難う御座います皆様の御かげで本箱が充ちました 一言謝禮します（印旛郡ゆき）○私の宅にいろ〳〵と不用雜誌がございますのでおき所に困つてなりますどうぞ御不用の御本御持ちの諸姉様は御交換下さいまし（大阪松島町二丁目川村とみ子）○妾は夏目さんの「吾輩は猫」全二册小栗さんの「青春」三册「天才」二册樋口さんの「一葉全集」田山さんの「花袋集」柳川さんの「心の影」右不用

ですからみなさんの中で、天外さんの「こぶし」小栗さんの「戀ざめ」廣津さんの「仇と仇」不用なおかたは御交換下さいませ鄙劣なことはいたしません吉野の名所繪はがきを、そへて御送いたします（大和吉野郡賀名生村久保榮子）○三十九年度の後半期中に發行の文藝倶樂部又は昨年十月一日發行の同誌御不用のお方は御惠み下さい御禮の印として新小説を差上げます、（伊勢國鈴鹿郡關新所町　大原しづ子）○誌友の皆樣方妾女だてらに冒險小説大好きよ若し押川春浪氏の小説御持ちならば何卒御送り下さいな御禮には新小説等で致します尚新小説や繪はがきの交換も（佐賀縣小城郡小城町田尻新聞舖内なほ子）○皆樣、妾、御はづかしいが女の癖に渡米したいの、皆樣渡米新報、亞米利加、殖民世界力行、婦人世界、女學世界、惠んで下さい御禮には新小説、其他小説繪葉書を以てしますよ（福島縣伊達郡福田村　羽田八幾喜代子）○諸姉樣の内で梁川氏の病間錄御持ちの方は妾の加藤直士氏の文藝と宗教と交換を願ひます又文章世界（本年一月號）御持の方は白露集と御交換を願ひます御望みの方は下記の所へ御知せ下さい（山形縣飽海郡觀波川原村長泥町阿部花子）○諸姉上樣の中に島族播雜御不用の方がありましたら女子文壇何册とても交換して下さいませ、一卷九號から今迄あります（越後中魚沼郡水澤村志賀榮代）○皆樣の中で獨歩の武藏野、獨歩集、運命、花袋氏の少女の戀、藤村氏の藤村詩集御持ちの方は、青海、美文辭書、靜思餘錄、雜木林、詩と美文、玉虫、露路、嫁ケ淵、等と交換して下さいませんか（兵庫縣有馬郡濱湯村四本利介方那須菅子）○私の手許に日用百科寶典三體記事文大家美文資料文章新辭典三體千字文等があります皆樣の漢和大辭林、漢和大辭典、自然と人生、花紅葉、吾輩は猫である、作文新法と御交換下さい古くても關ひません尚新古の文藝倶樂部新小説、數學世界、女學世界、婦人世界等澤山有ますから、他の雜誌類と御交換下さい（廣島縣双三郡三次町字胡子町淺田邦兵衛方淺田秀）○妾讀み古してすけれど初等英語ABC雜誌三十册ほどありますから地方の繪葉書で申込み下さつたなら御禮として御送り申ますそれから皆樣の中で乳姉妹御不用の御方があつたら私の祖國白玉姫、現はれたる女と交換して頂戴なキット御禮しますよ妾御手紙下さつたら神に契つて御返事しますどうか親しき交際を（滋賀縣蒲生郡日野町増治百合子）家庭小説や古雜誌が澤山ありますから何卒御交換をして頂戴な（長門國豐浦郡瀧部局區内末森林きみ子）○愛讀諸姉樣よ只今私の手下に女流文學叢書、思ひ草、和歌八重垣、韻文と美文、美文資典、消息美文硯の海、新派和歌獨習、子規俳句評釋（秋冬の卷）風流廓、蕪翁百話、其の他女子文壇三十册、等不用になつて居ります皆樣のお内に佐々木先生の著の詠歌自在か湖畔の悲歌のお不用のお方はありませんかお取換へ下さるお方は一寸端書で御報知して下さい、お禮として名所繪葉書一組差上ます（千葉縣印旛郡川上村山本藤左衛門方山本きかど）○妾の處に作文良材明治の家庭不如歸露子花螢姫孤島の秘密等の小説やテニソンの詩又名所寫眞等たくさん有りますから皆さんのハイオリンやハモニカや造花や寫眞掛け其他皆樣の寫眞でもよろしいから御送り下さい（茨城縣稻敷郡阿見村大字大室舟渡坪日下部勝枝子）○姉樣方妾はみゆき樣と從姉妹です以後お交際下さひな妾の所に、行く春、花守、青海、一葉全集、草枕、鈴子、夏子、不如歸、妾の半生涯、美文斷片、春野、等の不用書があります故自製の附突乘寫眞手製おし花か繪はがきてお申込下さい着版にさし上ます又寫眞や玉章の交換を願ひ升（信濃下高井郡往郷村夜新田青木まさ子）○誌友の姉樣方よ私の許に二筋道不如歸姿見族想夫戀ひとりぼつち其他雜誌百册ばかり不用ですから皆樣の御寫眞封入御申越し下さい又御寫眞の交換もねがひます（千葉縣舟ばし町川島市太郎方はつ子）○誌友の御姉上樣私の許に肉彈、興味の旅行、不如歸、戀無常、前後篇、有情無情、女學世界、女子文壇等ありますから御望みのと換へて下さいな（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間藤野浪子）○圖書交換を願ひます私の手元に醉林、天打つ浪、妙な男、情の人、伯爵夫人、女子書翰文下川歌子思ひ出の記等がありますから姉樣方の何か相當した者と御交換下さいませんか寫眞を添へて上げます（長門豐浦郡田耕村上大田高森うめよ）○皆さんのうちに新選一萬句や和歌自在御持の方は私の女學世界と交換して下さい又見苦しき私の寫眞も差し上ます（常陸國新治郡田余村上玉里須崎せい子）○誌友の諸姉樣よ何書を問はず文學雜誌小説繪はがき寫眞の交換を願ます返禮はきつとよ（島根縣能義郡布部村山本谿市内山本八重子）○諸姉君の内に今年の女學世界少女の友初等英語講義錄伯爵夫人其他面白き書をお持ちの方は私の婦人世界女學世

界等の文壇小説及韻文美文集女子製法日本料理法たへのゆきかひ女子裁縫又女子書翰集一より十迄徒然草新編女子用教育學など皆て五十册程ありますから交換して下さいませんか和洋裁縫全書刺繍袋物講義お持ちの方は御ゆづり下さるか又右の書と交換して下されば必ず私の製作品をそへて御送り申ます（福井縣大野郡富田村七打森永初枝子）○私の手許に新不如歸、ハイカラ令嬢、緣不緣、貞か不貞か、理想の妻、可憐嬢其外の小説あり、見たいお方は申込んで下さい、（宮城縣玉造郡岩出山町仲町大谷まさ子）○私の手もとに「月魄」「己が罪」等あり、御入用の方は寫眞と郵券封入申込次第私のみにくき寫眞と共に送ります（函館區辯天町三番地角本菜櫻）○三十七八年の日露戰爭實記四十册不用になつて居りますから雛子ハイカラ令嬢玉むしあはがき等と御交換下さいませんか（韓國龍山朝日橋詰島山内くみ子）○月世界旅行西洋奇説絵本德川十五代記英國奕獸詠史百首等の不用書あり姉君のハイカラ令嬢ハムレツト多情多恨其他面白き小説と御交かんをこふ先着二名へは富士六合目の朝日寫眞をそへ神にちかつて（千葉縣海山町山中若子）○妾の許に文藝倶樂部婦人世界女學世界女鑑軍國の婦人女子遊學案内、端書文學等其他種々の本がありますが皆樣の御許に、不如歸、不如歸の歌、濱子、己が罪、夏子、金色夜叉の歌、天うつ浪其他の小説類と御交換を願ひます（常陸眞壁郡眞壁町中里ときは）○妾の許に女學世界女子文壇婦人世界女子作文大全及びしなさだめ編物の雛形全福島少佐単騎旅行、御國、等其他色々あります皆樣の方に日本新女禮式己が罪ハイカラ令嬢よめがふち思ひ出の記等がありますなら私の本の中の何れかと交換して下さい（山口縣都濃郡鹿野村山本よしの）○諸嬢の内で「ホトトギス」「ハイカラ令嬢」、「霓風戀風」「濱子」「小猫」等御不用の方は私の寫眞美人、美人石、少女世界、少女界等とおかへ下さいな（大阪市南區安藤寺橋一丁目百十五清水方久子）○諸姉樣の御許に藤村詩集、破戒、ゲーテの詩、二十八宿、白羊宮、みだれ髪、及び五月號の新文林御不用なれば私の英和辭典、一枝の筆、思出の記朝ばれ葎草文章世界女學世界などと御交換して下さいませんか（南總千町村荻原渡邊柳子）○皆樣の内で會津の白虎隊の本お持の方が御座いますなら御ゆづりか又拜借さして下さいませんか男女何方でもお禮はきつと致します、（神戸市三の宮町三丁目四一松田きよえ）○私手許に小野先生の女子手紙の文衣袋かゞみ不如歸のうた婦人世界、女學世界、女子文壇五部外に雑誌數十部有りますから諸姉樣方の中小説もしくは寫眞にて御申越下さい其の節一寸御望みの品名御知らせ下さい（上毛大間々驛前新井てる）○姉君方にて春陽堂發行夏子の下及び高倉長右衛門己が罪御持合あれば妾の言海、青春文藝倶樂部と御交換願上候御郵送下されば直ちに送本致します（京都府相樂和東村藤澤喜助内大内通洋子）○私の手許に明治四十年一月より四十一年五月迄の婦人世界不用になつて居りますから諸嬢樣の中に御入用の方がおありなさるなら絵葉書にて御申込下さいませ化粧かゞみ衣袋かゞみもありますよ但し何月發行何册御入用かをお知らせ下さい必ず三日以内に御郵送致します（岩手縣稗貫郡花巻河口町梅木幸子）○私の許に女子文壇四十册外に中學世界、等八十册許り持つて居ります、皆樣の中で玉蟲、美文作法詩人、文章世界、言文一致文範等と御交換下さい又美しい絵葉書で御申込の方には御望のを差し上げます（神奈川縣小田原幸町二石井米吉方野ゆり）○妾の許へ何處からとも分りませずたゞ神田とのみの消印で新文林が届きましたが姓名が不明なる故御あづかりして置きましたお包紙は博報堂書店のです（栃木町福井八重子）○姉樣達妾の手許に文章世界新小説、文庫其他色々ありますから樂譜趣味小説などゝ御交換下さい（大阪府西成郡南浦江三八一高瀬方安達清子）○諸姉妹等の御方々に夜の風。沖の小島御持ちの方は何卒御一報を願ひたし譲られたし私の處には思ひ出の記嵐風三册あります（八戸町岡田裁縫店近藤なほ子）○誌友の皆樣私は兄弟も姉妹もなく只雑誌や小説を唯一の友として居りますのですがどうかお讀み古しの雑誌か小説かが御座いますなれば二三日御貸下さいませたとへ表紙が破れ汚れて居てもよろしう御座います讀次第お返し申します（岡山市梅町六七石橋春野）○誌友御姉樣方よ皆樣の内に伯爵夫人己が罪濱子夏子思出の記初子集花鳥集御持ちの方は妾の、若菜館、卯花月夜、婦人畫報、新古文林本朝女鑑、女學世界、婦人世界、少女界、少女世界、（何册なりと御望み次第）と御交換を願ひます又石川五衛門、荒木又衛門、大石内藏之助、等の傳記のも御持の方何卒御惠み下さい、私本の外寫眞掛しなり等をそへて御送りしますから（大阪北區曾根崎上三丁目二五八〇田中音

櫻方豐子）

寫眞編物交換

○なつかしい〳〵お姉さま方よ私は此の頃お仲間入をしましたが　どうぞ　皆樣　御寫眞を御惠み下さい御禮に手製の栞て乾度御送り申すから是非々々御交換して下さい（名古屋市中區南桑名町二丁目石田榮子）○妾は紀念の爲め諸讀樣の寫眞ブックを拵しらへたい考へてす何卒御惠み下さい必ず返禮は致します（千葉縣印旛郡安食町川﨑吉平方藤村菊江）○誌友諸姉樣の中て帝國婦人技藝會發行の編物講義を全二册お持の方は妾の新小說、女の雜誌類裁縫書寫眞掛ヘートト袋及びお望みの物にてお禮い致します編物も送つて下さい（東京府下町田村池田津散子）○妾は若き娑新小說不用てすが皆樣の內て寫眞掛及手袋其外色々の編物をおもちの方は下名へ御送り下されば御望のを差上ます（東京府下町田村柾谷ます子）○モーシ誌友の皆樣、樂人繪葉書を送て頂戴な御禮には妾の作つた歌書を一葉差上げますよ、次にお寫眞に面白い小說か、ひぢつきか、編物か、最近の破損なき文藝倶樂部か婦人世界かを添えて送て下さつたお方には妾の大額面の俳句集か漢詩雜誌か和歌集か、何れも紀念物としてお好によりどれか一つに先着者九人に限り妾の最近撮影したる七分身に取りたるカビネ形の寫眞を添えて返禮します但し男子の方はお斷りてす（上毛佐波郡赤堀香林江澤擧）○妾は諸孃のやさしき手製になつた編物て寫眞掛か又は銀貨入れの樣なものを送つて下さる御方に「ムラサキ」「女學世界」を返禮いたします何方樣もどうぞ送つて下さい（岐阜縣金山町早川はる子）○諸姉樣何卒編物お惠み下さい上等繪葉書文學雜誌其他お望の物て お禮は神かけてきつと致しますそれから風學の獨習書と云ふ樣なもの御持の方は私の新不如歸の書と御交換下さいませぬか（熊本縣玉名郡長洲町吉田律子）○誌友の諸孃樣、御親密に願ひます、尙私方に皆樣方が乾度御好きて入らつしやる品がありますの、絹レース糸の編物か絹ハンカチーフ御惠み下すつた方に御送り申しますから澤山申込んて下さいまし（大阪市南區北桃谷町三十四番地古川榮盛）○誌友の御姉上樣方よ何卒寫眞を御交換なすつて下さいな、ひじつきしなりなどもれ（千葉縣長生郡日吉村錫谷區齋藤秀子）

○誌友の諸姉上樣におねがひ申します妾は片田舍に居りましたのてすが學校の都合に依りまして當地へ初めて來まして日々裁縫學校へ通學致して居ます不束者てすか繪葉書、玉花、寫眞などの御交換を御願ひ致します御返事は美しい繪葉書に妾の寫眞七枚丈け有りますから先着七名樣に添へて御返しいたします妾は只取なんか決して致しませんからどうか永久にお願致します（神戸市荒田町三丁目百六十二ノ二十一沖樣方東川幸子）○本誌を愛讀せらるゝ諸姉樣御寫眞編物等の御交換を御願ひします御寫眞を御惠みの方へは妾の寫眞に舶來繪葉書二枚添て御送致します（神戸市加納町二丁目百九十七ノ四福岡絹子）○寫眞御送り下さいました方には先着十名に限り妾が生日に當り撮影致しましたのに栞をそへて送ります（山口縣都濃郡戶田村八九河津才子）○誌友の諸賢孃よどんな編物ても宜敷から送つて頂戴な御禮には新版小說て乾度致しますから願ひます（大阪西區新町北通一ノ八六眞田彌千代）○御情ある君よ何卒妾に西洋前掛及び西洋涎掛小兒服等の裁方及縫方等御教授下さい御禮は必ず致ます夫れから編物の交換もねえ（愛知縣幡豆郡寺津村四一八齋藤光）○ひじつき栞寫眞掛其他種々の編物お送りの方には面白い小說や雜誌て早速御禮申上ます（栃木縣芳賀郡大內村大字京泉九番地大塚百合子）○御手製の栞や脫袋寫眞等御送り下さい妾も紀念繪葉書や雜誌を送ります！（北海道札幌區北一條西十九丁目鹽講寄宿舍松井睦子）○皆樣ひじつき寫眞造花繪葉書寫眞掛しなり等の御交換を願ひます（小倉市鳥町四ノ一〇三黑田方雜行安代）○諸孃樣今妾の手元に妾の見苦しき寫眞四組と上總の名高き一ノ宮繪葉書六組と種々の繪葉書二十五枚有ります又先着八名には千葉縣地圖一枚宛先着外は千葉新聞一枚必ず全體に送ります、（千葉縣山武郡白里村四六木中里內山やす子）

諸孃と記者

○記者樣私は高等小學すら卒へぬ哀な一少女てすが本誌を讀みまして急に作れもせぬのに皆樣のやうに投書してみたくてなりませんしかしとても無學な私には小說や論文日記の樣なむつかしいのは出來ませんからお笑なさるてせうが新歌論やお歌の樣な手ちかなものだけても出さうと思ひますのよ記者樣それだけにても見て下さるてせうか又皆出されねばいけないのてすか何卒誌上てお敎へな願ひます（京都市中京姬）（記者曰、手近なものから投書しやうとの御心掛は記者も大贊成てす、決して各欄へ皆出されねばいけないと云ふわけはありません、何れかと云へばお好きのものを二三種作つて下さる方が宜しいのてす）

○記者様へ一寸御伺ひ致しますあの投稿する時に記者様へ丈實名を御知らせ致して原稿へは只白藤とか京都夏子とか致すのには如何致したらよろしいでしようか（京都夏子）（記者曰、原稿の片すみへ乞匿名として住所本名を明記し、文題の下へは雅號だけにして置いて下さるのが最も好い方法です、それからお尋ねの誌友くらぶ原稿は別々に認めて下さい）○記者樣に謹んでお禮を申上ます、今度記者樣のお陰樣で此の地によき友を得ました今迄は友もなく淋しく暮す故か病氣勝てこまりましたが、之れからは健全になる事と信じます先はお禮申上ます（韓國龍山司令部官舍原登里子）（記者曰、それは結構でした）、○地方の名所寫眞を御送り申したら卷末にでも御揭載して下さるてしようかね（滋賀縣增治百合子）（記者曰、寫眞は大低載せます、餘り有ふれた景色はいけません、其外お尋ねの一人二葉はいけません、又和歌と俳句とを一つの紙に書いてあつたら沒書します）○記者樣賞品を頂きました圖書切符て直接博文館へ注文しても好いてせうか（元子）（記者曰、いけません本社から賞品にさし上たのですから本社へ請求して下さい）○例に依つて一々お答は致しませんが御申越の通りて姿文はない方の姓名を下に揭げます、併せていろ〳〵の御注意などを下さつた方も茲に出して置きます、麹町、白はぎ。大阪府、森田あい子。越後、徳子。大阪、中山末子。麹町、靜江。御尋ね女史。南品川、町田。伊豆、久保榮代子。隱岐、高井清子。小石川、庭木貞子。いわき、とよ子。黑塊榮代子。淡路民枝。下野、幸枝。大阪、紅子。高宮千惠。新潟、丹露春子。淺田、中村富江。越後、花子。廣島縣、大久保藤子。大阪、唐崎弘子。

諸孃の交際（其二）

○讀者の仲間入をさして下さい御エハガキの交換をもして下さい。（栃木縣下毛足利町柴町裲田孝吉樣方白露より）○妾も以後諸姉樣と御交際を御ねがひ致したうございます。（神戸市加納町三丁目百九十七ノ四福岡絹子）○何卒末長く玉章か御寫眞與入繪ハガキの御交換を願つてよ。（福島縣河沼郡坂下町松井ます子）○皆樣のお仲間に入れて頂きました、何うぞお玉章下さい。（兵庫水木通四丁目五〇松井方露の玉）○私は宮崎縣立高等女學校の二年です諸孃方によろしく御願ひ申ます。（宮崎縣宮崎町上野町二丁目松浦方猪俣榮子）○私も愛讀者です以後よろしく御交際をねがいます。（小樽區稻穗町畑四の千川孤蝶子）○弘前はづれさん御住所忘れまして返事が出來ません此次は必ずいたしますからお知らせ下さい。（晩香坡市東カトバ街一五一奚智子）○妾は第九號當欄て皆樣及び寫眞の交換を願ひましたら隨分澤山申込がありましたから一々先着から發送しましたのに未だに何の御返事がないのがあります又皆に古雜誌て申譯丈のがあります。（大阪中之島秋野俊子）○妾は誌友として皆樣と御交際致したう御座いますから紹介をねがいます。（茨城縣久慈郡大子町上岡大森千代子）○山城の國宇治の里に住める、同情厚き諸孃樣よ御地の名産物なる、名茶を御送り下さいませんか御送り下されば、着次第當地の名産物にて御禮致します。（長野縣北安曇郡北城村楠川器枝）○誌友之諸姉樣よ私は高等女學校を卒業して今は片田舍に遊びて居る不束者て御座りますが御寫眞繪葉書之交換をも願ますよ。（京都府丹後國加佐郡由良港中西源兵衛内中西榮那枝）○何卒以後諸孃に御交際下さる樣に御引合せ下され度此段御ねがひ申します。（三河國額田郡額田町磯川醫院内宮本貞子）○外國に居る御方に御願ひ申ます何卒外國の切手や繪はがきなどを送て下さい私よりも上げます。（弘前市大字田茂木町石戸谷はつせ）○皆さん妾は親しく語ふ友もなく誠に淋しい月日を重れて居るものです御玉章やエハガキ御惠み下さい。（赤坂區新町五ノ六丸山方靜枝）○誌友の皆さん妾は誠に不幸兒て兩親を失ひ世のあらゆる辛酸をなめた者てすが皆さんの中て妾の如き同境遇の方と永久的な交際が致したくございますから其の方は誌上にお名を出して下さい。（山口にて白菊）○おなつかしい姉樣。私は水彩畫をたゞ一つの慰みとして淋しい〳〵月日を送つて居るもので御座ります。御同情の深い皆樣。どうぞ御自筆の水彩畫繪はがきをお惠み下さいな。まことにつたないのてすが。私の畫きましたのをすぐ御返しいたしますから。（京都市綾小路烏丸西入大森方三木秀子）○なつかしき誌友の諸孃樣よ繪葉書の交換を御願ひ申ます。（名古屋西區桑名町三丁目加藤勘四郎方小川元子）○私は獨身者にて日々さびしく暮らして居ます諸孃方寫眞の交換をしませう又嫁が淵、戀か夢か、戀の旅、緣不緣の内一冊なりと御送りの御方私の雜誌に寫眞を添へて早速御禮します六月の文壇に寫眞が出てゐますから御覽被下男子の方てもかまひません。（鳥取縣西伯郡大白村原六二渡邊然消）

新作脚本募集（懸賞）

▲また新たに脚本を募集します▲選者は同じく佐野天聲先生です▲時代物、世話物又は學校で演じ得られるやうな面白い作を歡迎す▲一幕物に限ります▲いろいろの注文は本號に發表してある脚本の評語を御覧下されば分ります▲原稿は二十四字詰、總振假名つきのこと▲締切は九月十五日です▲十一月の定期增刊に發表いたします
▲懸賞は一等金五圓、二等金三圓、正金にて呈す。

文壇餘興　小說談（課題）

▲小說に就いての諸嬢の談話を承りたいのです▲詳細のことは本紙の前號にあります▲しめきり本月二十日

雜報

○脚本の作者に告ぐ。　本號に發表した脚本「愛の程度」の作者、上毛節女の君に告ぐ、送賞の都合あり住所本名を至急お知らせ下さい。

○記事の都合。　誌友倶樂部增加の爲め女醫顧問と、文學顧問と、紹介欄とは本號に載せ得ませんでしたが次號には必ず發表いたします。

○奈良女子高師。　目下建築中の奈良女子高等師範學校は來年三月より開校の筈で文科、理科、技藝科の三科を設けるさうです。

○米國女學生。　日本を觀察する爲め米國の女學生七十名は近々來遊する由。

○富士登山。　本年も女子登山の企があるでせう、富士山上には電話、案内者、雜貨店、郵便局、巡査派出所等の設備が追々整ふさうです。

○綠葉會。　秀才文壇誌友の懇親を計る爲愛讀者が發起となつて綠葉會と云ふを設け本月五日上野公園韻松亭で最初の會合がありました。

○第十號の賣切。　本月一日發行の本誌第十號は非常の盛況にて忽ち賣切れとなれり。

毎號懸賞贈額改正

八月號より實行

▲甲種（短篇小說　美文）
大賞：金參圓
地賞：金壹圓五拾錢
人賞：金七拾錢

▲乙種（お伽噺　日記　文新論文　實用文　新體詩）
大賞：金貳圓
地賞：金八拾錢
人賞：金四拾錢

▲丙種（和歌　俳句　短文　圖畫　餘興　滑稽　歌謠　學校生活）
大賞：金壹圓
地賞：金五拾錢
人賞：金貳拾錢

○各種とも發表翌月廿日に總べて正金を以て贈呈す

定價

女子文壇　毎月一回一日發行　其外定期增刊四回發行（三、五、七、十一月十五日）臨時增刊貳回發行（四月十月例號二倍）

一冊（定期百頁）	前金拾錢	郵税共　計金拾壹錢
九冊（增刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同　計金壹圓〇五錢
十八冊（增刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同　計金貳圓
六冊（增刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同　計金六拾三錢
十二冊（增刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同　計金壹圓貳拾錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢增すと
郵便切手代用壹割增○收入印紙謝絕

〔備考〕
○○定期及增刊は各拾錢郵税壹錢
○○臨時增刊は金貳拾錢郵税貳錢

▲女子文壇社の郵便振替貯金口座は——第壹七貳九番

明治四十一年七月十二日印刷
明治四十一年七月十五日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社
特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

本社へ申込めば至極安全且輕便てあります



東京買物便法

今般本社にては愛讀諸嬢の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌**は特別に**定價の壹割引**其他**文房具化粧品、西洋小間物、玩具**等有らゆる百般の物品は**定價の五分引**其外は手數料申受ず誠實に御用達致しますから多少に拘らず遠慮なく左記の注文心得を御覽の上御申込下さい

申込の心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向か明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に割引に相當する金額と郵便小包料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ特選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便普通運送便にて送り屆けます

○問合と宛所

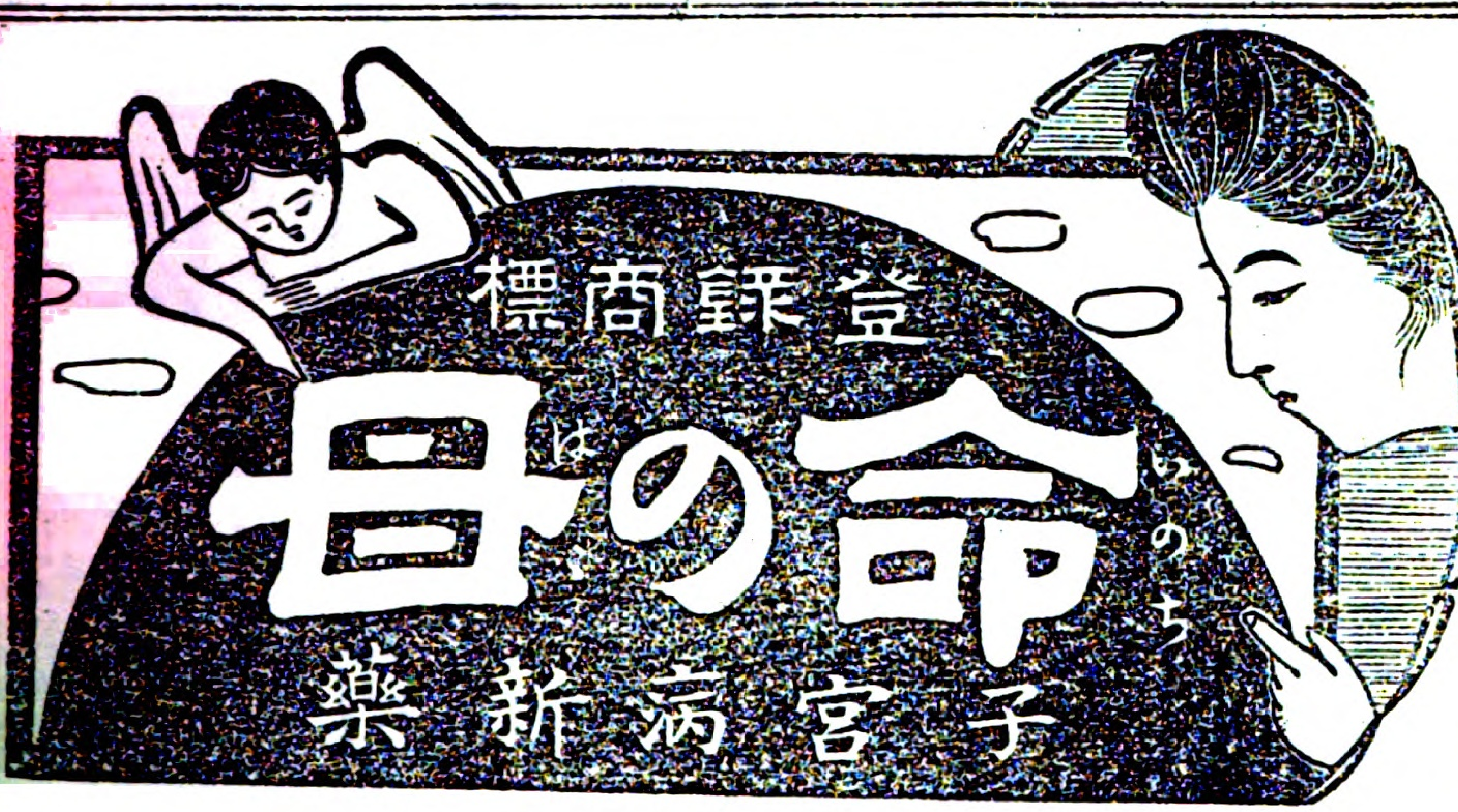
▲買入依託に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て女子文壇社買物用達部宛にして下さい

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（振替貯金口座第壹七貳九番）

女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

明治四十一年七月十五日增刊（每月一回一日發行）
女子文壇
（第四年第十一號）
定期增刊第二 美人草
【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



◉命の母は病婦の命なり

子宮病
陰部の痛みはげしく、白帶、赤帶を流し腰脊へかけて痛み、胃部不快を感じ、心悸亢進し、手足冷へ、身體やせ衰ろへ、流產半產又は不姙となり……

血の道
頭痛、耳鳴、眩暈、呼吸促迫、動氣高ぶり四肢知覺脫失又は冷へ、しやくり、あくび、ひきつけ、下腹より胸先へさし込み痛み正氣を失ひ……

ヒステリー
少しの事を苦にし元氣よしと思へば、忽ち鬱ぎ悲しみ短氣になり、夜眠られず身體ところ／＼痛み細弱となり、恰も其身は病の容物の如き感を覺ゆ

腦神經
頭痛はげしく理解力鈍くなり、神經過敏となりて憂鬱症となり脊髓部に厭な疼痛の感がしたり又は交接を不好或は交接行ふをがへきぬ樣になる……

月經不順
つはり、產前、產後の逆上、めまひ、立ちぐらみ等凡て前記の如き婦人病を根本的全治せしめ子寶を擧げ健母とならしむ……

◉命の母は子なき人の母なり

◉各國藥店にあり

命の母 藥價

試用分	十錢
二日分	廿五錢
一週間分	八十錢
二週間分	一圓五十錢
五週間分	三圓

加減命の母 藥價

五日分	八十錢
十日分	一圓五十錢
廿日分	三圓
二ケ月分	五圓

錠劑命の母 藥價

二日分	廿五錢
五日分	五十五錢
一週間分	七十五錢
二週間分	一圓卅五錢

本舖 東京市京橋區新榮町四丁目
（電話新橋三六〇壹番）（振替口座五〇五〇番）
笹岡省三藥房

女子文壇 無比 定價金拾錢 郵稅壹錢

【東京秀英舍印刷】